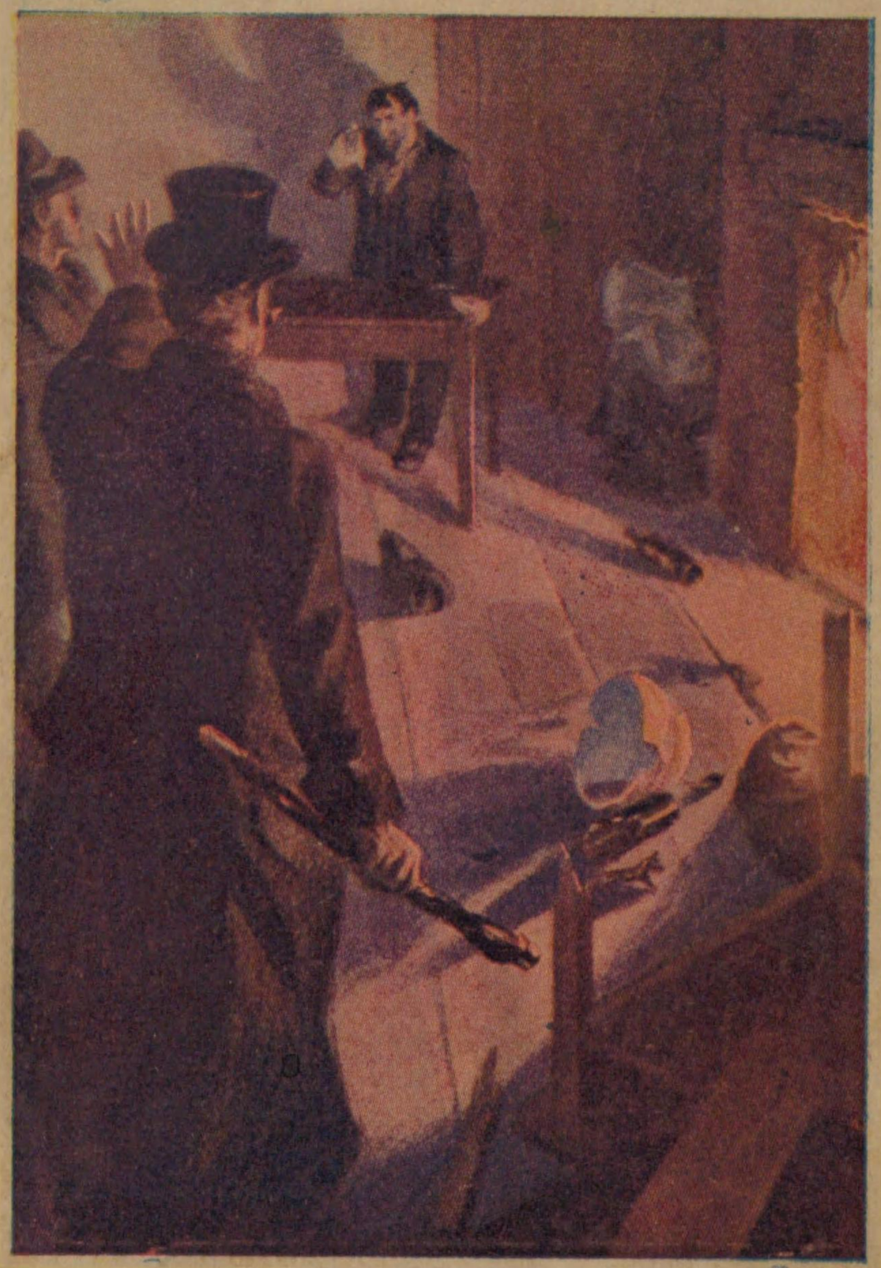
569-61
*1200501419741*

複写



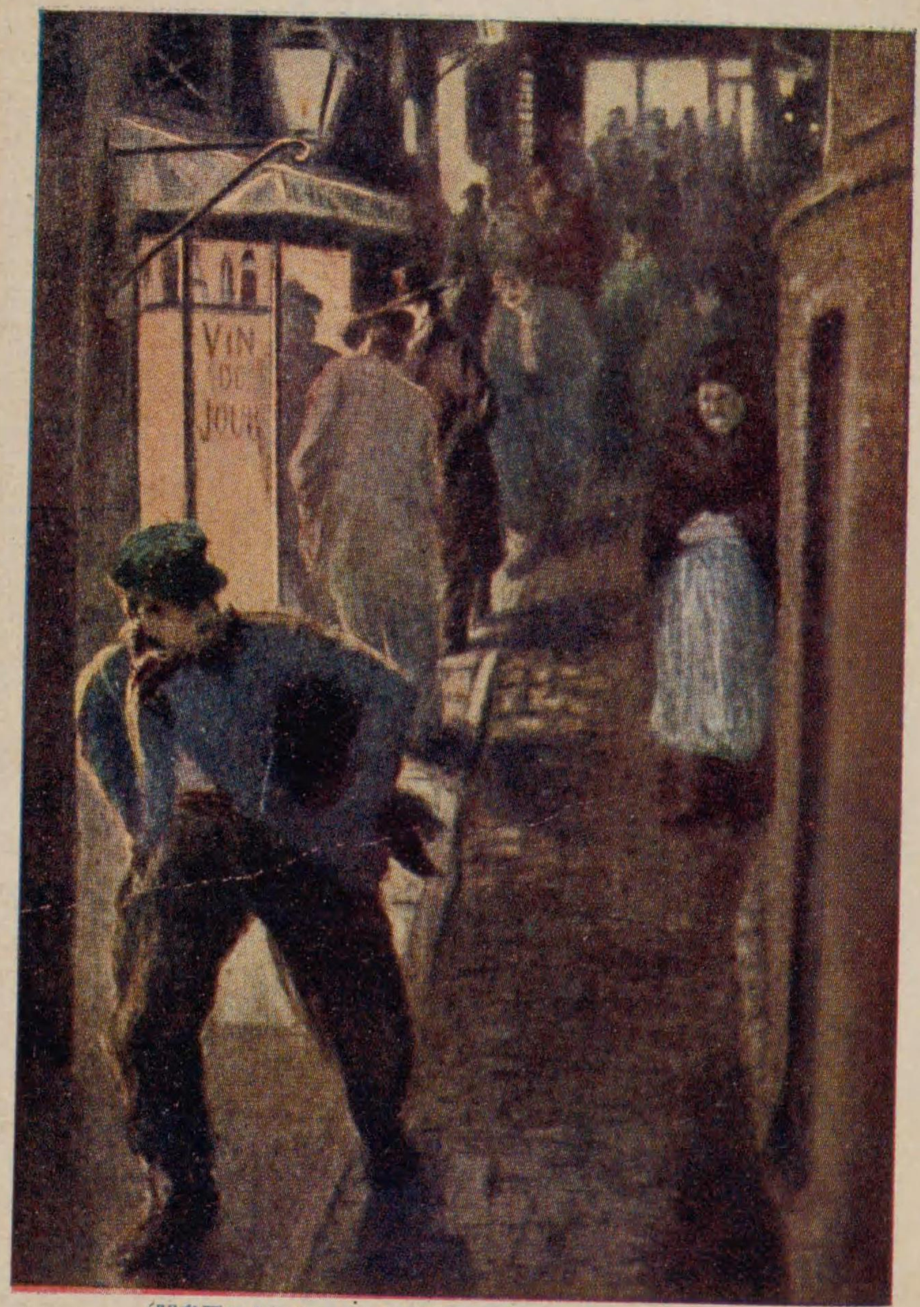
（照參頁二三二）。たけつをび狙とりたび、てけ向を口銃に庭矢

世界大衆文學全集

# 偵探クツコル
# 河畔の悲劇

田中早苗

改造社



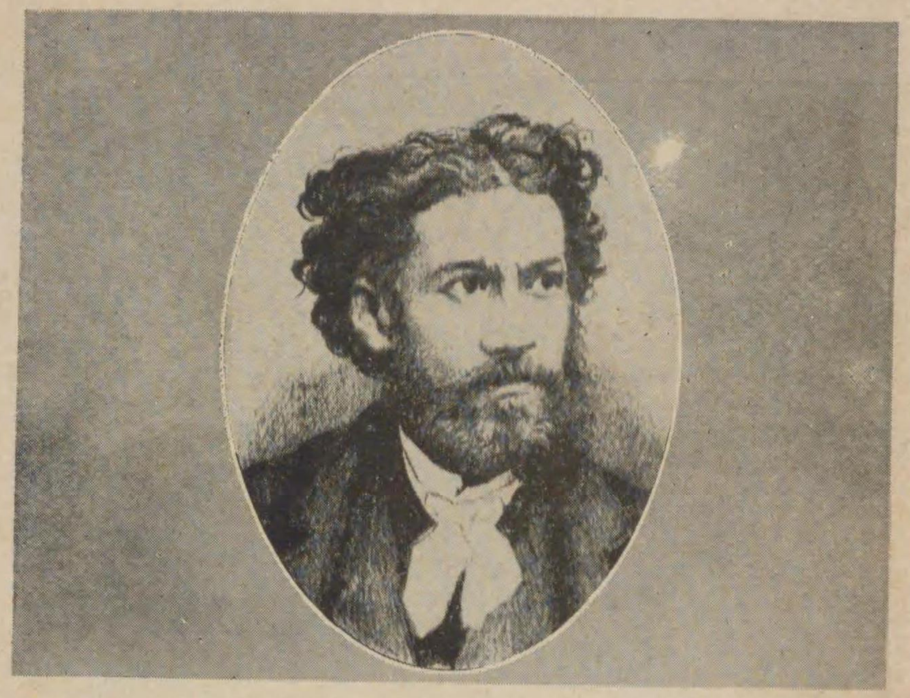

やがて日が暮れると、尾行が一層困難になつた。（十二頁參照）

569
61

國立國會圖書館藏書

I 種
W

*1200501419741*



ガボリオー

田中早苗

# 序

エミール・ガボリオー（Emile Gaboriau, 1835—1873）は、佛國西部の、葡萄酒の釀造地として有名なジョンザック町に生れた。父はその町の登記官吏であつた。

ガボリオーは佛蘭西探偵少説の鼻祖といはれてゐる人で、はじめて探偵小説に完全な形式を與へた作家であつた。彼は初め、賣りだしの小説家で劇作家だつたポオル・フェヴアルの助手となつて、共働する傍ら、自分でも創作や小品を書いてゐたが、一八六六年（彼が三十二歳のとき）「ルベイ」紙上に「ルルーヂ事件」を連載すると、はじめて探偵小説の面白さに魅せられた讀者の間に、非常な好評を博して、彼は一躍、大衆文壇第一の人氣作家となつた。それから驚くべきスピードで「書類第百十三號」（一八六七年作）「河畔の悲劇」（一八六八年作）「ルコック探偵」（一八六九年作）と次々に面白い長篇を發表した。

出世作の「ルルーヂ事件」は、ルコックの師にして巴里警視廳の囑託だつたタバレといふ素人探偵が取扱つた事件として記述されてゐるが、その次に出た「書類第百十三號」から、わがルニック探偵が活躍するのである。作者はこのルコックを描き出すにあたつて、實在した巴里の探偵ヴィドック（Eugene Franço's Vidoq——警察史上の怪人物にして且つ稀出の名探偵と呼ばれ、その一生は波瀾重疊をきはめた男で、事實以上に誇張した嫌ひはあるけれど自叙傳も出版されてゐる）をモデルに使つたといふ説は、間違ひがないやうだ。

ガボリオーの小説は、どつちかといへば古風な味があつて、筋のはこびが極めて巧妙

で、探偵小説といふよりは、世態人情の波瀾曲折を描いたローマンスとしての面白味が勝つてゐる。彼の作においては、他の作家のものに往々見るがごとく、偉い探偵が出しやばり過ぎて、筋の邪魔をするやうなことは絶對にない。人情味のゆたかな探偵が飽くまでも錯綜した波瀾の裏について活動し、筋のはこびを助けつゝ事效をあげてゆくところに、物語としての、しなやかな、渾然たる味が出てゐて、我々はそこに云ひしれぬ懷しさを感ずるのである。

彼の作は、後の探偵作家達にかなり大きな影響を與へたばかりでなく、各國語に飜譯されて、盛んに世界の大衆から讀まれてゐる。トルストイなども、若い時分にガボリオーの小説を耽讀したといふことを書いてゐる。

「ルコック探偵」は、いふまでもなく、彼の代表傑作。「河畔の悲劇」は彼の技巧と持ち味とがもつともよく出てゐる作なので、私はこの二つを本書に選んだのである。

ガボリオーの純探偵小説として有名なのは、前に述べた四つの長篇であるが、次に彼の著作の主なるものをあげておかう。

L'Affaire Lerouge（ルルージ事件）Le Dossier 113（書類第百十三號。拙譯「愛慾地獄」）Le Crime d'Orcival（オルシバルの犯罪。拙譯「河畔の悲劇」）Monsieur Lecoq（ルコック探偵）L'Argent des Autres（他人の金）Les Esclaves de Paris（巴里の奴隷達）La Vie Infernale（地獄生活）La Dégringolade（零落）La Corde au Cou（首繩）等。

一九二八・一二・一四

譯者



# ルコック探偵

## 目次


一、深夜の慘劇……八
二、靴跡を追うて……二
三、ダイヤの耳飾……三四
四、素晴しい報告……四二
五、僞せ醉漢……五七
六、白い足……六三
七、その夜の馭者……七三
八、判事の奇禍……八五
九、不敵の笑ひ……九七
一〇、旅藝人……一〇七
一一、難攻不落……一二
一二、上流か下層か……一三
一三、メイの宿……一三五
一四、同僚の失敗……一四一
一五、屋根裏の貞婦……一五一

一六、口止め……一六六
一七、寶石の祕密……一七八
一八、暗號手紙……一九〇
一九、疑心暗鬼……二〇三
二〇、最後の手段……二一二
二一、放たれた鳥……二一九
二二、二人夜盜……二三一
二三、長蛇を逸す……二三八
二四、思はぬ獲物……二四八
二五、タバレ先生……二五三
二六、正體はこれだ……二六一
二七、哀れなルコック……二六六

## ルコック探偵後記

一、不吉の使者……二七三
二、財産返上……二八〇
三、丘の孤屋……二八八
四、修羅の一夜……二九五
五、この背信……三〇三



六、決闘狀……三一一
七、嫉妬の鬼……三二三
八、金の無心……三三五
九、慘劇前後……三四四
一〇、ルコックの復讐……三五四

## 河畔の悲劇

一、早曉の訴へ……三六二
二、大亂雜……三六九
三、伯爵夫妻……三七六
四、庭師ゲスパン……三八四
五、止まつた時計……三九四
六、ルコックの檢索……四〇〇
七、屍體檢案……四一〇
八、かきおき……四一四
九、探しもの……四二〇
一〇、無免許醫……四三〇
一一、おもひもの……四三七
一二、死を求めて……四四三

一三、借財整理……四五二
一四、あひびき……四六〇
一五、緣談……四六七
一六、證據の手紙……四七四
一七、病苦……四七九
一八、毒藥の罐……四八六
一九、臨終……四九六
二〇、アコニチン……五〇〇
二一、煖爐の穴……五〇五
二二、グラアル刑事……五〇八
二三、その夜の女……五一八
二四、探偵の家……五二五
二五、純愛……五三四
二六、封筒の消印……五四三
二七、報酬一萬法……五四七
二八、隱れ家……五五六
二九、間一髮……五六五



# ルコック探偵

# ルコック探偵

## 一、深夜の慘劇

千八百――年の二月二十日、ちやうど懺悔日曜のことであつた。

夜も漸く更けわたらうとする十一時ごろ、數名の警官隊が、綽名を「大將」と呼ばれた勇猛な警部に率ゐられて、巴里南端のバリエール・ヂタリー警察を出發した。

この警官隊は、フォンテーンブロー街道からセエヌの河縁までと、外遊歩街から城壁までの廣大な區域にわたつて、深夜の巡邏をするのが役目であつた。

ところがその界隈は、今はさうでもないが、その時分はおそろしく物騒な土地で、女子供は無論のこと、屈强な男も氣味わるがつて、成るべく立入らぬやうにしたものだ。殊に夜歩きが危險なので、夕暮からはぱつたり人足が杜絶えるといふ風で、鬼を欺く要塞の兵士でさへ、休日に巴里へ出て來るときは、城壁附近は少くとも三四人隊をなして通行しろと嚴命されてゐたのである。

といふのは、その邊は一帶に、脱獄囚人だの、殺人や强竊盜を常習としてゐる犯罪者の集合地なので、眞夜中過ぎになると、さうした浮浪人どもが、何處からともなくその殲るしい街々に集つて來て、怪しい影がそこにもこゝにも蠢く。そしてうまい仕事をやつて來た奴等は、たらふく酒を鯨飲つ



たあげくに喧嘩をしたり、馬鹿騒ぎをやつたりして、睡くなれば軒下だらうが、空家の中だらうが、處構はずもぐりこんで、ごろ〳〵眠てゐるといふ有樣であつた。

さてその晩は、二三日ひつきりなしに降りつゞいた雪が晝から溶けだしたので。本通りの往還では泥雪が脚踝を沒した。そのくせ、いやに濕つぽい寒氣は骨の髓までも徹りさうで、おまけに濃い霧が刻々に立ちこめて來て、鼻つ先へ手を出しても見えないくらゐだつた。

「辛い晩だなア、あゝ厭だ〳〵。」

警官の一人が情けない聲で歎息すると、

「辛くても我慢しろ。」隊長がたしなめるやうに呶鳴つた。「君等がせめて年收の二萬法もある御身分なら、こんな時刻にこんな場所を引廻しはせんよ。」

「ハッハハ。」

皆がドッと笑つた。上官の洒落だから、お附合ひに笑つたのではない。實際、妙に悲慘な可笑味を感じたのであつた。

この警部は、本名はゼブロールだが、「大將」といふ綽名の方がよく通つてゐるのだ。

驚くほどいゝ頭腦でもないが、多年の經驗といふものは偉いもので、今ではどんな種類の犯罪でも、あらゆる隅々まで見透す眼識が出來てゐる上に、冷靜で自信力があつて、おまけに、友達の肩を叩くやうな調子で、どんな惡漢の襟頸でも攫まうといふ蓋度胸があつた。齡は四十五六、小脊ながら

慓悍な面がまへで、毛蟲のやうな眉毛の下から人を睨む眼つきが凄い。
「泣き言をならべるには些と早すぎるぞ。今にも大事件に出つくはしたら、何うするつもりだ。」
警部は再び聲を勵ました。
まつたく泣き言には早すぎた。それに、こんな厭な晩には、得てして怪事件が突發するものなのだ。
やがて大通りから場末の方へ入つてゆくと、新開地のことゝて、まだ區劃の出來てをらぬ街や、無名の街が多く、泥雪のところ〴〵に大きな穴がつくりと口を開いてゐたりして、實に氣持が惡い。
進むにしたがつて、軒燈も居酒屋の燈火も見えず、眞暗でいやにひつそりと靜まりかへつてゐた。
遙か彼方に、岩窟の奥で激流の轟ろきを聞くやうな、あの大都會の音響が聞えてゐなかつたなら、正に巴里から百里もへだてた田舍へさまよつて來た思ひがしたゞらう。
警官達はズボンを高々とまくりあげて、足許に氣をつけながら進んでいつたが、恰度ランチエ街を出外れたとたんに、一聲、消魂ましい叫びを聞いた。
と、隊員は一齊に歩を止めた。
「大將、あの聲は何でせう。」
「うむ、人殺しだな。近所にちがひないが、何家だらう——シッ、靜かに。」
聞耳を欹てると、やがて二度目の叫び——獸の吼えるやうな聲が闇をつん裂いた。



「おゝ、確かにシュベン婆の居酒屋だ。ソレ駈足つ！」
一分と經たぬうちに、掘立小屋のやうな穢るしい居酒屋の前へ出たが、嚴重に戸締りがしてあつて、鎧戸をおろしたハート形の窓から、焚火らしい紅い灯影がもれてゐた。今の叫び聲は正しくこの家から來たのであつた。
「開けろ、開けろ。」
警部は表戸をドン〳〵叩いた が、返事はなくて——罵しる聲、呻き聲、それに女のおろ〳〵聲もまじつて、どたんばたん格闘をやつてゐるらしい物音が、手に取るやうに聞えた。
一人の機敏な刑事が、する〳〵と窓へ攀ぢ登つて、鎧戸の隙間から内部の容子を覗きこんだが、一目見ると、
「た、大變だ。」
表の方では警部が破れよとばかり扉を叩きながら、
「開ろ、御用だッ。」
やはり答へがない。で、彼は滿身の力を肩にこめて、鐘撞棒のやうにどしんと一つ打衝かると、めりめりといふ音がして、扉は颯と開いた。
「ソレ行け。」
一齊に踏みこんだが、室内は實に慘澹たる光景で、警官等は無論のこと、沈勇で聞えたゼブロール

警部でさへも慄然として、思はず立ちすくんだ。
食卓は顚覆へり、洒杯や皿小鉢や、その他の家具類がそこら一杯に散亂して、めちやくちやに踏みにじられ、燈火は格闘の際に消えたらしいが、爐にくべた薪の火が、さうした光景を赤々と照らしてゐた。
爐のそばに、男が二人仰向けに打倒れ、店の眞中にも一人轉がつてゐた。二階へゆく階段の下には、女が頭からエプロンを引かぶつて、ふるへ聲で呻いてゐた。
それから、奥の部屋へ通ふ開けつ放した戸口のところに、一人の男が仁王立ちになつて、頑丈な樫の卓子を小碪に身構へてゐた。それは無精鬚の生ひのびた中脊の男で、一見荷揚場か停車場の人足らしい服裝。しかもその服はずたずたに裂けて、葡萄酒や血痕で汚點だらけだつた。
この男が下手人らしかつた。顏面殺氣を含んで物凄く、頰から頸へかけて血みどろになつてゐた。
彼はハンケチで繃帶した右手に短銃を振りまはしてゐたが、矢庭に警官隊の方へ銃口をむけて、ぴたりと狙ひをつけた。
「こらつ、亂暴しては可かん。」警部は氣合と共に二三歩前進しながら、呶鳴りつけた。「こつちは多勢だ——じたばたしたつて逃しはせんぞ。武器を置けい。」
「私は、な、何も惡いことをしやしません。」
「嘘を吐け。お前の仕業にちがひないんだ。」



「いや私が狙撃はれたのです。嘘と思ふなら、此店の婆さんに訊いて下さい。彼奴等を殺したのは私なんですが、私はさうする權利があります。正當防衛です。」
「お前に罪があるかないかは、調べれば判ることだ。とにかく武器を捨てろ。」
すると男は何を思つたか、短銃を床へ投げだすなり、
「さア捕縛まへてくれ。」
といふより早く奥の部屋へ引返した。油斷をさせておいて、裏口から逃げださうとするらしかつた。けれど既に遲かつた。前に窓へ登つてゐた刑事が、この形勢を見るより早く跳びおりて裏口へ廻ると、同時に犯人が駈けだして來たので、
「こら、待てッ。」
むんづと組付くなり、ぐん〳〵屋内へ押し戻した。
犯人もしばらくは死物狂ひに抵抗したが、つひに力盡きて、よろめきながら、
「萬事休矣。やつて來たのは曹魯西兵だ！」
捨鉢にかう呟いたと思ふと、ぐつたりと卓子の上に倒れかゝつた。
「ソレ縛つてしまへ。」
警官達はどつと折重つて、手足を縛つて、椅子にくゝりつけた。彼はもうじたばたしなかつた。一しきり興奮が去ると、體も頭も疲れきつたやうにげつそりして、縛られるがまゝになつてゐた。

危くこの獰猛な犯人を取り逃す ところだつたのに、退路を遮つた刑事の氣轉一つで捕まへたのである。

「お手柄々々、君は偉い働きをやつたぞ。」

警部は上機嫌でその殊勳者を讃めた。が、皆も一齊にその男を讃め立てると、警部は少し妬ましいやうな氣持になつたらしく、

「俺だつてあの計略に氣づかんでもなかつたが、何しろ短銃を捨てさせる方に苦心してゐたので、命令する餘裕がなかつたのだ。」テレ隠しにそんなことをいつて、「今度は被害者を檢べなければならん。早く洋燈を點けい。」

眞先に、爐のそばに倒れてゐる二人の男を檢べると、何方もすでに絶切れて、心臓の鼓動が熄つてゐた。懐中時計を取りだして硝子の面を脣へあてたが、硝子は曇らなんだ。

「二人とも完全に死んでゐる。檢屍官が來るまで、このまゝにしておかにやならん。ところでもう一人の男はどうだい。」

室の眞中に倒れてゐたもう一人の男は、重傷ながら呼吸の通ひがあつた。

この男は、平腰で劒はないが、兵隊服を着て、だぶ〳〵な灰色の上衣はボタンが外れ、胸が露はにはだかつてゐた。警官達が靜かに抱きおこして、壁へ凭れさせると、彼はかすかに眼をあけて、苦しい呼吸の下から、



「何か飲まして下さい。」

早速水を一杯與ると、美味さうに飲みほした。それで少し氣が確かになつたらしかつた。

「おい怪我は何處だ。」

「頭です、こ、此處です。」と手を擧げさうにしたが、「おゝ、苦しい。」

そのとき、かの殊勳で讃められた刑事が、つとこの男のそばへ寄つて、老巧な外科醫らしい器用な手つきで、がつくりと口をあいた後頸部の傷を診檢べたが、

「こりや何でもない。」

と事もなげにいつた。しかしそれは負傷者を元氣づけるための氣休めに過ぎないので、實際は只ならぬ重傷——おそらく致命傷といふ診斷を、心のなかで彼は下したのであつた。

「うむ、何でもありやしない。」警部も口を添へた。「頭の傷は大抵一ケ月ぐらゐで癒るものだよ。」

だが、負傷者は口許にさびしい微笑をうかべて、

「助かる見込がありません。とても駄目です。」

「何をいふんだ、確かりしろ。」

「いや駄目です——私は、彼奴に——のラシヌールに誘きだされたので——」

その聲はしだいに微けくなつて行つた。

「ラシヌールつて何者だい。」

「ジャン・ラシヌールといつて、元俳優で、私が工面がよかつた時分に懇意にした男です――私も以前は財産を有つてゐましたが、道樂ですつかり失してしまつて、貧乏をしてゐるところへラシヌールの奴がやつて來やがつて、纏まつた金をやるから新規蒔き直しをやれつていふんです。私はうつかりその口車に乘つて出て來たのが運の盡きで、たうとうこんなところで犬死をすることになつたのです――うゝむ、この怨みを晴らさずに措かうか。」

と、いかにも無念さうに拳を固めて、

「彼奴の祕密は何もかも知つてるんだ――底を割つてやるぞ、チ、畜生――」

言葉を繼がうとしたが、もう聲が出ない。

やがて肩に血泡をうかべ、黑眸が上づつて眼瞼の奥にかくれると、體が硬ばつて來て、はげしい痙攣と共にぱつたり床へ倒れてしまつた。

「もう駄目だ。」

警部はさういつて、詰らなさうにズボンの塵を掃ひながら起ちあがつた。

「さてこれから檢證にかゝらにやならんが、此奴は兵士だな。隊の番號は上衣のボタンに刻んである筈だ。」

「いや、兵士ぢやありますまい。」

と思はず口を出したのは、かの殊勳者の若い刑事だつた。



「何故だい。立派に軍服を着てゐるぢやないか。」

「軍服を着てゐても、兵士と限つたことはありません。第一、頭髮の刈り方を御覽なさい。兵士は一人だつて、こんな風に毛を肩まで垂れてゐる者はありません。」

「俺は眼玉を衣囊へ藏ひこんでおくんぢやないぞ。そんなことは迅に氣づいてゐるんだ。俺の考へでは、この兵士は、休暇中に髮をのばしておいて、假髮屋へ賣るのではないかな。」

「だが、それにしても――」

「もう可い。それよりも事件の經過を聽くことが賢賢だ。こら狸婆ア、お前は殺されたんぢやあるまい。」

警部は、階段の下にしやがんでゐたシュバン婆の頭から、エプロンをぐいと引たくると、皺くちやな顏がにゆつと現はれた。汚い齒拔け婆で、脂肪のない皮膚は羊皮紙のやうにかさ〳〵して、全體骨と皮ばかり。何しろ若い時からの亂行や、貧苦や、强烈な酒の祟りで、物凄い惡相になつてゐる。

「こら起て。お前が曖昧な酒を飲ませるもんだから、見ろ、客は氣が狂つてこんな大喧嘩をやつたぢやないか。この罰で入牢だぞ。」

「と、飛んでもない――此店こそ災難でございます。道具をこんなに破されてしまつて、明日から商賣が出來ません。」

小さな赤眼で店の中をおど〳〵見廻はしてゐたが、彼女は、皿小鉢の損害といふことの外、何も考

へてゐないらしかつた。
「いつたい、どうしてこんな騒ぎになつたのか。」
「わたしは何も存じません。二階で縫ものをしてをりますと、店の方でごた〳〵云ひ合つてゐる聲がするので――」
「うむ、それで？」
「すぐに二階から降りて來ますと、今貴方がたに捕まつた人が、そこに跪れてゐる三人を相手に、大喧嘩の最中でした。あの捕まつた人はお氣の毒でございます。あの人に罪がないんです。俺がゐると引分けたでせうが、生憎わたし一人で、どうにも仕様がないものですから、只もうはら〳〵して『お巡査さん〳〵』と怒鳴つてゐました。」
婆さんは皆んないつてしまつたといふ風で、椅子にかけようとすると、
「まだ早い、起つてをれ。もつと云ふことがある筈だ。」
と警部が荒つぽく極めつけた。
「すつかり申し上げましたよ、ゼブロールさん。わたしはこれだけしか知らないんです。」
「此女、隱し立てをすると伴れて行くぞ。」
「冗談ぢやありません。そんな無法なことがあるもんですか。」
「云はなけりや口を開くまで、半月も臭い飯を食はしてくれるッ。」



「ナ、何だつて？　素直にしてゐりや、何處まで虐めようつてんだらう。倅が些とばかり品行が惡いからつて、監獄へ叩つこんでさ、その上わたしまでも伴れて行かうなんて、馬鹿におしでないよ。」
婆さんは突然に啖呵をきつた。つひに地金が出てしまつたのだ。
「だが監獄へ來いといふなら、二つ返事で行つてあげよう。あすこはお金は要らず饑じいつてこともなしさ。わたしなんか、一生監獄の御厄介になつて往生が出來れば、本望なんだよ。」
警部もこれには手古摺つた。で、結局此女は後廻しとして、犯人の方へ向きをかへた。
「こら、お前はどうしてこんな兇行をやつたんだ。詳しく云つてみろ。」
突然に問はれて、犯人はちよつと躊躇つたが、
「私は殘らず申し上げました。」と、きつぱり云つて退けた。「先刻も申したやうに、私に罪がありません。その軍服を着た男は私が斃したのです。それは主婦も見てゐた通りです。いづれ法廷で申し立てるつもりですが、それまでは何んなに問はれてもお答へが出來ませぬ。」
彼はそれつきり默りこんだ。
固い決心がおのづから面色に現はれ、いかに威嚇したつて、これ以上の答へが得られさうもなかつた。ある種の犯罪者はどうかすると頑固に口を噤んで、係りの役人を手古摺らせることも珍らしくないものだ。警部は多年の經驗でよくそれを知つてゐた
「ようし、檢べはこれで一段落だ。では諸君のうち二人だけ此處に居殘つてくれ。俺は皆と一緒に歸

つて署長に報告しよう。おい誰かこの男の脚繩を解いて、シュバン婆の手を縛つてくれ。この二人を警察へ投りこむんだ。」

そのとき、例の殊功をたてた若い刑事が、低聲で、

「大將、ちよつとお顏を拜借。」

と、警部を外へつれだした。

「外でもありませんが、貴方はこの事件をどうお考へですか。」

「有りふれた喧嘩さ。四人の破戸漢がこの居酒屋に落ちあつて、口論の末に格闘をはじめて、その中の一人が短銃を振りまはして、他の三人を射殺した、といふだけさ。いづれ調べると雙方の性も判るだらうが、被害者だつてどうせ碌な奴等ぢやないんだ。あの加害者のおかげで、世間は厄介ひをしたやうなものだよ。」

「そんで、檢證はこれ以上にやる必要がないと仰つしやるんですか。」

「まア左樣だね。」

若い刑事は何か考へこんでゐる樣子だつたが、

「私は、どうも腑におちない點があります。あの犯人の態度といひ容貌といひ、少し變ぢゃありませんか。」

「何が變だい。」



「たしかに變です。私の考へでは、この事件は決して見たとほりのものではなくて、何か祕密な事情があるらしいんです。」

「君が、さう考へる理由は？」

「說明が出來ません、獵犬が獲物を嗅ぎつけるのと同じ理合なんですから。」

すると警部は、何をしやら臭いと云ひたげに肩をすぼめて、

「つまり君は、この事件の裏面に深い祕密が伏在してゐると主張するんだね。この胡椒軒といふケチな居酒屋に、大貴族達が變裝して密會に來るとでもいふのか。そんなら、君は自分でその祕密を探つてみるがいゝ。」

「えつ、それを許して下さいますか。」

「許すのではない、俺が命令するのだ。君は同僚の中から好きな相棒を一人選んで、こゝに居殘つてくれ。それで俺の氣づかぬことが發見出來たら、俺は潔よく兜を脫ぐよ。」

## 二、靴跡を追うて

ゼブロール警部からこの事件の檢證を任された青年刑事は、ルコックといふ男であつた。何しろ新米ではあるし、刑事中の最年少者で、それまでは他の驥尾に附して活動するばかりであつたが、今度はじめて責任ある仕事を命じられたので、彼にとつては大切の初陣なのである。

齢は二十五六、その無髯の若々しい顔は功名心にかがやき、顔色は少し蒼白いけれど、脣は朱を灑いだやうに紅く燃え、房々した漆黒の頭髪が額に波うつてゐた。どつちかといへば小脊の方だが、がつしりと整つた體格で、てきぱきした態度に、いかにも精力の絶倫さが現はれてゐた。取り立て、異常な容貌風采といふのではないが、只その烱々と人を射る眼光が、その時々の氣分によつて著るしく明暗するのと、大きなまん丸な鼻孔を備へたその鼻柱が、驚くべき可動性をもつてゐるだけが、ちよつと變つた印象を與へるのであつた。

このルコックは、後に古今獨歩の名探偵と謳はれる男なんだから、讀者の御參考までに、こゝでごく簡單に彼の素性と、警察界へ飛びこんだ事情を叙べておくのも、あながち無駄ではあるまい。

ノルマンデイの名家のお坊つちやんにしては可成り傑出した秀才で、青雲の志已みがたく、巴里へ出て大學の法科へ入つたが、不幸にして間もなく家が沒落し、兩親ともに病死したゝめ、俄かに孤兒となつた彼は、學校へも行つてゐられないので、家庭教師やら筆耕やら、さうした詰らぬ仕事を求めて放浪してゐるうちに、當時有名な天文學者モーゼ男爵の助手に雇はれ、月百法の給料でせつせと働いたが、何しろ薄給で小遣ひに不自由なところから、魔がさしたとでも云はうか、やたらに金が欲しくなつた。

で、貧乏青年が誰しも考へるやうに、資本無しで金になる妙案がないかと頻りに肝膽をくだいた。そしてつひに一つの方法を發見した彼は、或る日男爵に向つて、



「先生、僕はこれで金儲けをしようと思ひますが、どうでせうか。」

と大威張りでその考案を話した。それは何でも手紙二本と電報一通で、五六百法づゝの金が確實に倫敦から取れて、しかも絶對に嫌疑がかゝらないといふ、恐ろしく巧妙な方法だつたので、男爵も舌をまいて、

「困つたものぢや。そんな風では、こつ〳〵天文學などを研究してはゐられまい。君のやうな男は、大泥坊か大探偵になるより外に道がないんだ。何方へなと好きな方へ行け。」

一ケ月分の給料を退職手當として、お拂ひ箱となつた。

弟子を見ること師に如かずで、ルコックは到底、月や星のことばかり考へてゐる天文學者には向きさうもないが、探偵の仕事には非常な興味をもつてゐたし、好きこそ物の上手なれで、これなら成功出來るといふ確信があつたので、それから間もなく、男爵の紹介で警視廳へはひつたのであつた。

さて話は前にもどつて、ルコックは今、同僚の中から、綽名を「アブサント」と呼ばれた一人の老刑事を相棒に選みだした。

やがて警官隊は、犯人とシュバン婆とを連れて、胡椒軒を退きあげていつたが、一行の跫音が遠く消えると、更けわたつた夜はまたひつそりと靜まりかへつた。

「さア、これからが僕等二人の世界だ。」

ルコック探偵は床を一つ踏み鳴らして、威勢よく叫んだ。

彼が白羽の矢を立てた相棒といふのは、齢は五十前後だが、暇と金さへあれば居酒屋へ突走つて、強烈なアブサント酒を嘗めずにはゐられないといふ飲酒家で、それがために「アブサント爺」といふ綽名をとつたのだが、同僚達も彼の本名は迅に忘れてしまつて、今では、この綽名が唯一の呼び名となつてゐるのだ。

しかし、ルコックは利口な選び方をしたものだ。この爺は平凡無能で、頭腦が鈍くて、敏活を缺いてゐる代りには、同僚に對して嫉妬や羨望を感ずるといふこともなく、騎兵あがりだけに、命令は軍隊式に几帳面に遵奉する特長をもつてゐる。何のことはない、騎兵學校で馴らされた古參の馬のやうな男だ。

「俺を選んでくれたとは有難いね。おかげで今夜はゆつくり眠られるんだ。こんな晩に泥雪の中をほつつき歩いてゐる同僚等は、可憫さうなもんだな。」

爺は頗る恭悅の態だ。この男は斑々たる血痕や、生々しい屍體を前に見ながら、單に眠る樂しみを考へてゐるのであつた。

「冗談ぢやないよ、アブサント。僕達は檢證のために居殘つたんぢやないか。直きに夜が明けると、署長や警察醫や檢屍官がやつて來るから、ぐづ〳〵しちやゐられない。僕はそのときまでに報告が出來るやうにしておきたいんだ。」

「そいつは無駄なこつた。俺は大將の遣り口をよく呑込んでゐるが、彼が退あげたときは、大てい後



に仕事が殘つてゐはしない。それとも君は、大將に解らないことでも發見したのかい。」

「それがさ、どうも大將が勘ちがひをしてゐるらしいんだ。僕の考へぢア、この事件は表面から見たところとは大變違つたもので、俺達が研究すれば、必ず隱れた祕密が發見出來ると思ふ。」

しかしルコックの熱誠も、この老刑事に對しては馬耳東風だつた。

爺は大きな欠伸を一つやつて、

「とにかく俺は一眠りするよ。俺が寢たつて君の研究に差支はあるまい。何か發見つたら起してくれたまへ。」

ルコックは格別氣をわるくした風もなく、

「寢たければ寢てもいゝが、たつた五分間僕の話を聽いてくれないか。實は君に有力な暗示を提供したいんだ。」

「そんなら聽いてやらう。かつきり五分間だぜ。」

「是非聽いてくれ。その後で寢ようと起きようと君の勝手さ。但し僕が一人で働いたときは、この事件の賞金は僕が貰ふよ。」

賞金と聞いて、老刑事は耳を欹てた。彼も金は欲しかつた。金が欲しいのはつまり酒が飲みたいので、それを思つたゞけでも、あの綠色のアブサントの洒瓶が幻影のやうに目前にちらついて、頭がぐらぐらした。

彼はそこに倒れてゐた腰掛をひき起して坐りながら、
「さア話してくれ。」
「第一の問題は、僕達が捕縛した犯人のことだが。」とルコックは突立つたまゝで話しかけた。「君はあの男を何者だと思ふ？」
「多分人足か、浮浪人だらう。」
「ところが、そんな者ぢやない。彼は確かに高等教育をうけた人間だよ。」
「そ、そんなことがあるものか。」
「でも、君はあの男が縛られるときに云つた言葉を、記憶えてゐるだらう。」
「記憶えてゐるよ、『やつて來たのは曹魯西兵だ。』とか何とか云つたね。」
「あの意味が解るかい。」
「何でもないぢやないか。つまり彼は獨逸人が嫌ひなんだね。だからあんな厭味をいつて、俺達を侮辱したつもりなんだらう。」
「駄目々々、君にも解らないだけそれだけ、あの男の教育が高いんだよ。僕はあの文句一つで見當がつくやうに思ふ。」
「止せやい、若造のくせに先輩を瞞がうなんて。」と、爺は憤然として、「俺は駄法螺は大嫌ひだ。」
「まア待つてくれ。君だつて知つてるだらう、あの恐ろしいウオタールーの戰ひを。」



「ウオタールーと今夜の事件と、どんな關係があるんだい。」
「さアそこだよ。あの戰ひでは、初めはわが佛蘭西軍が優勢で、著々と敵の聯合軍を切崩して行つたね。那翁皇帝が小高い陣地からその有樣を見て、締たと思つてゐると、だしぬけに横合から一團の兵が現はれて、雲霞のごとく、ひた押しに押して來た。それが味方と思つたら、案外に曹魯西兵だつたではないか。それがためにウオタールーの戰ひといふものは、我が軍の慘敗に終つたのだ。」
すると、アブサントは腰掛から跳びあがつて、
「解つた。あれは暗喩なんだね。」
「さうだよ。つまり那翁皇帝は、味方のグルーシエ將軍の率ゐた三萬五千の兵がやつて來るのを期待してゐたところへ、突然に曹魯西兵が現はれたので、狼狽てたのさ。そこであの犯人が、あの語をいつた心持を考へてみると、彼はあの際に加勢を待ち望んでゐたところへ、警官隊が飛びこんで來たので、がつかりしたにちがひないんだ。」
老刑事は睡氣も覺めたやうに眼を丸くした。
「偉い！　君にこれだけの頭腦があらうとは知らなんだ。」
「ところが、もう一つ解らぬ問題がある。あの男が兇行後、すぐに遁げようとしないで、戸口にぐづぐづして、大將と押し問答をやつてゐたのが、不思議ぢやないか。」
「多分、共犯者があつたゞらう。そして、その共犯者を逃亡してやるために、自分が踏み止まつたん

だね。」

「さう〳〵、僕の解釋もそれだよ。」とルコックがいつた。「とにかく遁げた奴があるにちがひないんだが、どうだい、外には雪が殘つてゐるかね？」

それ以上に多くをいふ必要がなかつた。老刑事はいきなり燈火をもつて、裏口から小さな庭へ飛びだした。ルコックも滿足げにその後について行つた。

庭は物陰になつてゐるので、まだ溶けやらぬ雪の上に、靴跡が點々と、黑い汚染のやうに印されてゐた。ルコックは早くも雪の上にしやがんで、その靴跡の一つ〳〵を檢べはじめたが、間もなく起ちあがつて、

「これは男の靴跡ぢやない。女のだ。してみると、女が來てゐたんだな。」

「えつ、女が來てゐたか？　そいつは素的だ。」

事件に女が混つてゐると聞いて、相棒はひどく嬉しがつた。

その靴跡で判斷したところによれば、裏口から女が二人逃げたらしかつた。

さうなると、事件が却つて簡單なものになつて來る。この怪しげな居酒屋に女が二人來てゐたとすれば、荒くれた男どもが、その女が題で大喧嘩を始めたといふことは、容易に想像が出來る。そしてあの犯人が相手を射殺した後、係合ひにならぬやうに女達を逃亡してやつて、その間自分が踏み止まつたのであらう。そんな場合に婦人を庇護ふといふことは、佛蘭西男に特有の觀念であつて、浮浪人



だつてそのくらゐの心意氣はある筈だ。さう見れば、それで解決がつかぬこともない。

しかし左樣とすれば、「やつて來たのは普魯西兵だ。」といつた、あの暗喩をどう解釋したらいゝだらう。第一、破戸漢風情がさうした高尙な文句を口走るといふのは、合點のゆかぬ話だ。

ルコックは額に手をあてゝ、ぢつと思案にくれた。

それとも、加害者は、程近い「虹霓ホテル」の假裝舞踏會へ出かけた歸りに、二人の女をつれて、氣まぐれにこの居酒屋へ立寄つたのであらうか。さうだとすれば、身分ある紳士の假裝姿とも思はれる。つまり彼が女達をつれて此店へ入つて來ると、三人の荒くれた男が醉つぱらつてゐて、彼を嘲弄ふか、女達に巫山戲るかしたので、彼は嚇然となつて短銃を擊放した——それも有り得ることだ、と思つたが、ふと考へて、

「はてナ、女をつれて來たのは、あの加害者だつたらうか。それとも他の男か？　これは重要なことで、第一に確める必要がある。」

ルコックはそこに氣がつくと、直ちに引かへして、先刻ゼブロール警部が押あけた表戸の前に、それらの靴跡がありはせぬかと探した。が、殘念なことに、その邊は雪が少いのと、大勢の者が出入りしたために、靴跡がめちやくちやに入亂れてゐて、まるつきり見分けがつかない。

「ひよつとすると、庭の靴跡は、後で捺けたのかも知れないぜ。」

アブサント爺が、ふとそんなことを云ひだした。成るほどそれもある術だ。そこで二人はまた庭の

方へ行つて、今度は一層念入りに檢べた。しかしその結果は、やはり二人の女がこの裏庭から出て行つた、と斷定する外はなかつた。

幸ひにも、二樣の靴跡が判然と區別された。一つは細型で踵の高い上品な靴らしく、もう一つは幅つたい太短した靴だ。察するに、前者は恰好のいゝ華奢な足の女で、後者は肥つた足の持主に相違なく、多分、華者な婦人と、その女中のであらうと思はれた。

ところが、もう少し先へ進むと、更に男の靴跡——しかも頗る上等の長靴の跡がまじつてゐた。

「おい、男の靴跡があるぜ。」

アブサントが、カンテラを差しつけて覗きながら、注意すると、

「だが、此男は此家から出て行つたのではない。外からやつて來たんだ。」とルコックはいつた。「彼は爪立ちをして、頸をさしのべて、密とやつて來たんだ。そして此處まで來ると、只ならぬ物音を聞いたので、びつくりして、ソラ、こゝから引返したぞ。」

「もしかすると、彼は物音に驚いたのではなくて、密とこゝまでやつて來たとき、恰度女達が此方から出て行つたのに出會したので、面喰つて逃げたんぢやないだらうか。」

「いや、そのときは、女共はとうに庭を出離れてゐたよ。見たまへ、華奢な女の靴跡が、男の靴で踏みつぶされてゐるところがある。これは確かに、女よりも男の方が後で往復した證據だ。」

その庭は、高さ約三呎の格子づくりの垣で區切られ、垣には同じ格子づくりの小やかな木戸があ



つて、それらの靴跡は、眞直にこの木戸をぬけて、隣りの空地の方へつゞいてゐた。

「うむ、女共ははじめて此家へ來たのではなくて、前から勝手を知つてゐるらしい。左樣でないと、こんな暗い晩に、眞直に木戸を拔けられる筈がないんだ。」

とルコックがいつた。

彼の推測によれば、女共はこゝに木戸があるのを知つてゐたけれど、男はそれを知らなかつた。といふのは、垣根につもつた雪に男の指痕がついてゐる。それは、彼が木戸をくゞる時に手さぐりをした證據なのだ。

なほその靴跡を追うて約百ヤード先きの廣い空地・出ると、ルコックは雀躍して、

「締たッ、うまい場所へ出たぞ。」

そこは大工の材料置場らしいところで、花崗石の石材だの、材木だの、その他大小種々の板片が、雜然と積み重ねてあつた。

「そら見ろ、靴跡はこゝまで來ると、みな立ちどまつて、足の小さい女が材木の上に腰をかけたね。そして男と足の大きい女が立ち話をした形跡が、あり〳〵と殘つてゐるではないか。」

「彼奴等はこゝで何をやつたんだらう？」

「今に判るさ。小父さん、澄まないがカンテラを持つて、此處に立つてゐてくれないか。」

ルコック探偵は、アブサントをそこに立たしておいて、自分は、その灯のとゞく範圍を隈なく檢べ

はじめた。

彼方へ行つたり、此方へ來たり、立ちどまつてぢつと考へこんでゐるかと思ふと、すた〳〵と驅けだす。或はしやがんで見たり、腹ん這になつたり、懷中テープを出して長さを測つたりする。その敏捷さは獵犬以上だ。しかもとき〳〵アッと驚いたり、にや〳〵笑ひだしたりするので、他から見ると狂氣沙汰としか思へなかつた。

彼はそんな風に暫く驅け廻つてから、同僚のそばへ戻つて來て、

「解つた〳〵。かういふわけなんだ。」と熱心に說明を始めた。「この靴跡の男は、加害者の仲間なんだよ。彼はこゝで、二人の女が胡椒軒から歸つて來るのを待つてゐたのだ。彼はすらりと脊の高い、中年の男で、鳶色の外套に、ソフト帽といふ服裝だ。右手の小指に結婚指環をはめたところを見ると細君があるんだな。」

「もう勘辨してくれ。靴跡だけで澤山なのに、その上與太を聞かされては堪つたもんぢやない。」

「まア待ちたまへ。僕のいふのは確かなことなんだ。さて、彼はこゝに立ち番をして、女共を待つてゐたが、歸りがあまり遲いのに焦燥して、やたらに歩き廻つたものだ。聽耳を欹てたが、何も聞えない。で、とき〳〵立どまつては『どうしたんだらう？』とぶつ〳〵云ひながら、足踏をはじめた。その度數が三十遍さ——僕は算へたよ——ところが三十遍目の足踏をやつたとたんに、轟然、短銃の音が闇をつん裂いた。それから間もなく、女共が出て來たといふわけだ。」



「一體その女共は、何處からこの胡椒軒へやつて來たゞらうか。」

「殘念なことに、それが判らない。今のところ、その女共が裏口から出て行つたといふ事實しか、判斷出來ないんだ。彼女等は喧嘩がはじまると間もなく逃げたらしい。どんな風に逃げたかといふと、まづ、華奢な女はよほど怖毛をふるつたものと見えて、裏口から一跳びに庭へ飛びだして夢中で木戸の方へ驅けて行つた。しかしお上品な彼女は、直きにへたばつて、蹣跚して今にも倒れさうだつた。それは雪の上に、衣物の裾の痕が丸くついてゐるので判る。と、肥つた女が後から追附いて、主人の腰をかゝへながら連れて行つた。そら、兩女の靴跡が暫く入り交つてゐるだらう。けれど、主人があまり難澁らしいので、今度は輕々と主人を抱きあげて、ドン〳〵驅けだした。それゆゑ、華奢な女の靴跡はこゝで消えてゐるんだ。」

まるで現場を目擊したやうな、鮮かな推定ぶりに、アブサントはすつかり感心してしまつた。

「恰度その時だよ、かの仲間の男が驅けつけて、兩女を出迎へたのは。」とルコックはつゞけた。「ところが、華奢な女はひどく氣分が惡さうなので、男が帽子でこの材木の雪を掃つて、濡れたところを外套の裾でふいて、女を坐らせた。そこで、華奢な女はこゝへ腰をおろし、上の方の材木に寄りかゝつて靜然としてゐる間に、肥つた方の女は、男を少し離れたところへ連れだして、ひそ〳〵と立話をやつたんだな。男はこの花崗石の石材に肱で凭れながら、その話を聞いたらしい。そら、これが彼の指の痕だよ。」

## 三、ダイヤの耳飾

一體アブサントのやうな男は、人を信ずるまではなか〳〵手間がかゝるが、その代り信じきつたとなれば、一も二もなく崇拜するものなのだ。

「おい君、その男女はどんな立話をしたかね？」

彼は眞面目にそんなことを問ひかけた。

ルコックはこの無邪氣な質問に、微笑を禁じ得なかつた。

「さうさね、それを云ひあてることは難かしいが、多分肥つた女が男に向つて、彼の仲間卽ち加害者が、ひどい災難に出遭つてゐることを告げたらしい。それが加害者からの傳言だつたんだね。そこで男はすぐに樣子を探るべく、胡椒軒の裏口へ飛んで行つた。見たまへ、男の靴跡が、この花崗石から出發してゐるだらう。ところが彼は直きに戻つて來た。そのときは兇行後で、もう我々の手が廻つてゐたので、附近の搜索がはじまつたら危いと見て、慌てゝ引返したらしい。彼は華奢な女にそのことを報告して、一刻も早く逃げなければ大變なことになると忠告したんだね。そこで女も氣を取り直し一生懸命に起ちあがつて、彼の腕にすがりながら此處を立ち去つたのだ。しかしその男には、女共を保護する外に、もう一つの重大な義務——仲間を救ひだすといふ義務があつた。そこで彼は女共と一しよにこの空地を出ると、踵をかへしてランチェ街の方へ行つたんだが、それは多分、加害者が警察



へ引かれてゆくところを、見屆ける考へだつたらう。」

「偉い。君は素晴しい探偵だ。」アブサントは眞から感歎した。「大將が敏捷こいなんていつたつて、君と較べものになるものか。君が基督なら、大將は洗禮者ヨハネぐらゐのところだ。」

「馬鹿をいつちや可かん。君は僕を買ひ冠つてゐるので、實はこのくらゐの推定はいと易いことなんだ。僕は、この仲間の男を中年者で、脊の高い奴だといつたが、それは、どつしりと曳ずつてゐる靴跡の調子から中年者と判斷したので、それから、彼が高い花崗石に凭れた痕と、腰をかけた材木の高さから考へて、どうしても六呎近い脊高にちがひないことが判つたのさ。外套の色合などは、材木の濡れたところに、外套からぬけて附着した毛の色で判斷が出來る——それよりも、まだ〳〵大切なことが殘つてるんだ。もつと先きを檢べようぢやないか。」

「うむ、先きへ行かう。」

ルコックの手腕に敬服したアブサントは、まるで電氣でもかけられたやうに、もはや何をいはれても盲從したい氣持になつてゐた。

ところが困つたことに、少し先きへ行くと、例の女共の靴跡と、男の靴跡とが、反對の方角へ立ち分れてゐた。

ルコックはその岐路に立つて、はたと當惑した。この場合何方について行つたらいゝのか。何方が有力な手がかりになるだらうか。彼は額を押へてぢつと考へこんだが、

「男の行つた方角は分つてゐるが、女共の行先は見當がつかない。ようし、今は分らぬ方へ進まう。」

そこで二人の刑事は女共の靴跡を辿つて、どん〳〵大川端の方へ進んで行つたが、やがてシバルレ街へ出ると、その邊は雪が少いので、靴跡もしだいに微かになつたが、どうしたのか、間もなくぱつたり消えてしまつた。

二人は狼狽して、暫くそこいらを探し廻つてゐたが、

「おい判つたよ。」ルコックが突然に叫んだ。「これを見ろ。」

「はゝア、こりや馬車の轍の跡ぢやないか。」

「さうだよ。これで判斷すると、二人の女が此街までやつて來たとき、恰度歸りの空馬車の灯が見えたので、天の助けとばかり呼び止めた。しかし時刻は遲いし、兩女の行く先は馬車の歸る方角と反對なので、酒手をうんと與る約束で、馭者を納得させたんだね。見たまへ、轍の跡が向うへ廻つて、そら、こゝで馬車がまはれ右をやつたな。そして女共の靴跡も、こゝで行き止まりになつてゐるぢやないか。」

「困つたね、馬車に乘つたとすれば、もう探しやうがあるまい。」

「明日になれば分るさ。馬車屋は、夜更に空車で歸つて來たからには、この近所の者にちがひない。明日その馬車屋を探し出さう。女共が住所をかくしたとしても、その馭者に訊けば大抵見當がつくだらう。」



そこで二人は再び胡椒軒のはうへ引かへした。

ルコックは何事か思案にくれつゝ、默々として歩いてゐた。

「いやに默りこんだね。何か氣がかりなことでもあるのか。」

「うむ、困つたことに南風が吹きだした。靄は霽れたが、怪しい空模樣だな。このぶんぢや直きに雨だぜ。」

「さう云へばぽつ〳〵落ちて來たやうだ。今僕の顏にも觸つたよ。」

「そりや大變だ、早く歸らう。」

ルコックは癇のいゝ馬が鞭を感じたやうに、とつとと速歩になつて、

「さア急げ〳〵。」

南風がなぜ怖いのか。雨が降ると何故困るのか。アブサントはそれが呑込めないけれど、兎に角後についてすたこら驅け足をやつて、五分と經たぬうちに胡椒軒へ戻つて來た。

やれ〳〵といふ風で、早速一休みするつもりだつたが、ルコックはその隙を與へないで、

「大至急皿と、壺と、水を少しと、それから其處いらにある函を持つて來てくれたまへ。」

といひ捨てゝ、自分は瓶の破片で壁の漆喰をがり〳〵削りはじめた。そして細かい漆喰の粉末が三四升溜ると、半分は水で溶いてどろ〳〵なものにし、殘の半分はそのまゝ皿に盛つておいた。

「小父さん、今度はカンテラを持つて一緒に來てくれ。」

自分が先きに立つて裏庭へ行くと、例の靴跡の一等深い判然したのを見立てゝ、それに漆喰の粉末を注意ぶかく振りまいて、その上に溶いたどろ〳〵の漆喰を徐々と注ぎこんだ。幸ひこの試みはうまく行つて、略靴跡どほりの型が出來上つた。

この要領で、約一時間の後には、豫定どほり六個、即ち三對の靴型が取れた。勿論、輪廓は完全とはいへないが、こんな靴跡があつたといふ證明にはなる。

ざアつと一雨やつて來て雪が溶けてしまへば、この仕事が出來ないと見て、ルコックは慌てたのであつた。

しかし敏捷に立廻つたおかげで、恰度型が出來上つた頃に雨が降りだした。ルコックは大急ぎで、相棒の集めて來た函や板片をば、庭の靴跡にかぶせて、早速溶けないやうにした。

彼はほつと安堵の吐息をついた。かうしておけば、何時檢屍官がやつて來ても、まごつくことはないのだ。

「戸外の仕事はこれで十分だ。今度は屋内を檢べよう。」

二人は裏口から店の方へ歸つて來た。室内の様子は、出て行つたときと些しも變つてゐないやうであつた。物凄く取散したまゝで、三人の男の鯱こばつた屍體は、燭臺の紅い灯に照らされながら、依然としてそこに轉がつてゐた。

ルコックは時を移さず、片つ端から調査をはじめたが、床に散亂した食器類の中で、第一に注意を



ひいたのは、大きな野菜鉢と、一本の鐵製の大匙であつた。しかもこの匙の柄が法外に曲つてゐるところから察すると、喧嘩の初めに、誰かゞこれを武器として使つたにちがひなかつた。

なほ、彼等の飲みものは、酒と水と砂糖を割つた一種の混合酒で、その邊で佛蘭西酒と呼ばれてゐる、下等な酒であつた。酒盃は居酒屋に特有のもので、底が馬鹿に厚くて半分も酒が入らないのだが、その酒盃は五つ使つた形跡があつて、その中の三つは破れて、二つだけ完全だつた。しかし五つとも底の方に酒が殘つてゐて、注がれたのは佛蘭西酒らしいといふことは一見して判つた。ルコックはなほ念のために、それらの酒盃の一つ一つを舌で嘗めてみて、

「畜生。」

忌々しさうに呟いた。

それから、顚覆つた卓子を一つ〳〵引起してみると、煖爐のそばの窓際に轉がつてゐた卓子の上に、五つの酒盃と野菜鉢と匙をおいた跡が、濡れたまゝ判然殘つてゐた。

これが重大なことだ。何故ならば、これによつて、五人の者が一座で、一つの野菜鉢を平らげながら、酒を飲んでゐたといふ判斷が出來るからである。

ところで、その五人とは誰々であつたか。殺された三人と、加害者と、外にもう一人だ。

「して見ると、あの二人の女は、加害者と一緒ぢやなかつたのか。」

ルコックは當惑して叫んだ。

なほ確かな證據を攫まうとして、室中を探した末に、もう一つ稍小型の酒盃を發見したが、その底に殘つてゐる酒はブランデーであつた。

女がブランデーを飲む筈がない。これで、女共が加害者と一緒でなかつたといふことが、いよ〳〵確實になつたわけだ。ルコックの最初の思惑は、根柢から覆へされたのである。實に青天の霹靂といふべきことだ。

そのとき、突然に、

「はて、怪しいぞ。」

と叫んだのは、アブサントの頓狂聲。

「どうした、小父さん？」

「怪しいぢやないか。僕達がゐない間に、誰か此家へ入つた者がある。」

「そんなことがあるものか。」

とは云つたものゝ、それは有り得べきことであつた。彼等は戸口を開け放したまゝ、四時間も外に出てゐたので、故意にしろ偶然にしろ人が入らうと思へば、幾らでも入れたわけである。

第一に怪しいのは、シュパン婆のエプロンであつた。先刻警部が婆さんの顏からエプロンを引奪つて、傍へ捨てたつきり、警官達は誰もそんなものに觸りもしなかつたので、ルコック等が裏庭の方へ出てゆくときも、そのまゝになつてゐた。ところが今見ると、そのエプロンの位置が少し變つて、衣



嚢が裏がへしになつてゐるではないか。

「誰だらう、入つて來た奴は？　泥坊か？　まさかこの際に、泥坊が入らうとは思へないがなア。」

とルコックは暫く考へてゐたが、

「うむ、屍體が三個も轉がつてゐるところへ忍び込むなんて、加害者の仲間でなければ出來ないことだ。恐らく彼奴にちがひないんだ。が、想像だけぢや何ともいへないから、確かり檢べてみよう。」

そこで、二人は懸命にその證跡を搜し廻つたが、約一時間經つて漸く、裏庭にあつた男のと同一の靴跡が、表の戸口前についてゐるのを發見した。その邊は、ゼプロール警部が縱横に踏みつけた場所で、めちやくちやになつてゐる中から、たつた一つ目的の靴跡を探しあてたのだ。

早速、それを前にとつた型とくらべると、長靴の底に打つた鋲の形まで、そつくりその儘だつた。

「失敗つた！」ルコックは思はず切齒をした。「シュパン婆のエプロンの衣嚢に、重要な證據があつて、それを彼奴が奪つて行つたにちてひない。戸口に錠をおろして出かけるべきだつたね。あゝ、僕は何んて間抜だらう——」

いひかけたとき、ふと或る物を發見した。

彼は夢遊病者のやうにふら〳〵と、併し傍目もふらずに室の隅の方へ行つて、そこに落ちてゐた物を拾ひあげた。

「こいつは驚いた。僕の怠慢の御褒美としては、勿體ない代物だ。」

それは寶石商仲間が、俗にボタンと稱へて尊重してゐる、大きなダイヤモンドの耳飾りで、落ちてゐるのは片一方だけだが、縁付けなどは、素晴らしく精巧な細工を施したものであつた。

ルコックは眼を丸くして、見惚れてゐたが、

「このダイヤは、少くとも時價五六千法の價値がある。」

「靴跡の男は此品を探しに來たんだね？」

「いや、左樣ぢやあるまい。此品を探す目的なら、シュバン婆のエプロンなんかに觸るわけがない。彼が求めたのは、多分手紙……のやうなものだつたらう。」

「しかし不思議ぢやないか。」アプサントもその素晴しいダイヤに見惚れながら、「こんなに立派な、對で一萬法もする耳飾りをつけてゐる婦人が、どうしてこの見すぼらしい胡椒軒なんかへやつて來たんだらう。」

「まつたく不思議だ。有りさうもないことだ。けれど、この事件では、今後もこれに劣らぬ不思議が、續々と出て來るぞ。」

## 四、素晴しい報告

夜がしら〳〵と明け放れた。風が身に沁む、陰鬱な朝であつた。

やつと檢索を終へると、ルコック探偵は手早く大體の見取圖をひいて、それに簡單な説明をつけ加へた。但しその説明には、自分自身の名前は一字も出してない。そこが彼の用意周到なところで、つまり、自分の巧名手柄にわたることは一切表面へ出さないで、先輩の羨望嫉妬から免れようとする、賢明な手段なのである。

しかしこの見取圖によると、必要な箇所は一つ洩らさず踏査してあつて、それを見れば、彼の頭の好えと勤勉さが、誰の眼にもはつきりとわかるのだ。

それから、彼は新たにペンをとつて、正式の報告書を起草しはじめた。この報告書も、冗漫な記述を避けて、出來るだけ簡潔に認めたが、家の構造とか、器物の品質とか、距離、容積といふやうな點になると、技師か建築家でなければ斯うはゆくまいと思はれるほど、正確にして要を盡したものであつた。

アプサントも卓子の傍へ來て、同僚の書つぶりを熱心に見つめてゐたが、筆の進むにしたがつて、その確かりした記述に舌をまいた。

しかしルコックの大野心に至つては、アプサントなどに解りやうがない。務めて謙讓な辭句を使つて、自分の功績は敢て表面に出さぬとはいへ、名玉はどこへ隱したつて光るにきまつてゐるので、彼は、この事件を擔當する裁判官をして、必ず『この報告書を認めた探偵を呼べ。』と云はせるつもりなのだ。

わが雷名を轟ろかすはこの一擧にありといふ意氣込みで、ペン尖が熱くなるほど、力瘤を入れてゐ

るのである。

卓上には、彼が蒐集した證據の品々が並べられてゐる。材木の上に附着してゐた鳶色の毛屑や、の高價な耳飾りや、靴跡からこしらへたそれ〴〵の型や、衣嚢が裏がへしになつてゐるシュバン婆のエプロンや、加害者の短銃などがある、この短銃は最新式の五連發（二彈を發射したあと、三彈は殘つてゐる筈）で、倫敦スキナ街十四番地スチブン商會といふ、有名な銃砲店のマークが打つてある。

なほ、檢屍官が來た上で屍體を探せば、もつと別な證據の品が出て來るだらうといふことを、ルコックは豫期してゐるのだ。

報告書も大部分進行して、いま一息で出來あがらうといふ時、二人の部下を從へたゼプロール警部を先頭に、バリエール警察の署長と、囑託醫が二人と、それに輕歩兵五十三聯隊の曹長を加へた一行が到着した。この曹長は、被害者の中の軍服を着た男を鑑定するために、特に署長から依頼をうけてやつて來たのである。

一行より一足先になつた警部が、胡椒軒の戸口を入らうとすると、そこにアブサント爺がパイプを喫へて、スフィンクスのやうに突立つてゐるのを見て、横柄に聲をかけた。

「おい、君等は果して、大發見があつたのか？　我々をアッと云はせるやうな大祕密でも――？」

「私なんか鈍物でお話しになりませんがね。」アブサントは横着にも、パイプを口から取りもしないで、「ルコックさんから何か變つた報告がある筈です。」



若輩ルコックごときをさん付に呼んだのが氣に喰はぬので、警部はわざと呆けた振りをして、

「何だつて？　誰が報告するんだつて？」

「同僚のルコックさんがです。今熱心に報告書を認めてゐますよ、そのルコックさんがね。」

今度は耳が痛いほど聞えたと見えて、

「うむ、さては何か發見しをつたナ。」と呟いた。

やがて署長の一行が屋内へ入つて來て、慘狀を一見してゐる間に、恰度報告書を書き終つたルコックは、その書類を握つて署長の前に立つた。

「御苦勞々々々。可成り無氣味な一夜を過したね、君等は。」と署長は親切な調子でいつた。「しかしかうした事件では、別段新らしい證跡も擧るまいから、檢索も骨折り損だつたらう。」

署長は多少年功を經て、警察摺れがしてゐるだけに、却つて、この事件は有りふれた浮浪人共の喧嘩に過ぎないといふ、警部の報告を鵜呑みにして、高をくゝつて來たらしかつた。

「はア、併し全然無駄でもありませんでした。」とルコックは務めて婉曲に答へた。「私は上官の命令で此處に居殘りましたが、いろ〳〵踏査べました結果、圖らずも、加害者の友人――多分同類でありませう――が此家に來てゐた形跡を發見しました。私の推側によりますと、それは中年の男で、ソフト帽を被り、鳶色の厚ぼつたい外套を着てをりまして、靴は――」

「やッ、其奴だ！」と警部が突然に、「實は私が――」

といひかけて、何か後悔でもしたやうに、ふッと默りこんだ。
「何だね、ゼブロール君。」署長が問ひかけた。「言つて見たまへ。」
「實はかうなんです、署長殿。御承知のとほり、加害者は、留置場に打込んでありますが、一時間ばかり前に、私が警察前で貴方をお待ちしてゐますと、今ルコックがいつたやうな風體の男がうろついてゐました。其奴がひどく醉拂つてゐて、千鳥足で街を横切らうとするけれど、馬車でも通りかゝつたら忽ち轢かれさうで、危くて見てゐられませんでした。」
ルコックは聞いてゐるうちに總てを了解して、ハッと胸を轟かしたが、それを氣取られてはならぬと思つて、顏を背けた。
「で、私が二人の部下を呼んでその男を助けに行くと、彼はもう地面にへたばつて、ぐう〳〵眠つてゐました。搖り起して漸と眼をさまさせると、彼は暴れだして、むやみと喧嘩を吹きかけるものですから、やむを得ず、醉ひが醒めるまで留置場へ打込んでおきました。」
「その男を、あの加害者と同じ室に入れたのですか。」
ルコックが訊ねると、
「さうさ。君も知つてのとほり、あの留置場は二室に分れてゐるが、片一方は婦人用だからね。」
「それは困つたことをやつたな。」署長は暫く考へてからいつた。「もう取返しが付かんぞ。」
「今からでも遲くはありません。警官の一人を警察へ驅けさせて、我々が歸るまであの醉漢を留めお



くやうに、云つてやりませう。」
と警部はむきになつた。
すると、ルコックは手をふつて、
「駄目です。其奴が同類なら、とつくに醉ひを醒ましてゐて、今ごろは警察から消えてゐるでせう。」
それでも警部は斷念がつかぬと見えて、警官の一人を警察へ走らせた。
ルコックはやがて、署長の命令で、今脫稿した報告書を讀みあげた。明快した文章で、報告事項は、一々證跡をあげた上に、的確な推斷をくだしてゆく手際のあざやかさ！
署長は堪らなくなつて、とき〳〵讚め言葉を入れた。二人の囑託醫も感歎しながら聞いてゐた。
ゼブロール警部だけは、獨り反感をもつた。彼は頸がかくれるほど肩を聳やかし、嫉妬で顏が蒼白くさへなつてゐた。
「うむ偉い。この事件を正確に解釋した者は、君獨りだよ。」と署長は改めてルコックを讚めた。「俺も實は勘違ひをしてゐたけれど、君の說明を聞いて判然した。俺は警察でほんの一寸の間だけれど、加害者を訊問してみたが、實に頑固な奴で、絕對に口を開かない。自分の姓名さへも云はないんだ。どうも不思議な犯罪だ。ひよつとすると、これは、我々の想像も及ばない祕密——法律の手も屆かない怪事件の一つではないかと思ふ。」
ルコックは込みあげて來る微笑を嚙み殺して、「なアに、今に僕が判然させてお目にかける！」と心

に叫んだ。

報告が終ると、次に、屍體の檢案に取りかゝつた。

こゝで二人の囑託醫のことをちよつと述べておくが、凡そこの二人ほど正反對な醫者が、一所に落合つたことは珍らしいだらう。

一人は脊の高い、頭のつるりと禿げた老人で、不恰好な服に、型の古い外套を被り、流行遲れの鍔廣帽をかぶつてゐる。まつたく風采にかまはぬ學者風の人で、諸君は時としてこの種の學者が、巴里の陋巷にくすぶつてゐるのを見るだらう。專門の醫學に沒頭して、人類のために莫大な貢獻をしながら、世間からはその名も知られずに死んでゆく類の人だ。彼は人間苦のあらゆる方面を知りぬいてゐるので、その刺胳針のやうに鋭い眼で睨まれると、人は胸の奥底のどんな微かな祕密でさへも隱しきれないのである。

もう一人の醫者は若いしやれ者で、すてきに凝つた服裝をして、そのまつ白な纖細な手には革手袋をはめて、いつも親切さうに莞爾々々してゐる男だ。こんな先生は得て、藥種問屋の研究室で發見されて、新聞廣告を賑はしてゐるあの萬能藥をば、好んで推奬したがるのだ。

さて檢屍は、軍服を被た被害者の屍體からはじめられた。二人の醫師は、アブサントにも手傳はせて、二つの卓子を寢臺のやうに竝べて、その上に屍體を載せた。

「さア曹長殿、この男を檢べてくれたまへ。」



署長から指命されると、曹長はいや〳〵ながら進み寄つた。

軍服には輕步兵第二大隊の徽章がついてゐるけれど、曹長が見て、この男は第二大隊に屬してゐる者でないと斷言した。それに、髮を延ばしてゐることや、爪の剪り方、ゲートルの反對なまき方からいつても、この男は全然軍隊生活を知らぬ者だといつた。

なほルコックの注意によつて、帽子その他の所持品を檢べてみると、一つ〳〵番號が異つてゐて、しかもそれ等は、陸軍から古着屋へ拂下げたものであることが判明した。

細々の所持品では、ズボンの右衣囊から、刻み煙草とパイプとマッチ、左の衣囊からは七法と六十サンチーム入りの、ひどく汚れた革製の紙入れと、上製のリンネルのハンケチが一枚出た。それだけであつた。

だが、署長はその紙入れをいぢくつてゐるうちに、人の氣付かない仕切りがあるのを發見して、そこを開けると、一枚の折りたゝんだ紙片が入つてゐた。彼はすぐにそれを擴げて讀み下した。

親愛なるギュスターブ——かねての約束どほり、明日の日曜の晩は必ず虹霓ホテルの舞踏會へやつて來たまへ。金が入用なら、僕は出がけに幾らか門番に預けておくから、僕の住宅へよつて門番から受取つてくれ。

八時には虹霓ホテルへ着くやうにしてくれ。僕は大抵その前に行つてゐる筈だが、事によると、一步遲れるかも分らぬ。萬事好都合。

ラシヌール

「ラシヌールつていふのは、この男が死に際にいつた名前ぢやないか。」
警部がいふと、アブサントも想ひだして、
「左様々々、この怨みを晴らさずには措かぬなんて、凄い見幕でしたね。そのラシヌールといふ者に誘きだされて、陥穽にかけられたとか云つてゐましたね。惜しいことに、話の中途で死んでしまやがつた。」
ルコックは默つて、署長から手紙を受取つて、注意ぶかくそれを檢べた。普通の用箋に青インクで書いたもので、別に異つた點はない。用箋の隅のところに名前が刷り込んであるけれど、薄くぼやけてゐて、「ボオマルシエ」といふ文字だけが微かに讀まれた。
ルコックにとつては、それだけでも有力な手がゝりだ。彼はひそかに考へた。「この手紙は、ボオマルシエ遊歩街のカッフェで書かれたにちがひないが、何のカッフェかといふことは、今に發見してみせる。それが判れば、ラシヌールの何者であるかも判明するわけだ。」
警察官の一行が、署長を中心に緊急の打合せをやつてゐる間に、二人の囑託醫は、屍體檢案といふ難かしい、そして厭な仕事に取りかゝつた。
好々爺のアブサントはまた手助けに引張りだされた。
まづ、にせ兵士の屍體から上衣やズボンを脱がせて、綿密に檢べはじめた。
ところが若い方の醫師は、そんな細かい檢案の必要がない、そんなことは無駄骨だといつたやうな



氣持で、いゝ加減にやつて除けようとするが、老醫はさすがに自分の職責を重んじて、どんな些細な手續きをも省略せずに、几帳面にやつて行くのであつた。
いよ〳〵傷の問題になると、醫師達は頭蓋の破碎が致命傷だと斷言した。その報告書に記されたところによれば、可成り大きな堅いものゝ上に頭をのせて、何か扁平な部分を有する武器をもつて、激しい一撃を與へられたといふ推定である。
しかし、頭蓋が碎けるほどだから可成り重い武器を用ひたにちがひないが、短銃のほかは何の武器も發見せられなかつた。して見ると、加害者はこの男の襟頸を攫んで、壁に向つて激しく叩きつけたらしい。そして、この致命傷の外には、擦り傷一つ受けてゐないところから察すると、格闘はごく短時間であつたと見なければならぬ。その格闘は多分、警官隊が怪しい叫び聲を聞きつけたときに始まつて、ルコックが窓に登つて、被害者の倒れたのを見た瞬間に終つたのであらう。
次に、爐のそばに斃れてゐる二人の男の屍體を檢べたが、二人とも手足を長々と伸ばして仰向けに倒れてゐた。いづれも咄嗟の間に殺されたらしく、極度の恐怖を感じた痕が、あり〳〵と顏面に殘つてゐた。
「この二人は突然に、豫期しない、恐ろしい光景を見たらしい。」と老ドクトルが說明した。「私は恐怖で死んだ者の顏に、このやうな表情を幾度も見たことがあります。中にも或る女の如きは、近所の人が威かさうと思つて幽靈に化けて行つたところが、それを見ると極度の恐怖にうたれて、そのまゝ

死んでしまつたのですが、その女の表情が、恰度この二人に酷似でした。」

ルコック探偵はこの説明を聞いて、默會するところがあつた。

しかし殺されてゐるこの二人は、いつたい何者だらう。

第一の男は、年の頃、五十を越え、薄い頭髪は斑白で、顏は、その少し出張つた顎の濃い顎鬚だけを殘して、すべ〳〵に剃つてある。襤褸ズボンの端は、長靴の上にぶら下り、上體には汚れた、厚ぼつたい寬袍を着けてゐる。老ドクトルは傷口を檢べて、ごく近距離からの一彈で卽死したものと診斷したが、なるほど、その傷口は燒け焦げてゐる。

第二の男は、凡そ一ヤードの距離から彈丸を喰つたらしく、傷口は前の男のほど慘狀を呈してゐない。年齡は前の男より約十五も若く、小柄な醜男で、無髯の顏はあばただらけである。服は勞働者などが着る最も粗惡なもので、白つぽい辨慶縞のズボンに、寬袍は襟のところが裏がへしになつてゐる、しかし長靴は黑く磨きがかゝつてゐる。傍に落ちてゐた光澤付け帽子や、けば〳〵しい襟巾も、彼の人品にふさはしいものだ。

二人の衣囊を檢べたが、住所、性名、職業を知る手懸りとなるべきものは何もない。たゞ、紙袋に入れた刻み煙草と、手卷きの煙草と、ハンケチが出たばかり。なほ、年老つた男の財布には金が六十七法、若い男のそれには二ルイ入つてゐた。

要するに、的確な證據といふものは一つも得られなかつた。隨つて搜査の手掛りがないのだ。



加害者を捕縛したとはいひ條、彼がもし頑强に口をつぐんで、姓名をさへ申立てないとすれば、それつきりだ。珍らしくも奇怪な事件である。

「他に仕樣がないから、この三つの屍體を屍體留置場へ運ぶとしよう。さうしたら誰か見知り人が出て來るだらう。」

と署長はがつかりしていつた。

そのとき轆轤と轍のきしる音がして、一臺の馬車が胡椒軒の前に停つた。豫審判事が書記を從へてやつて來たのである。

署長をはじめ、警察官も、囑託醫も、皆この判事を知つてゐた。親しく談話したことがなくても、顏だけはよく見覺えてゐた。

「モリス・デスコルバルさんがやつて來たな。」

よく裁判所へ出入りしてゐるゼプロール警部がいつた。

この判事は、由緒ある貴族の家に生れたのと、頭が冴えてゐて、精力恪勤なので、名判事として知られた人である。

讀者諸君も記憶してをられるだらうが、那翁皇帝の股肱の臣に、忠誠無二の名を取つたデスコルバルといふ男爵があつた。その人は那翁が沒落して後も、千八百十五年に那翁黨の一揆が起つたときは、身を投げだして奔走した人で、那翁は常に彼の死を惜んでゐたさうだが、セント・ヘレナへ

流されてからも泌々思ひだして、「デスコルバルのやうな至誠の人物は、二度と再び求めがたい。」と人に語つたのであつた。

わが豫審判事は、このデスコルバル男爵の子息なのである。

四十二にしてはずつと若く見える方だが、齢は爭はれないもので、そろ〳〵額に小皺が現はれて來てゐる。

判事は現場へ着くとすぐに、屋内の慘狀や近隣の狀況をば、敏捷に、あらゆる隅々まで一通り檢べてから、

「これは重大な事件だ。」と謹嚴な口調でいつた。「實に容易ならん事件だよ。」

書記は、署長から提出された調書をしらべてゐたが、その間に、判事はルコックの認めた報告書を讀みはじめた。ときく「拙かあない！」とか「巧いぞ！」と思はず感歎しながら讀んでゆく。ルコックは、蒼ざめるほど緊張して、隅の方からその容子を眺めてゐた。

やがて判事は讀みをはると、署長の方へ向きなほつて、

「これは前の報告と、大分異つてゐますね。今朝貴方が出された報告では、この奇怪な事件を、浮浪人の喧嘩に過ぎないと見られたやうだが。」

署長は失敗つたと思つた。自分がぬく〳〵と寢床の中にゐて、ゼブロール警部から聞いたまゝの報告を裁判所へ送つたことが、今更のやうに悔まれた。



「今朝のは、最初の印象だけを取敢へず申し上げたのですが、その後いろ〳〵調べた結果、私の意見も變つたやうな次第でして——」

「いや、貴方を非難するつもりではない。寧ろ讃辭を呈したいのです。この報告で見ると、明晰な判斷で、機敏に、緻密に檢べてをられるぢやありませんか。」

「だが、實は。」と署長はもぢ〳〵して、「その名譽は私がお受けするわけに行かないので。」

「それならゼブロール君、君の御手柄かい。」

「どういたしまして。」警部は皮肉に答へた。「私はそんな怜悧者ではありません。私なんかは、自分で實際に檢べたゞけを報告するのが精一杯です。ところが今お讀みになつた報告書などは、奇拔なことが書いてありまして、恐らくそれに載つてゐる事柄は、筆者の頭の中にだけ存在するものでせう。」

「だが、二人の女の靴跡はそのまゝ殘つてゐるし、材木の上に外套の毛を殘した仲間の男も、實在の人物ではないか。それに、女が落して行つた耳飾りだつて、有力な證據だと思ふ。」

警部は馬鹿々々しい氣持になつて、肩をゆすぶりたいのを、ぢつと我慢してゐた。

「俺は斷然この報告を採用したい。」と判事は重ねていつた。「ところで誰ですか、これを書いた人は？」

「私の部下のルコックが書いたのです。すばしつこくて、器用な男です。」警部は憤つて、うで章魚のやうに眞赤な顏をして、「おいルコック、こつちへ出たまへ、判事殿が君に會ひたいと仰しやる。」

ルコックは衝と前にすゝみ出て、臆する氣色もなく述べた。
「報告書は概要だけを認めたのですが、私の考へでは――」
「それはまあいゝ。君の考へは、いづれ俺から問うたときに云つてくれたまへ。」
と判事はルコックの言葉を押へておいて、書記の折鞄から一通の命令書を取りだし、それを警部にわたして、
「この命令書を、加害者と此軒の主婦が拘留されてゐる警察へとゞけて、彼等二人を警視廳へ護送させてくれたまへ。あちらで一應審べる必要がある。」
それから、判事が囑託醫の方へ向いて、檢案の模樣を聽かうとすると、
「判事殿、今の命令を私に仰せつけて下さるわけには行かないでせうか。」
とルコックが冒險的にいひだした。
「それは可かん。君には別に用があるから此處にゐてくれ。」
「でも、この序に或る證據を攫みたいのです。今後二度と得られない機會なんですから、是非私に命じて下さい。」
判事は、この探偵に何か思惑があるらしいのを、早くも察した。
「よろしい。が、君は護送を終へたら、警視廳で俺を待つてゐてくれ。俺も此處の調べが濟むと、すぐに彼方へ歸るのだ。」



ルコックは占たッとばかり、命令書を引攫むが早いか、韋駄天走りに駈けだした。いや、殆んど地面の上を飛んで行つた。
彼は昨夜から一睡もしないくせに、一向疲勞を感じないばかりでなく、むしろこの時ほど體力の充實を感じたことはなかつた。この時ほど頭が冴えわたつたことはなかつた。

## 五、僞せ醉漢

ルコックは胡椒軒を出てから、たつた二十分で、バリエール警察まで駈けつけた。
警察では、番人がパイプを喞へて、留置場の前をのつそり〳〵と歩き廻つてゐたが、いかにも心配さうな顏で、とき〴〵鐵格子のはまつた窓の方へ注意ぶかい視線を投げてゐる容子からして、今日はよほど大切な鳥がそこに收容されてゐるといふことが、一目で知られた。
番人はルコックの姿を見ると、ほつとしたやうに立ちどまつて、
「どうですな、何か變つたことでもありましたか。」
「僕は判事から命令をもつて來たよ。これから犯人を警視廳へつれて行くんだ。」
「そいつは有難い。」番人は嬉しさうに揉み手をして、「護送馬車は一時間以内に此處を通ります。犯人等を馬車に投りこむと、私も肩が拔けて大助かりです。」
「ところで、犯人等は隔離しておいたゞらうな？」

「それはもう嚴重に、男と女を別々の室に入れてあります。昨晩は無事平穩でした、何しろ懺悔日曜でしたからね。」

「それはいゝが、醉漢が一人捕まりはしなかつたか。」

「えゝ、今朝の曉け方にね。あの人はゼブロール警部のお蔭で助かりましたよ。」

ルコックは心中にぎよつとしたが、

「大變なお蔭を蒙つたものだな、ハツハツハ。」

「いや、笑ひごとではありません。ぐでん〳〵に醉拂つて、往來をのたくつてゐたさうで、あのまゝ打ちやつておけば、きつと馬車に轢き殺されたでせう。」

「で、結局どうした。」

「何でも相當身分のある人でしてね、友人の家で一晩飲みつゞけて、屋外へ出ると急に醉ひが出たらしいんです。留置場へ打込んでおきましたが、暫くして醉ひが醒めると、ほろ〳〵涙を流して『いゝ齡をしながら、こんな馬鹿をやつて、家内に何と云譯をしたらいゝだらう。子供等にも面目がない』といつて、すつかり後悔してゐました。」

「その男は細君のことを何かいつてゐたかね。」

「しきりに細君の名前を呼んでゐました。ユードシノとかレオカデイとかゝさういつたやうな名前でした。放免してやると喜びましてね、私達の手に接吻をして、科料を支拂つて、剩錢も取らずに慌て



て歸つて行きました。」

「その男を、犯人と同じ室へ入れたゞらう。」

「えゝ、同じ室に叩き込みました。」

「兩人で何かしやべつてゐやしなかつたかい。」

「しやべるどころか、正體もなく醉拂つてゐて、ウンともスンとも云ひやしません。丸太棒のやうにころがつて、前後不覺に寢ころんでしまひましたが、醉ひが醒るとすぐに歸してやりましただからその間に、彼等は談話なんかする暇がありやしません。」

ルコックはぢつと考へこんで、

「やつぱり、左樣だ。」

「え、何がです？」

「何でもないよ。」

自分の推測を番人などに話したくはなかつた。どうせ云つたつて、この輩には解りつこないと思つたからだ。

「俺の推察どほりだ。」と彼は獨りで考へた。「その生醉漢は、かの仲間の男にちがひない。大膽で、冷靜で、敏捷な奴だ。我々が靴跡を檢べてゐる間に彼は胡椒軒へ忍びこんで、何か大切な仕事をやつて、それからこの警察前へ來て、大膽にも醉漢ひに化けてわざと拘留され、正體なく寢たふりをし

ながら、犯人と小聲で打合せをしたにちがひないんだ。彼はまんまと役目を仕終せたのだ。そして素性を隠すために、まつたく事實と反對のことを口走つたのだ。妻君や子供のことを彼がいつたとすれば、今は妻子を持つてゐない證據なんだ。」

しかしこの際、そんな推理に耽つてゐるべき時ではなかつた。それよりも、事實を確かめることが急務であつた。

「その醉漢はどんな風の男だつたかね。」

「脊が高く、肥つて、赭ら顔で、顎鬚はもう斑白になつてゐました。丸顔で、眼は小さくきよろ〳〵して、鼻は大きく扁べつたい鼻で、何處となく快活な、好人物といふ風でした。」

「年齢は？」

「四十以上、五十近いと思ひました。」

「職業は何だらう。」

「さあ、厚い鳶色外套にソフト帽といふ服裝からいへば、多分、商店の主人か番頭かでせう。」

ルコックは悦に入つた。その男の年齢も着衣も人相も、自分が想像したところと、ぴつたり符合してゐるではないか。

「だが一つ心配なことがある。その男はシュバン婆と何か話しはしなかつたか。」

すると番人は笑つて、



「そんなことが出來るものですか。あの婆は室がちがひます。婆奴、自暴くそになりやがつて、間斷なしに我々を呪つたり、嚇したりしてゐました。あんな口汚ない女つてありませんね。あの醉漢ですら閉口して、隔ての扉の覗き窓から、靜かにしろと窘めたくらゐです。」

ルコックはそれを聞くと、嚇怒と番人を睨みつけた。番人は呆氣にとられて、

「どうかしたんですか？　何故そんな顏をなさるんです？」

「うむ、それはな——」

探偵はいひかけたが、ふと思ひ直して、默りこんだまゝつか〳〵と留置場の方へ行つた。あとに殘つた番人は、

「へん、刑事なんて奴は大概あんな者さ。いやにつん〳〵してゐやがる。」

獨りでぶつ〳〵いつてゐた。

ルコックは、留置場の扉の覗き窓から、熱心に囚人の風を見守つたが、

「はて、この男だつたか知ら。」

と疑はぬわけに行かなかつた。あまりに樣子が變つてゐるからだ。

この男が夜前、胡椒軒の閾に突立つて警官隊を喰ひ止めたときは、いかにも傲然として、眼は憤りに燃え立つてゐた。それが今は悄然と崩折れて、沈みきつてゐるではないか。

囚人は、壁際の腰掛にぐつたりと腰をおろし、膝に頰杖ついて、呆然床を見つめながら、何事か深

い思ひに沈んでゐた。
「此男は汚い服裝をしてゐるけれど、決して、勞働者ではないんだ。」
と、ルコックは呟いた。やがてつか〳〵と室内へ入つてゆくと、囚人は顏をあげて、無表情な視線をルコックの方へ投げた。
「おい、何うした？」
「私は潔白です。」
「僕も左樣だらうとは思ふが、今僕はそれを調べに來たのではない。お前が何か欲しいものでもないかと訊きに來たのさ。」
「何も欲しくはありません。」囚人は答へたが、ふと氣をかへて、「お願ひしてもよければ、何か食べものと、葡萄酒を一杯戴きたいんです。」
「よろしい。すぐに持つて來てやるぞ。」
探偵は、自分で近所へその食べものを探しに出かけた。
「彼奴食べたくも飲みたくもないくせに、一度斷つて、また欲しいと云ひ直したのは、食ひ意地が張つてゐると見せるためだらう。」とも思つた。
ところが、實際食べものを持つて來てやると、彼はさも美味さうにペロリと平げて、それから葡萄酒の大酒杯をとつて、ぐつと飲みほした。



「甘露々々、結構なお酒ですね。」
この態を見て、探偵は落膽した。實は試しに、勞働者の飲む、強烈な、安混合酒を與へたのだ。それで多分厭な顏をするだらうと豫期してゐたら、案外にも甘美さうに飲みほしたのであつた。
やがて護送馬車がやつて來た。
厭がつて暴れるシュバン婆を眞先に車へうつし、それから殺人者を入れた。
今度こそは厭な顏をするにちがひないと思つて、ぢつと眼をつけてゐたが、殺人者は平氣なもので、慣れた棲家へでも歸るやうにアッサリと、その狹苦しい仕切りの中へ入つて行つた。
「これは堪らん。今日は何といふ惡日だらう。」と、ルコックはます〳〵癪にさはつた。「だが今に見ろ。きつと正體を見現はしてやるぞ！」

## 六、白い足

護送馬車はヌッフ橋をわたり、オールロッヂ河岸へ出て、やがて警視廳の嚴めしい門を入ると、狹い、濕々した前庭にとまつた。
ルコックは眞先に飛びおりて、囚人仕切りを開けた。
「さア到着たぞ、降りろ。」
そこには何の危險もなかつた。鐵の門は馬車が入ると同時に閉められ、十數名の制服私服の刑事達

か、前夜の獲物を見ようとして、犇とばかりに馬車を取り囲いた。
殺人者は悠々と馬車をおりた。こんなことには慣れきつてゞもゐるやうに、洒々したもので、何處を風が吹くかといひたげな顔をして、腰を立てると、うんと一つ伸びをやつた。
それから四邊を見まはして、にやりと笑ひながら、一向ためらふ容子もなく、入口から陰氣な廊下へ上つて、悠然と記錄室へ入つて行つた。前科何十犯の札付だつて、かうは行くまいと思はれるほど落ついたものだ。
ルコック探偵は、その不敵な態度に舌をまいた。
「彼は前にもこの役所へ來たことがあるんだな。繩目にかゝつた經驗ある者にちがひない。」
と、ひそかに思つた。
記錄室はだゝつ廣い室で、大きな煖爐に薪が盛んに燃えてゐて、むつとするほど溫かい。記錄係りの書記は、しきりに何か書類を調べてゐた。そして壁際の腰掛には、四人の看守が半分居睡りをしながら、自分達の役目のはじまるのを待つてゐた。
片隅に身長計が据ゑつけてあつて、犯人がそこを通るときに、否でも應でも身長を測られる仕掛になつてゐた。
書記は、ルコックが犯人に附添つてやつて來たのを見ると、
「やあ、もう護送馬車が來たのかね。」



「えゝ、これが關係書類です。」
書記は探偵からデスコルバル判事の命令書や、判事の署名した書類を受取つて、一通り讀みをはると、
「あゝ、此奴が昨夜の三人殺しだね。判事の命令では、假豫審を開くさうだから、後で衣替をさせてくれたまへ。今着てゐる着衣は證據品になるのだ。」
やがてこの室の頭ともいふべき記錄主事が、囚人を前へ呼びだして、記錄をはじめた。
「お前の性は？」
「メイと申します。」
「名は？」
「ありません。」
「馬鹿をいへ。名が無いつて奴があるかッ。」
「貴方にお答へすることは出來ません。何もかも判事の前へ出てから申し上げます。貴方は迂濶私に口を割らせるつもりでせうが、左樣は行きません。」
「それは利益になるまいぞ。罪が重くなるばかりだ。」
「そんなことがあるものですか。私は潔白です。私は飽くまでも自分を辯護しなければならないが、今は何も申し上げるわけに行きません。それは左樣と、警察で取あげられた金を返して戴きたいもの

です。たしか百三十六法と八スーで、此處を出たときに早速要る金ですからね。どうぞ、そのことも記錄に止めておいて下さい。いつたい何うしたんですか、彼金は？」

その金といふのは、この男を留置場へ叩きこんだとき、警察で取り上げたもので、ルコックが番人の手から受取つて自分で持つてゐたので、今衣嚢からそれを取りだして、卓子の上においた。

「此金がお前の金だ、百三十六法と八スー。それから、ナイフとハンケチと葉卷が四本。」

囚人は明らかに滿足の色をうかべた。

「おい、靴を脱げ。」

主事が命令すると、何故か、囚人は躊躇ふやうな眼付をした。

「何故靴を脱らなければならないんですか。」

「衡桿の傍に立たせるためにさ。お前の身長を正確に書き止めておくのだ。」

囚人は無言で重い長靴をぬいだ。彼は靴下を穿いてゐなかつた。そして靴の踵が破れてゐた。

その容子にぢつと目をつけてゐたルコックは、

「ハ、アお前は目曜の外は靴を穿かん男だな。」

「何故そんなことを仰しやるんですか。」

「稀に慣れない靴を穿いたので、踝まで泥をかぶつてゐるぢやないか。」

「くだらない。」と囚人はやりかへした。「私の足が貴族らしくないので、都合がわるいつていふんで



せう。」

「いや、足をこんなに汚したことが悪いのだ。見れば泥だらけだが、元來眞白な、きれいな足であることに、僕が氣づかぬと思ふか。爪だつて丁寧に劈つて、磨かれてゐる爪だ。

と、ルコックは手早く一枚の紙を椅子にひろげて、

「この上に足を載せろ。」

囚人はもぢ〳〵した。

「こらつ、早くしないか。」

叱りとばされて、厭々ながら紙の上に足をおくと、ルコックは、その皮膚にこびりついてゐる泥を、ナイフで丹念にけづり落した。

それは可成り珍妙な光景であつた。そこが警視廳でなかつたら、人が聲を出して笑つたゞらう。

やがて、紙の上にすつかり泥を剝ぎ落すと、ルコックはそれを二包みに分けて、一つは自分の衣嚢に入れ、他の一つを主事の前へ出して、

「これを犯人の眼の前で封じて、保管して下さい。後でこの泥が證據になりさうですから。」

主事は探偵の要求とほりに、その包みに封印を施して、鞄に收めた。囚人はそれを見てせゝら笑ひをしながら、肩をゆすぶつてゐた。

「着替へをしろ。」

命じられるまゝ、血痕に汚れたぼろ服を脱いで、お仕着せの獄衣をつけたが、彼はもう泰然として顔色をうごかさない。で、その顔面筋肉からは、もはや内心の祕密を感知することは出來なかつた。

囚人が硝子の破片や刃物で破獄を企てたり、或は鉛のかけらを持つてゐて、祕密に手紙を認めたりするのを防ぐために、主事が彼の頭髪や鬚に櫛を入れて、それから口腔の内を檢めたが、そのときも、彼は完全に無關心な顔をしてゐた。

これらの手續きが濟むと、主事は看守の一人に、

「此男を獨房の第三號へ連れて行け。」

と命じた。

すると囚人は、その監房ならよく知つてゐるとでも云ひたげに、自分で先きに立つて、ぐん〳〵歩いて行つた。(註、巴里では未決監と警視廳と裁判所が同じ構内にある)

「圖太い浮浪人だ。」

と書記は忌々しさうに呟いた。

「左樣でせうか、彼男が浮浪人？」

ルコックが疑念を殘すやうにいふと、

「それにちがひないさ。」と主事も斷言した。「いや、もつと性質のわるい兇漢だよ。たしかに前科者



だ。私は前にも彼奴の顔を見たことがあるやうな氣がする。」

主事にしても、書記にしても、犯罪方面では多くの見聞を經て來た人々だが、ゼブロール警部と同樣に、この男を只の浮浪人と見たのであつた。若年のルコックだけが獨りそれに疑ひを懷いたけれど、多勢に無勢で、この際議論は何の役に立ちさうもなかつた。

恰度そこへ、シュバン婆が引かれて來た。彼女は警察を出るときあんなに暴れたが、馬車の中ですつかり觀念したと見えて、今は小羊のやうに從順になつてゐる。そして涙ぐましい眼付をして、言葉巧みに、彼女のいはゆる「お役人樣方」に哀訴嘆願した。正直なわたしが何故こんな酷い目に遭はされるのでせうと怨んだ。

倅のボリットが竊盜罪で入獄してゐるので、自分が一家を扶養つてゆかねばならぬのに、今、自分が罪科にでも陷されたら、嫁や可愛い孫は明日から路頭に迷ふ。それが可憫さうと思召すなら、どうぞお助けなすつて下さいと口說きたてた。

が、一通りの調べが終つて、廊下へ退ると忽ち生地を現はして、看守を相手に何かいひ爭つてゐる聲が聞かれた。

「あんまり酷いぢやないか。もう少し親切にして貰ひたいね。お前さん達が優しくしてくれると、わたしは此處を出てからたんまりと報酬もあげるし、店へ來ればお酒をふんだんに飲ましてあげるよ。」

そんなことを云ひく、監房へ引かれて行つた。

記錄係りの調べも濟んだし、デスコルバル判事が來るまでは、別段用事もないので、ルコックは廊下で暫く油を賣つてゐたが、昨晩の事件を方々から訊かれるのが煩いので、たうとう門前の方へ出て行つた。

彼は犯人についての確信は毫しも變らない。彼の男が眞犯人で、しかも何か事情があつて身分を祕してゐる者にちがひない。何にしても警視廳や監獄の規則に馴れきつた奴で、そして前に考へたより千倍も怜悧な奴だと思つた。

「何て自制力の強い男だらう。あれほど峻烈な取扱をうけながら、平氣を裝うて、老巧な役人を欺かうとするんだ。大膽な奴だ。」

ルコックはあらゆる微細な點まで考へてみた。屋外の寒さをも打ち忘れて、その問題を考へながら漫歩いてゐると、やがてデスコルバル判事が書記を從へて馬車でやつて來た。

待ちかねてゐたルコックは、いきなり馬車の傍へ驅けよつた。

「俺も現場を臨檢した結果、どうも君の意見が正しいやうに思ふ。その後何か新らしい事實を發見したかね。」

と判事の方から話しかけた。

「一つ發見しました。些細なことのやうですが、重要な事實です。」



「うむ、後でゆつくり說明してくれたまへ。俺はこれから犯人共を調べなければならん。今日は大膽の調べだけで直きに終るから、君はこゝで待つてゐてくれ。」

判事はいひすてゝ、大急ぎで監獄の方へ入つて行つた。

ルコックは、判事が直きに終へるといつたけれど、少くとも一時間はかゝるだらうと思つて、少しうんざりしたが、案外にも、それから二十分と經たぬうちに、判事は書記をのこして、一人で歸つて來た。

「俺は大急ぎで歸宅しなければならん。君の話しはまた後で聞くよ。」

「しかし、判事殿——」

「その話しは後にしてくれ。被害者の屍體は屍體置場に置いてあるから、君は嚴重にあれに注意して貰ひたい。そして今晩——いや、君が最善と思ふ方法を取つてくれゝばいゝんだ。」

「しかし判事殿、私は——」

「いや、その話しは明日にして貰はう。明日の朝九時に、裁判所の俺の室へ來たまへ。」

判事は何故か慌てゝ馬車の中へ飛びこんだ。馭者は發矢と鞭を鳴らした。

「何だ馬鹿々々しい。あれでも裁判官か。まるで狂氣の沙汰だ。」

ルコックは取殘されてひどく憤慨したが、どうも判事の容子が怪しいので、ふと或る疑念が胸にうかんで來た。

「事によると、判事は有力な手がかりを摑んだかも分らん。鍵を握つたかも分らん。それがために、僕を避けたのではなからうか。」

左様だとすれば恐ろしい打撃だ。彼は堪らなくなつた。どんな風に囚人を審べたゞらうか。あれほど要慎ぶかい男が、すぐに自白したとは思へないが、うつかり口を辷らしたのではあるまいか。左様だとすれば、今頃は後悔の臍を嚙んでゐるにちがひない。それは監房へ行つて容子を見ればわかることだ。

ルコックは大急ぎで監獄へ行つて、獨房第三號の厚い扉の覗き窓から、内部を覗きこんだ。

かの囚人は戸口と反對の側の藁床の上に、蒲團をすつぽりと被つて、僅かに眼と頭だけを出して、壁の方へ向いてゐた。

眠つてるのだらうか？　眠つてるにしては、體が怪しくうごめいてゐるではないか。ルコックはその云ひやうのない變な運動を見て、ぎよつとした。彼は眼で見る代りに、耳を覗き窓へ押しつけたが、微かに、窒息するやうなその呻き聲は、どうも只事ではないやうだ。

「おうい、誰か來てくれ。早く〳〵。」

ルコックは聲を限りに叫んだ。

それを聞いて看守が十人ほど驅けつけたので、すぐに扉を開けて室内へ踏みこんだが、蒲團をはね除けて見ると、果して、囚人は獄衣の帶を頸に捲きつけ、絞壓器の代りに、食事のときに運ばれた錫



の匙を咽喉笛にあて、、縊死を計つてゐたのであつた。

急報によつて監獄醫が驅けつけて、應急手當を施した。もう十分遅く發見されると、手遅れになるところであつた。

囚人はやがて意識にかへると、きよとんとした眼付で四邊を見廻はした。まだ生きてゐる自分を訝かるやうな風であつた。と、眼に涙が一杯にうかんで、やがてほろ〳〵と頰を傳はつた。

種々理由を訊ねたけれど、囚人は相變らず口をつぐんで、一言も答へようとはしなかつた。

「かゝ、死神に取つかれちや危い。といつて、獨房へ他の囚人を入れて見張らせるといふわけにも行かん。仕方がないから此奴を縛つておかうぢやないか。」

ルコックは看守等に手傳はせて、囚人の手足を縛りつけた。それでほつとして監房を出て行つたが、この突然の自殺騒ぎから考へて、裏面に容易ならぬ祕密が伏在してゐることは、爭はれないと思つた。

「どうも不思議だ。彼奴は何故あんなに捨鉢になつたのか？」

先刻判事がこの囚人を審べてから、急に樣子が變つたのも、ルコックは氣がかりだつた。

## 七、その夜の馭者

兎に角問題が難かしくなつて來た。かの囚人は、ゼブロール警部等が考へてゐるやうに、前科數犯

の曲者なら、何故自殺などを計つたのか。
監房内の自殺は、大てい初犯者に限られてゐるもので、前科數犯の强か者が自殺を企てるといふやうなことは、まづ無いといつてよい。それは監獄の統計が示してゐるのである。
これによつて見れば、かの囚人は、生命よりも大切な祕密をもつてゐるとしか思へないのだ。
今、時計が朝の四時を打つた。
着のみ着のまゝちよつと横になつたばかりのルコックは、がばと寢床から跳ね起きて、間もなく宿を飛びだした。
五分の後、彼ははやモンマートル通りを歩いてゐた。
相變らず不愉快な天候で、靄が深く立ちこめてゐた。が、英氣潑剌たる青年探偵にとつて、そんなことは問題ではなかつた。
足早にぐん〳〵と、サン・チュースタシュまで行くと、
「おい、どうした？」
人を馬鹿にしたやうな、横柄な聲で呼び止めた者がある。
ふと顏を見ると、ゼブロール警部だ。警部は三人の部下を從へて、市場へ網を張りに來たのであつた。その邊は、警察で目星をつけた盜賊や浮浪人を捕縛へるのに、誂へむきの場所なのである。
「今朝は馬鹿に早いな、ルコック殿。」と警部は皮肉な口調で、「君はまだ彼奴の素性を探してゐるの



か？」
「え、、まだやつてゐます。」
「彼男はやつぱり變裝した王族か、それともたゞの侯爵かね？」
「まあさういつたやうな身分の者です。それは間違ひのないことです。」
「左樣かい。それぢや君の眼識どほりだね。どうだい一杯奢つちや。」
「え、、奢りませう。」
氣前よくさういつて、近所の酒場へ入ると、皆がい、氣になつて從いて行つた。
酒杯に酒が充たされたとき、ルコックは警部に向つて、
「恰度い、ところでお目にかゝりました。實は屍體置場へ誰か一人やつて貰ふやうに、貴方にお願ひに行かうと思つてゐたところです。それはデスコルバル判事の注意で、今日あたり屍體置場へ大勢の者が押しかけるだらうから、彼處へ警官を張込ませておくやうにといふことでした。」
「よろしい、アブサント爺をやらう。」
機敏な刑事が要るところへ、又もや鈍物のアブサントを見立てるとは、可成り馬鹿にした遣り方である。けれど、ルコックは敢て不平もいはなかつた。小怜悧に立廻つて此方の計畫を打破すやうな者よりは、馬鹿でも命令を忠實に守るアブサント爺の方が優しだと思つたからである。
「そんな手筈は、なぜ昨日のうちに云はないんだ。」と警部は不機嫌だ。

「昨日は他に用事があつたものですから。」
「他の用事だつて？」
「えゝ、バリエール警察へ行きました。あの留置場を檢べる必要があつたので。」
間もなく彼は起ちあがつて、勘定を支拂ふと、
「僕はお先に失禮します。」
さういつて遽だしく酒場を出て行つた。
「驚いたね。」警部は酒杯を臺の上に叩きつけるやうにして叫んだ。「ルコック奴探偵術のいろはも知らんくせに、人を喰つてゐやがる。出鱈目な報告書をこしらへて、巧い文句で判事を誤魔化さうとしたんだ。彼奴はあれでまんまと昇進しようといふ魂膽さ。」
しかしルコック探偵が今倉皇として飛びだしたのは、デスコルバル判事と會ふ前に、搜査上もつと確かな手がかりを攫んでおきたいと思つたからである。
差當つて、事件のあつた晩にシバルレ街で兩人の女を乘せた馭者を探さねばならなかつた。
そこで先づ、警視廳の馬車營業者名簿について、フオンテーンブロー街道からセエヌ河までの、あらゆる馬車屋の名前と、所番地を調べた。そして片つ端から、それらの馬車屋を廻つてみた。が、時刻が早いので大抵寢てゐたり、馭者が馬の手入れが忙しいといつて、出て來なかつたりで、なかなか要領を得ない。



ルコックは殆んど絶望しかけたが、七時半頃に、城壁の外のトリゴオといふ馬車屋で聞くと、何でも日曜の夜半、といふよりも月曜の未明に、此家の馭者の一人が、仕事の歸りに一組の客につかまつて、厭々ながら市内へ送つて行つたとかいふ話しを聞いた。
その馭者は高い襟をつけて、狡猾さうな眼付をした、小柄な年寄りであつた。彼は中庭で馬車に馬をつける準備をやつてゐた。
ルコックはつか〳〵とその男の傍へ行つて、
「お前だね、日曜の夜半から月曜の未明にかけて、兩人の女客をシバルレ街から乘せて、市内へ行つたのは。」
「はい、多分、私のことでございませう。」
と馭者は此方の風態をじろ〳〵打ち眺めて、要心ぶかい口調だ。
「そんな曖昧な答へをしないで、判然いつてくれ。」
「あゝ、あの御婦人方が、馬車の中に忘れものでもなすつたのですか。」
探偵は歡喜にふるへた。これが探してゐた男にちがひないのだ。
「お前も聞いたゞらうが、あの晩、あの近所に犯罪があつたのだ。」
「えゝ、聞きました。居酒屋に人殺しがあつたさうですね。」
「しかもあの兩女は現場から逃げ出したのさ。それで、行く方を探してゐるんだ。僕は警視廳の探偵

だよ。」
馭者は蒼くなつた。
「さては惡い女共だ。道理で酒手が多いと思ひましたよ。一ルイの金貨が一つと、百スーの金貨が二つ、皆で三十法貫ひましたが、穢らはしい金だ。使つてしまつたから仕樣がないけれど、左樣でなかつたら溝へでも捨てたいくらゐです。」
「お前は何處まで送つて行つたのか。」
「ブルゴーニュ街までまゐりました。番地は忘れましたが、家は記憶えてゐます。」
「ぢや、馬車を停めたのは、その女達の家の戸口ではなかつたんだな。」
「それは判りませんが、私は、女達が戸口の訪問鐘を引くのを見ました。たしかにその家へ入つて行つたやうです。何なら其家へお伴しませうか。」
すると、ルコックはいきなりその馬車へ跳び乘つて、叫んだ。
「行つてくれ。大急ぎだ。」
しかし、その二人の女客は、まるつきり智慧のない者であつたか？
否！
彼女等は自分達の危險な立場を十分覺つてゐたにちがひない。しからば、往來で雇つた馬車を自宅へ横付けにするといふことは有り得るだらうか？



再び、否だ！
してみると、馭者に敎はつてその住居を突き止めようなんて、途方もないことだ。
ルコックは早くもそれに氣づいた。けれど、
「有力な證據を捉まうとすれば、最初は、信じがたいことをも信じなければならぬ。」
これが彼の搜査上の金科玉條で、何でもこの信條に基いて活動することに極めてゐるのである。
馭者は金切り聲で馬を叱りながら、しきりに鞭をあてた。
ショアジ街へさしかゝつた頃、ルコックは馭者に向つて問ひをはじめた。
「おい、その二人の女がお前を呼び止めたときの模樣はどんな風だつたね？」
「別段變つたこともありません。あの日は馬鹿に間がわるくて、遊步街に六時間も立つてゐましたが、からつきし客がありません。雨は降るし、稼ぎはなしで、うんざりしました。夜半になつて漸と三十スーの酒手に有りついたけれど、寒いのに、馬も疲れたので、すつかり厭になつて、ぶつ〳〵歎しながら馬舍の方へ歸つて來ました。ところが、シバルレ街を眞直にやつて來て、ピカール街への曲り角を少し過ぎたあたりで、二人の女が街燈の下にしよんぼり立つてゐるのを見ました。が、格別氣にも止めませんでした。この年齡になりますとね、旦那、女なんかはもう——」
「そんなことは何うでもいゝから、肝腎の筋をいつてくれ。」
「へッ、へえ、何氣なく通り過ぎると、背後から、『馬車屋さん、馬車屋さん。』私は聞えないふりを

したが、今度は『酒手をあげるよ、一ルイだよ。』つていふんです。一ルイと聞いて、ちよい と考へてゐると、『その外に、馬車賃を十法あげよう。』と來たので、私は、早速馬車を停めました。」

話しがまだるつこいのに、探偵は焦々した。が、こんな手合にかゝつちや、疊みかけて訊いたつて駄目だ。相手のいひたい放題にいはせておくと、却て運びが早いのである。

「夜半にあの邊をうろついてゐる女に、ろくな奴がありませんからね。」

と馭者はつゞけた。

「姉さん、濟みませんが、お金を前拂ひにして下さいつて云ひますと、私を呼び止めた方の女が、直ぐに三十法出して、さアこれをあげるから大急ぎで驅つておくれ、つていふんです。」

「うむ、お前は話しがうまいな。」探偵はお世辭をいひながら、「ところで、その二人の女だが——」

「何うかしたんですか。」

「いや、どんな種類の女だつたね、お前の睨んだところでは？」

すると馭者は、その赭ら顔ににつと微笑をたゝへて、

「どうせ碌でもない女だと思ひましたよ。」

「服裝はどんな風だつたね。」

「虹霓ホテルへ舞踏に出かける女達ですから、別段變つた服裝でもありません。一人は綺麗な風をしてゐましたが、もう一人は、まるでだらしのない恰好でした。」



「お前を呼び止めたのは何方だい。」

「それは綺麗な服裝をした方の女ですがね——」

いひかけて、何か大變なことでも想ひだしたやうに、手綱をぐいと引きしめると、

「あゝ左樣だ！」馭者は叫んだ。「女達の話し聲をちよいく小耳に挿みましたが、何でも、一人が、『奥さま』と崇め奉ると、一人が『お前く』と横柄な言葉づかひをしてゐました。」

「うむ、うむ、うむ。」探偵は三種の聲音で、つゞけざまに肯づいて、「それで、奥さまと呼ばれた女は何方だい？」

「見すぼらしい服裝をした方です。その女は若い方の女を捉まへて、それが李の木でゞもあるやうに、むやみと搖ぶつて、『お前は仕樣のない女だよ。さあ早く歸りませう。卒倒がしたけりや、歸つてからするがいゝ。』さういつて叱りつけると、若い女は、『奥さま、わたしはほんたうに動けないのでございます。』と如何にも苦しさうでした。私は、この若い娘は酒を飲み過ぎたんだと思ひました。」

やはりルコックが考へたやうに、その兩女は階級が異つてゐたのである。

たゞ、纖弱な女を主人とし、頑丈な女を召使と思つたのが、ルコックの見當ちがひで、今聞けば、その點は反對であつたのだ。

「お前の見たのは、それだけか。」

「まアそんなところですが、もう一つ變だつたのは、見すぼらしい女がお金をくれたときに、ふと氣

がついて見ると、その手が大變に小さくて、子供の手のやうで、聲は、怒つてゐるくせに、まるで音樂のやうな涼しい聲でした。」

「美人だつたらう？　頭髪はどうだい、黄金色か、それとも黒味勝か？」

馭者は、立てつゞけの問ひに、どぎまぎして、

「ま、待つて下さい。私の見たところぢや、美人といふほどでもなく、あまり若くもありません、頭髪は黄金色で、毛が多い方でした。」

「脊は高い方か、低い方か。肥つてか、痩せてか。」

「中位です。」

漠然とした答へだ。

「綺麗な服装をした女はどうだい？」

「氣をつけて見もしませんが、何でも小柄な女でした。」

「もう一度邂逅したら、顔が分るかい。」

「分りさうもありません。」

ブルゴーニュ街の中程まで行くと、馭者は急にある家の前で馬を停めた。

「此家です、あの女達が入つて行つたのは。」

ルコックは、頸にまいてゐた絹のハンケチを疊んで衣嚢に入れると、馬車を降りて、つか〳〵とその



の家の玄關へ行つた。

門番部屋には、一人の婆さんがせつせと編物をやつてゐた。

「マダム。」

探偵は丁寧に呼びかけながら、かのハンケチを衣嚢から取りだして、

「私は、この家に室住居をしていらつしやる方へ、此品をお返しするために伺つたのです。」

「此家には大勢いらつしやいますが、誰方に御用ですか。」

「さあ誰方か、私にも分りませんがね。」

「御冗談仰しやつてはいけません。」

婆さんは、言葉のみ丁寧なこの客が、自分を愚弄つてゐると思つたらしい。

「いや、冗談ぢやありませんよ。實はかうなんです。一昨日の未明に、私がこの前を通りかゝると、二人の御婦人がこのハンケチを落したのも知らずに、大急ぎで此家へ入つて行かれました。私はハンケチを拾つて後を追ひかけたけれど、もう姿が見えない。時刻が時刻だから、お前さんを起すのもお氣の毒と思つて、そのまゝ歸つたが、昨日は生憎忙しい用事があつて伺ひかねたので、今日やつと屆けに來たのです。」

そのハンケチを卓子の上に置いたまゝ、歸りかけると、

「貴方、ちよつとお待ちなさい。」婆さんは呼止めた。「御親切はありがたいんですがね、此家には、

夜半に歸つて來るやうな御婦人は一人もをりません。」
「そんなことをいつても、私だつて眼がありますよ。この眼で確かに見とゞけたのです。」
「はあてね。」
婆さんは暫く首をかしげてゐたが、漸と思ひだしたらしく、
「あゝ左樣々々、あの晩、夜半に訪問鐘が鳴つたので、わたしは聞き耳を欹てたけれど、人が入つた氣配もありません。また近所の腕白どもの惡戯だらうと思つて、玄關の戸をあけて見ると、二人の女がすたこら逃げてゆくのを見ました。」
「何方へ？」
「ヴアランヌ街の方へ驅けてゆきました。」
ルコックはまた落膽した。けれど、後でこの婆さんを役立てることもあらうと思つて、丁寧に禮をいつて、再び馬車に乘つた。
「僕が想像した通りだ。あの女達は此家に住まつてるんぢやないんだ。」
馭者も呆氣にとられて、肩をすぼめた。そして又くどくと女達の惡口をいひ出しさうな樣子だつたが、ルコックは早くも懷中時計を取りだして、
「もう九時だ。一時間遲れた。大至急屍體置場へ驅つてくれ。」



## 八、判事の奇禍

あの不思議な殺人事件以來、殺害された三人の屍體は屍體置場へはこばれて、毎日公衆の眼に曝されてゐるが、未だに見知り人が出て來ない。
そのくせ彌次馬が間斷なしに押寄せて來る。まつたく門前市をなすといふ騷ぎだ。係りの役人達はお蔭で目が廻るやうな忙しさである。
「今日も彌次馬がやつて來るぜ、女の御客も多いこつたらう。」
冗談をいひながら開門すると、果して大勢の彌次馬がどつと雪崩れこんだ。
ルコックが馬車で驅けつけたときは、それらの亢奮した群衆が、屍體置場にぎつしり詰まつてゐた。
彼は橋の上で馬車を停めさせ、
「屍體置場へ横付けにしちや拙い。こゝで降りよう。」
さういつて、第一に懷中時計を、次に財布を取りだした。
「かつきり一時間と四十分かゝつたね。馬車賃は幾らだい。」
「お金はよろしうございます。」
「それはいかん。」

「いゝえ、一錢だつて頂いていゝものですか。私はあんな女達から金を貰つたことを思ふと、口惜しくつて仕様がありません。ですから彼女等が捕まるまでは、御遠慮なく乘り廻はして下さい。」

後には名探偵と謳はれて飛ぶ鳥を落したルコックも、その時分はまだ驅けだしの、金に不自由勝ちな身分だつたので、强ひて爭ひもしなかつた。

「旦那は、私の名前や所番地が御用でせうね。」

「それは聞いておかなければならん、多分判事からも召喚があるだらうから。」

「えゝ、召喚があれば、知つてゐることは何でも申し上げます。私はトリゴオの馬舍の馭者で、バビヨンといふ者でございます。幾らか資本を出して、あの馬車屋を共同で營つてゐるのです。」

ルコックが急ぎ足で行きかけると、馭者は再び呼び止めた。

「モシ旦那、屍體置場からまた何處ぞへおまはりなんでせう。先刻、遲れて困つたと仰しやいましたね。」

「實は裁判所へ行く筈だつたのさ。だが此處からは近いから歩いて行くよ。」

「そんな遠慮をなさらないで、馬車でいらつしやい。街角でお待ちしてゐます。私もプレトン子だ、一度いひ出したら後へは退きません。せめて、あの女達から取つた三十法だけでも乘つてやつて下さい。」

かうまで云はれると、無下にも斷りかねた。で、彼は默つて、首を縱にふりながら、屍體置場河岸



の方へ歩いていつた。

場内はもう滿員で、群衆は建物の前にもうよ〳〵してゐた。それが男ばかりでなく、物好きな女房や、若い娘も大勢混つてゐた。職工や女事務員などは、勤めに出る途中迂り路をして見物に來るのであつた。臆病な連中が戸口でもぢ〳〵してゐる間に、膽つ玉の太い奴が屋内へ入つて、見て來た慘狀を說明してゐるのもあつた。

かうした輩は、殺人事件だとか、人が馬車に轢殺されたり、セエヌ河や、サン・マルタンの運河に身投げがあると、素的に喜ぶ。そんな屍體が見たさに、とき〴〵屍體置場の前を通つてみる。そして謔のやうな話だが、彼等は屋内を覗いて屍體がないときは、落膽して歸つてゆくのだ。

さて、この日も彌次馬は容易に立ち去る氣色がなく、ます〳〵殖えるばかりであつた。冷たい朝でありながら、屍體置場の内は人いきれのためにむつとするくらゐで、それに消毒用のクロール石灰の臭氣が鼻をついた。

人々の私語や、歎息や、驚歎の聲にまじつて、屍體を載せた扁石の端から、絕えずちよろ〳〵と大理石の水盤に落ちこむ水音が聞えてゐる

小さなアーチ窓から忍びこむ灰色の光線の下に、屍體の筋肉がくつきりと浮きだし、その蒼白い皮膚の色が、一種凄愴な感じを與へる。壁には、見知り人の參考のために、死者の着てゐたぼろ服が懸けてある。これらの服も一定の期間を經過すれば、拂ひ下げられるのだ。何一物だつて無駄にしまい

とするのである。

だがルコックは、かうした光景に心を慘ますべく、あまりに多忙であつた。

彼は場内へ入ると、三つの屍體に一瞥をくれてから、そこへ來てゐる筈のアブサント爺を探したけれど、姿が見えない。ゼブロール警部にあれほど賴んでおいたのに、警部は故意にか、或は忘れて約束を履行しなかつたのか。それともアブサント爺がその命令を受けながら、怠慢つたのであらうか。

ルコックは、兎も角も番人頭に會つて、樣子を訊いてみた。

「まだ見知り人は出ないかね。」

「まだ出ません。そのくせ、彌次馬がこんなに大勢來てゐます。こりや何ですね、大人二スー、子供半額で入場料を取るといゝんですね。さうすると、維持費が浮んだ外に儲かりますぜ。」

平生なら、こんなことも面白い話題になりさうだが、ルコックはそれどころでない。

「早速だが、警視廳から刑事が來なかつたか。」

「先刻一人來てゐました。」

「ぢや、外出したんだらう。何處にも見えないがね。」

番人頭は答へをする前に、怪訝さうに相手の顏を見ながら、

「貴方も刑事さんですか。」

「さうだよ。」



なほ、その言葉を證明するために、證劵を出して見せると、

「あゝさうでしたか。お名前は？」

「ルコックつていふんだ。」

すると、番人頭は初めて莞爾して、

「貴方がルコックさんですか。御同僚は、急な用事が出來たさうで、外出されましたが、貴方にお手紙を置いて行かれました。」

ルコックはその手紙をうけ取ると、すぐに封を切つて讀み下した。

ルコック殿——小生は今朝この處に出張を命ぜられ、見張り中、九時頃になつて、三人の若者が腕を組みながら入つて來たが、その服裝から察すると、小賣商店か問屋の事務員と見えた。彼等はやがて屍體の傍へ行くと、其中の一人が突然顏色をかへて「ギュスターブだ！」と囁いた。しかるに、他の二人は慌てゝその男の口へ手をあてゝ「何を云ふんだ、馬鹿。係り合にでもなつたら大變ぢやないか。」とたしなめた。

彼等はそのまゝ立ち去つたので、小生は直ちに追跡した。かの「ギュスターブだ。」と口走つた若者は、よほど激しく感動したものと見え、足許もふらついてゐたが、他の二人は彼を扶けて、附近の小料理屋へ入つた。よつて小生もつゞいて入り、そこの食卓でこの手紙をしたためた。貴兄はやがてこの手紙を番人頭より受取らるゝ筈。なほ小生は、引きつゞ右三人の

若者を尾行するつもりです。

ア、プ、サ生

拙い筆蹟で、各行に幾つかづゝ綴りの間違ひがある。しかし文意は明晰してゐる。アブサント爺が一道の光明を認めつゝ勇み立つてゐる有様が眼に見えるやうだ。

ルコックも急に晴やかな氣分になつて、すぐに四つ角まで引返して、待たしておいた馬車に跳び乘つた。駁者は探偵の顏を見ると、

「旦那、何か耳よりのことがあつたんでせう。」

と問ひかけないわけに行かなかつた。

「シッ！」

ルコックは制した。彼は今受け取つた手紙について、考へを纏めることに夢中だつたのである。裁判所の門前で馬車をおりたが、この老駁者を歸すのに大分骨がをれた。もつと〳〵乘り廻はしてくれと頑張るのを、因果をふくめて漸と歸つて貰ふことにした。

ルコックが裁判所へ入らうとすると、彼は駁者臺に立ちあがつて、

「モシ旦那、トリゴオの馬舍のパピヨン爺をお忘れなさらんやうに——九百九十八番地ですよ——千から二引くと記憶えてゐて下さい。」

そんなことをいひながら、名殘惜しさうに歸つて行つた。

ルコックは裁判所の三階まで登つて、俗に豫審廊下と呼ばれてゐる、長い陰氣くさい廊下へ曲ると



角のところの大きな樫の卓子に控へてゐた守衛に、

「デスコルバル判事は來てをられるだらうね。」

問ひかけると、守衛は首を振つて、

「デスコルバルさんはお見えになりません。多分三四週間お休みでせう。」

「え、どうして？」

「昨夜お宅の前で、馬車から轉げ落ちて、脚骨を折られたさうです。」

金があり餘つて、車倉に馬車、厩舍に駿馬、下男下女の外に駁者をも召抱へてゐるほどの人が、車上にふんぞりかへつて、馬蹄の音も輕やかに風を截ると、途ゆく者は羨望の眼をそばだてる。

だが時として、その駁者が酒を飲みすぎて、手綱の呼吸が亂れ、馬車が顚覆するといふやうな災難が起る。馬が狂氣のごとく暴れだし、車上の主人公がはずみを喰つて墜落する——しかも尖がつた止め石の上へ。そして抱き起して見ると骨が碎けてゐる。さうした事故は、巴里の何處かで、毎日のやうに起つてゐるのである。

ところが、ルコックは今、デスコルバル判事が馬車から墜ちたことを聞くと、仰天して、殆んど顏色を失つた。その驚き方があまり大袈裟で、傍から見ると可笑しいくらゐだつた。

「どうしてそんなに驚愕なさるんですか。」

「いや何でもないよ。」

と誤魔化したものゝ、その實、彼は二つの出來事の只ならぬ暗合に、愕然としたのである。それは囚人のメイが監房で自殺を計つたことと、今聞いたデスコルバル判事の墜落。

右二つの出來事が、いかなる脈絡でつながつてゐるかわからぬが、兎に角判事のこの災難は、ルコックにとつて當惑の種であつた。

「僕はもう歸らう。」

「貴方はどうかしてゐますね。判事が一人休まれたつて、裁判所の事務は停つたわけぢやありません。デスコルバルさんの受持事件は、他の判事さんが代つて擔當されることになつてゐます。」

「いや、僕の用は他の事件と違つて、例の居酒屋三人殺しの一件なんだから。」

「そんならさうと、早くいつて下さればいゝのに。あの事件はセミュレ判事の受持になつたさうで、先刻警視廳へ貴方を呼びにやつた筈です。」

「さア困つたなあ。」

ルコックはまた當惑の色をうかべた。この重大事件が、平凡な判事の手にかゝつたら、形なしだと思つたのである。

「あゝ、貴方はセミュレさんを知らないんですね。」守衛は親切な口調で說明をはじめた。「セミュレさんは立派な判事ですよ。苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をしてゐる他の裁判官とは性質が違ひます。この間も或る囚人があの方から審べられた後で『あの判事奴、すつかり俺に白狀させやがつた。お蔭



で俺は死刑だらう。しかし憎めない人だ。』つて云つたさうです。まつたく偉い人ですよ。まア會つて御覽なさい。」

さう聞けば、何だかその判事が頼もしい人のやうに思はれて來た。で、守衛に教はつたとほり、二十二號といふ番號札を打つた室を叩くと、

「お入り。」

と快活な聲。

この室の主人は四十位の年輩で、脊が高くて可成り肥つた人だ。それがセミュレ判事であつた。

「あゝ、君がルコック刑事だね。まあ掛けたまへ。例の事件が突然俺の手に廻はされたので、今てんてこ舞ひをやつてゐるところだ。五分間だけ待つてくれたまへ。」

ルコックは椅子に腰をおろした。そして、新たにこの事件で自分の上役になつた人の容子を、それとなく研究しはじめた。

セミュレ判事は、いかにも押出しの立派な人で、公明と慈悲の相をたゝへ、愉快な碧眼が、顏中を晴れやかに見せてゐる。

この判事の傍にゐる書記は、判事殿を漫畫にしたやうな恰好の男で、脊低で、でぶ〳〵肥つて、だだつ廣い顏にいつも微笑を浮べてゐる。快活で無邪氣らしいこの書記の名前は、ゴッケといふのであつた。

判事は一生懸命に事件の内容を研究してゐた。卓子の上には、ルコックが苦心して蒐集めた外套の手屑や、ダイヤの耳飾りなどの參考品が置かれてあつた。彼はルコックの認めた報告書を幾度も讀みかへしながら、ときゞ卓上の參考品を手に取つたり、現場の見取圖を參照したりした。

五分間といつたが、五分ではなか〳〵濟まない。約半時間も書類を調べたあとで、漸と肱掛椅子に延々ともたれて、

「お待たせしたね、ルコック君。」

ゆつたりした口調で話しかけた。

「デスコルバル君から、この書類の端へ書きつけてよこした注意書きによれば、君は頭腦のいゝ人で、十分信頼するに足るつていふことだ。」

「お役には立ちますまいが、一生懸命にやるつもりです。」

「探偵の報告書で、これほど立派に書けてゐるのは珍らしいよ。君はまだ年齢は若いし、この調子で勉強したら大したものになるだらう。」

ルコックは丁寧にお辭儀をした。と、判事は語をついで、

「今、君の報告書を讀んだところだが、俺も君の意見に贊成だ。デスコルバル君も同感だつたさうだね。しかしこの事件は大きな謎で、案外骨が折れるぞ。」

「いくら骨が折れても、きつと解決してお目にかけます。この謎を解かずには措きません。」



とルコックは熱心に叫んだ。

「その點は君に信頼してゐるが、しかし前途遼遠だ。さて、君の方は何れだけ進行してゐるかね。その後新事實の發見もないか？」

「どうやら目鼻がつきかけて來たやうに思ひますが――」

と、ルコックは犯人の仲間にちがひない醉漢の大膽な振舞から、かの犯人が監房で自殺を計つたことや、當夜現場から逃げた二人の女についての馭者の證言や、ブルゴーニュ街の門番女の言葉、それからアブサント爺が、三人の怪しい若者を尾行してゐることまで、殘らず物語つて、最後に、犯人の足から剝ぎおとした泥の包みと、自分でパリエール警察の留置場の土間から取つて來た土の包みを、衣嚢から取りだして、判事の卓子においた。

「うむ、その方法でなくちや可かん。つまり君は、何もかも否定してゐるあの囚人をば、證據によつてへこまさうといふんだね。」

傍に聞いてゐた書記も感心したやうに肯づいた。

判事は卓上の參考品を、一つ〳〵抽斗の中へ藏ひながら、

「これから審問をはじめるんだが、まづ胡椒軒の女將を調べよう。多分何か聞き出せるだらう。」

呼鈴を鳴らさうとすると、ルコックは慌てゝ、

「判事殿、私にお願ひがあります。」

「何だね？」
「今日のお審べは、私にも陪聽を許して下さい。供述を聞いてゐるうちに、案外いい考へが浮ぶこともありますから。」
最初の審問は、豫審判事が非公式に取調べるので、普通からいへば、書記のほか列席出來ないことになつてゐるが、特殊な場合は、警察官に限つて陪聽を許すといふ規定がある。
「よろしい。聽いてゐたまへ。」と判事は呼鈴を鳴らして、小使を呼んで、「シュバンといふ女囚を裁判所へ護送るやうに命令しておいたが、まだ來ないか。」
「その女は廊下に控へてをります。」
「すぐに、此室へ呼べ。」
間もなくシュバン婆が、右左にお辭儀をしながら、判事の室へ入つて來た。
この女は幾度も裁判所の門をくゞつた經驗から、如何に敬意を表すべきかを心得てゐるのだ。
彼女は癖のわるい白髪を念入りに撫でつけ、質素な服をきちんと着こなし、拘引されたとき所持してゐた金で、牢番から買つてもらつた黑縮紗の帽子をかぶり、衣嚢には眞白なハンケチを二枚も用意してゐた。それは悲しさうな申し立てをするときに、涙を拭くための準備なのである。そして如何にも潔白な、哀れつぽい、しかも愼ましくあきらめてゐるやうな表情で、彼女は入つて來た。
「此女、喰へない役者だわい！」



判事もルコックも、すぐにさう思つた。判事は彼女の素行調書を讀んだ後なので、殊にさういふ心證が深かつた。が、果して、判事の辛辣な訊問に對して少しも怯まずにぬらりくらりと受け流して、一向に要領を得させなかつた。
婆はたしかに犯人も知つてゐるし、格鬪の經緯も見たらしいが、知らない、見てゐないとばかりで、何等的確な申し立をしない。
これには判事も根氣負けがして一先づ彼女の審べを切り上げなければならなかつた。
「お前は虛僞の申立をしてゐる。ようく考へて見ろ。お前の答辯一つで、今度の裁判に、只の證人として召喚されるか、共犯者として引出されるかゞ決まるのだ。」
婆はこの不意擊ちに、ひどく面喰つたやうであつた。しかし判事はもう何も云はなかつた。
やがて婆が供述筆記に署名して其室を引き退つた。後で、判事は、書記に命じた。
「こゝに典獄へ宛てた指圖書がある。小使にこれを持たしてやつて、あの加害者をすぐ此室へ廻はすやうにいつてくれ。」

## 九、不敵の笑ひ

口を開くまいと決心した男に自白させることは、至難の仕事である。が、同じ決心をした女に至つては、どうにも手のつけやうがない。「惡魔に懺悔させるよりも女に自白させることが困難である。」

とは、昔からいはれてゐることだが、まつたくそのとほりである。
「あの婆は、何もかも知つてゐるやうですね。」
ルコックがいふと、判事もうなづいて、
「左様らしい。それは目付でわかるよ。あの兵隊服を着た若者が、死際にラシヌールといふ者を怨んで、きつと復讐するといつたが、婆はそのラシヌールなる者をも知つてゐるらしい。しかし彼婆は容易に口を割りさうもないから、結局そのラシヌールといふ男が、この事件の鍵を握つてゐるわけだ。そこで我々は、是非ともその男を發見しなければならない。」
「私は、巴里中の人間を一人殘らず聞き訊してゞも、きつと發見してお目にかけます。」
ルコック探偵のこの意氣込は、頼母しいものであつた。苦心で胸塞がつてゐた判事も、思はず笑顔になつて、
「それにしても、次の審問までに、何か云はせたいものだな。」
「それは默目でせう。」
「うむ、女つてやつは厄介な代物だからな。男は證據を突きつけられると、潔く自白するけれど、女は左様でない。女はその證據にけちをつける。明るい陽向へ引出せば、眼をつぶつて『おゝ暗い。』なんて云ひたがる奴なんだ。」
と、判事は忌々しさうに床を一つ踏み鳴らして、



「ところで、あの婆は何故あのやうに、頑固に口をつぐんでゐるのだらう。事によると、彼奴も共犯ぢやないかな？　それとも、誰かに口止めをされたゞらうか。」
「共犯ではありますまい。あの婆が共犯だとすると、加害者はたゞの浮浪人といふことになつて、何も問題がないわけですからね。」
「そこだよ、難かしいのは。君の考へでは、あの加害者はどういふ身分の者かね。」
ルコック探偵はこの點について、最初から頗る大膽な意見をもつてゐるのだけれど、この際それを判然と判事の前に述べることは、さすがに出來なかつた。
「しかし、あの晩酔漢に化けて留置場に入り込んだ男が、加害者の仲間だとすれば、其奴がシュバン婆に大金を與へる約束で、口止めをしたらしく思はれますが――」
謙遜な口調でいひかけたとき、先刻監獄へ指圖書を持つて行つた書記が戻つて來た。書記のうしろに一人の憲兵がついて來たが、室へ入ると直立不動の姿勢で、
「判事殿、私は典獄からの使であります。シュバン婆は獨房でなければならぬか何うか、判事殿に伺つて來いといふことであります。あの女囚は、獨房では堪へられぬから、雜居房の方へ移してくれといつて、煩く請願みますので。」
判事はちよつと考へた。彼女を雜居房に入れると、何等かの方法で、外界と交通を始めるだらう。そんなことがあつては堪らないのだ。

「やはり獨房だね。變更の必要があれば、此方から改めて命令をやる。」
「ハイ。」
憲兵は右足を一歩ひいて、くるりと廻れ右をやつて、出て行つた。
書記は衣嚢から大きな封筒を取りだして、
「典獄からの申告書でございます。」
至急親展と特筆したその申告書には、こんなことが書かれてあつた。
判事殿――メイなる囚人を審問せらるゝ際は、十分に御警戒あらんことを希望いたし候。
彼は自殺を企てゝ以來、極度に亢奮し、ますゝ自暴自棄に陷り候ふゆゑ、小官は已むを得ず、緊衣を着用せしめて拘束いたし居り候。彼は夜間一睡も致さず、その狂的動作は刻々に募り候。而して頑强に口を噤み、今だに一言も發し申さず候。
今朝食事を差入れたるも、彼は恐れて拒絶いたし候。このまゝ餓死する覺悟なる如く見受けられ候。併しながら、稀に見る危險なる囚人にて、如何なる捨鉢の行動に出づるやも計りがたく、大いに警戒を要するものと存じ候。右申告候ふ也。
「危險い奴ですね。」書記は怖氣づいたらしく、「彼奴をお審べになるときは、要愼のために、憲兵を此室へ入れませうか。」
「君は囚人が怖いのか。古參書記のくせに、つまらんことをいふものぢやない。」



「怖いことはありませんが、萬一亂暴な眞似でもすると――」
「何をいふんです。」ルコックは堪らなくなつて、口を入れた。「私がついてゐる以上は、大丈夫ですよ。」
判事は、囚人を審問する場合に、卓子が城壁の用を爲すといふことは百も承知だが、たつた今書記をたしなめた手前もあるので、わざと煖爐の前へ席をうつして、
「さあ囚人を呼べ。他の者を入れてはならんぞ。」
やがて戸が荒々しく開いて、かの囚人が踏み込むやうな勢ひで入つて來た。
そしてつかゝと室の中央まで進むと、凄い眼付きをして四邊を見廻し、
「判事殿は何處に居られますか。」
「判事は俺ぢや。」
「いや、他の人です。」
「他の人とは？」
「昨日監獄へ私を訊問に來られた人のことです。」
「うむ、デスコルバル判事は、昨晩自邸の門前で馬車から墜ちて、脚を折られたさうだ。」
「エッ？　――」
「それで俺が代つたのぢや。」

今の今まで狂亂的に亢奮してゐた囚人は、何を感じたのか、見る〳〵顏が眞蒼になつて、足許がよろけて危く倒れさうだつた。

「確かりしろ。起立してゐるのが辛ければ、椅子にかけていゝぞ。」

判事が優しく勞るやうにいつたが、囚人は一生懸命に姿勢を立て直した。

「もう何ともありません。ちよつと頭がぐら〳〵つとしたので——」

「お前は長く食事を攝らないさうだな。」

「はい、警察でこの方に——麵麭と葡萄酒を貰つて以來、何も食べません。」

さういつて、ルコックを指した。

「何か食べたくはないか。」

「食べものは欲しくありませんが、水を一杯飲まして下さい。」

「葡萄酒でもやらうか。」

「いや、水で澤山です。」

そこで一杯の水を與へると、彼は一息に呑みほし、更にもう一杯を所望した。そして、生命の泉でも吸込むやうにそれを飲んでしまふと、漸と生きかへつたやうな風であつた。

「どうだ、氣分はいゝか。」

「大變樂になりました。」



「お前は昨日自殺を計つたさうだが、淺慕なことをしては可かんぢやないか。自殺は罪惡の一つぢや。お前は多くの罪を犯した上に、もう一つ罪惡を加へるところであつたのだ。」

すると、囚人は急に手をふつて、

「私は罪がありません。正當防衞です。亂暴者が三人も飛び蒐つて來たものですから、已むを得ず立ち向つたので、あんなときは誰だつて左樣する權利があると思ひます。それだのに、私は殺人者として、監獄に叩きこまれました。こんな、生き埋めになつたやうな境涯を忍ぶくらゐなら、寧そ死んだが優しと思つたのです。私は妻も子もない獨身者ですから、死んだとて、誰も悲しんでくれる者もありません。ところが、あれ以來、役人達は私に緊衣を被せて、附きつきりに監視してゐますが、まるで狂人扱ひで、とき〳〵私の眼の前に蠟燭を廻して、瞳孔を試したりします。」

およそ罪人が裁判官の前へ出ると、十人が九人までは、何かしら辯解の手段を講ずるものだ。それは監房の中で一生懸命に考へて來るのである。だから彼等は罪の有無にかゝはらず、判事の前に立つと、書籍の目次でも展げるやうに、その辯解手段が順をおうて展開することになる。

ところが、この囚人は、少しも造り飾つた風が見えないばかりでなく、典獄からわざ〳〵注意して來た危險な事態なんか、起りさうにも思へない。

そこで判事は、安心して卓子の向ふの席に復つた。

「お前は、今朝も食事を拒んださうだな。」

すると囚人は、くすぐつたさうな顏をして眉をひそめたが　やがて蟠りのない聲でからく〳〵と笑ひながら、

「それは何も自殺と關係したことではありません。私は緊衣を被せられてゐて、手が利かないものですから、看守が赤ん坊を養ふやうにして、私に食べさせようとするので、あまり馬鹿々々しいから堅く口を結んで居ると、病犬に藥でも飲ませるやうに、ぐいく〳〵匙を押しこむので、私は癪にさはつて、喰ひつかうとしました。口へ指でも入れたら嚙み切つてやらうと思ひました。すると看守達は、私のことを『恐ろしい奴だ、圖太い野郎だ。』つていふぢやありませんか。ハツハツハ。」

その光景を想ひだしたらしく、もう一度からく〳〵と笑つた。

ルコックは吃驚した。

判事は、一生懸命に平氣を裝ひながら、

「看守は上官の命令を守るだけのものだ。お前は彼等を怨んだつて仕方がない。神妙にさへしてをれば、誰も緊衣などを被せはしないよ。」

「これから神妙にします。が、牢屋は退屈で、とても我慢が出來ません。仲間でもあれば氣が紛れることもありませうが、あの獨房に寂然してゐると、何だか恐ろしくなつて來ます。彼方は濕々して、水が壁を傳はつて流れます。あの濕りは、人の涙が石から滲み出るのです。」

「うむ。しかしお前は潔白なら、直きに釋放されるだらう。そこでお前はまづ、自分の潔白を證明する必要がある。」



「どういふ風に證明したらよろしいでせうか。」

「俺の問ひに對して正直に答へればいゝのだ。」

「それはもう、正直にお答へします。神樣に誓つて——」

と、天に向つて誓ひでも立てるやうに、手をあげた。

「囚人のお前が誓言したつて仕樣があるまい。」

「なるほど、これは可笑しいですね。」

彼は恥かしさうにその手を下ろした。

判事は左りげない風をしながら、實はその一擧一動に注意を拂つてゐた。なるべくこの男を氣安くさせようと仕向けて來たが、どうやらそれが成功したらしかつた。

「今もいつたやうに、早く釋放されたくば、正直に答へるといふことを忘れてはならんぞ——ところで、お前の姓は？」

「メイと申します。」

「名は？」

「ありません。」

「そんなことがあるものか。」

囚人はまた癇が高ぶりさうになつたのを、ぢつと押し靜めて、
「昨日から名前を訊かれたのが、これで三度目です。その都度名が無いといへば、そんな筈がないと誰方も同じやうなことを云はれます。謔をいふ積りなら、ピーターとか、ジエロームとか、ジャンとか出鱈目な名前を申し立てればいゝのですが、私は謔は大嫌ひです。まつたく名前はありません。その代り苗字なら幾つも持つてゐます。」
「云つて御覽。」
「えゝと、最初はアヒロアルと呼ばれました。それはフガッス爺と一緒だつた時分のことで——」
「フガッス爺とは誰のことか。」
「興業師で、猛獣使ひの名人でした。珍奇な動物を呼びものに、各地を打つて廻りました。虎やゝライオンや、美くしい色の鸚鵡や、人間の股よりも太い大蛇——さうした澤山の動物を持つてをりました。ところが、可憫さうなことに、その爺は亡なりました——」
ふざけてゐるかと思ふと、眞面目らしくもあるので、判事もルコック探偵も、これが判斷に迷つた。
「その話は、それで好い。」と判事は相手を沈默させて、「さて、お前の年齢は？」
「四十から四十五までの間です。」
「出生地は？」



「多分、プルターニュだつたかと思ひます。」
「注意しておくが、」判事は儼然となつた。「お前がそんな調子で答へるなら、釋放は難かしいぞ。お前の答へは無禮だ。」
と、囚人の顏には、眞から當惑したらしい、不安な表情が顯然とうかんで來た。
「私は正直にお答へしてゐるので、決して貴官を侮辱するつもりではありません。」彼は溜息をついて、「お疑ぐりなら、もつと詳しく身の上話を申し上げます。さうすると、私の誠意もお解りになりませう。」

## 一〇、旅藝人

裁判官に對して虛僞を申し立てるといふことは、容易な業でない。すぐに尻尾をつかまれる虞があるからだ。それゆゑ、怜悧な囚人ほど口數が少くて、成るだけ事實に觸れまいとするものだ。しかるにこのメイは、自分から進んで身の上話を陳べようなんて、實に不思議な囚人といはねばならぬ。
「そんなら、話してみるがいゝ。」
判事から許しが出ると、彼は左も滿足さうに、眼を輝かしながら、ぐつと反身になつて、
「では早速申し上げます。話しは今から約四十五年前に溯ぼりますが、或る日、トレングロ爺と呼ばれた男が、競技や曲藝をやる旅藝人の一座を率ゐて、ガンギャンプからサント・ブリアーヌの方へ旅

をしてゐました。三輛の大きな馬車に、一座の衣裳道具などを一杯に積んで、街道を緩々と進んで行つたが、シヤテロードランといふ可成り大きな町を出はづれて間もなく、爺は路ばたの小川の縁に、何か白いものが落ちてゐるのを見つけました。

『おい、何か落ちてゐるぜ。』

女房にさういつて、馬車から降りて、その白いものを拾ひ上げると、思はずアツー　と叫びました。かう申しあげると、貴官方はきつと、

『それは何であつたか。』

と御問ひになりませう。はい、それはまことに詰らぬものでした。爺は斯く申す私を拾ひ上げたのです。私はそのとき生後六ケ月ばかりの赤ん坊だつたさうです。」

囚人はちよつと言葉を切つて、一禮してから、

「さて、トレングロ爺は、拾つた私を女房の傍へ持つて行きました。女房は氣立ての優しい女だつたので、私を抱きあげると、體を檢べてから、乳を飲まして、

『丈夫さうな子ですね。きつと母親が貧乏で捨てたんでせう。可哀さうだから、私達の子にして育てませうよ。そしてぽつ〳〵藝を仕込むと、五六年も經てば一座の愛嬌者になるわ。』

さういつて良人に勸めました。次に名前を何う附けようかといふ相談になりましたが、季節が恰度五月の初旬だつたので、私はメイと名づけられました。」



彼は喝采でも求めるやうに、人々の顏を一順見廻したが、誰も何とも云つてくれないので、すぐあとをつゞけた。

「トレングロ爺は素より無敎育な男で、法律など一向知らんものですから、拾ひ子をしたといふことを屆け出でもしませんでした。それゆゑ私は、戸籍上ではこの世に存在しない者でありました。何故つて、戸籍簿に登錄されたものでなければ、世の中に存在する者として取扱はれないのであります。

だが私は、生長くなるに從つて、このトレングロ爺の手落ちが、結局幸ひであつたと思ふやうになりました。私は何處の戸籍にも載つてゐない者で、兵士に取られる氣づかひもない。私は兵役がきらひだから恰度いゝんだ——そんな風に考へました。適齡が過ぎてから、或る法律家が、私に注意してくれたことがあります。今のうちに戸籍を何とかしないと、手續きが面倒だから、後では出來なくなるだらうといふことでした。しかし私はもう自暴になつてゐて、そんなに面倒な戸籍なら入れて貰はんでもいゝ、一生日蔭者で通さう——と決心しました。

「さういつたやうなわけで、私は名前もなければ、出生地も判明しないのであります。」

その聲や、身振りや、眼付、表情までぴつたり一致してゐて、一語だつて怪しい響きがなかつた。

「ところで、お前は何で生活してゐるのか。」

「私にも職業があります。私はそれで佛蘭西の内地や、外國を旅してゐました。」

「うむ、外國へも行つたか？」

「はい、その後、シンプソンといふ男の一座に加入して、十七年間、英吉利や獨逸を巡業しました。」
「競技者の一人だな。それにしては、お前の手はあまり白くて、軟かいではないか。」
囚人はぎつくり參るかと思ひの外、却つて得意げに自分の手を突きだして、
「仰しやるとほり、私の手は綺麗ですが、それは、私がよく手入れをして、滅多に使はないからなのです。」
「手を動かさずに、どうして給料が貰へるのか。」
「口上で面白可笑しく藝題を進めてゆくのが、私の役目。つまり道化役です。自慢ぢやありませんが私はその道では一廉の才能をもつてゐるつもりです。」
「ふむ。」
判事は掌でぽんと自分の頤を叩いた。囚人が有理らしい謔をいつたと思はれる時にかうするのがこの判事の癖なのである。
「では、お前のその才能を俺に見せてくれないか。」
「御冗談でせう、それはどうも——」
と囚人は笑つた。裁判官が單に戯弄ふのだと思つたらしい。
「可笑しいことはない。演つてみろ。」
かう眞面目に云はれると、拒むわけには行かない。もう延引ならなくなつた。



彼は覺悟を決めたらしく、颯と顏を緊張め、突然に癇高な聲でやりだした。
「音樂止めい！　大太鼓も默れ！　——淑女竝びに紳士諸君、サアはじまり〳〵——天下無敵の大一座、偉大なる藝人の素晴らしい演伎が、いよ〳〵はじまりとござい。まづ鞦韆から、綱渡り、それから勇壯活潑で、優美でしなやかな、天下一品の曲藝——」
「もういゝ。」と判事は押し止めて、「佛蘭西ではそんな風にやるんだな。ところで、獨逸へ行つたときは何うする。」
「そのときは、獨逸語です。」
「演つてみろ。」
セミユレ判事は、獨逸の方で育つた人で、獨逸語はよく解るから、自分で聽いて鑑定しようとするのである。
すると囚人は、つんと取りすました態度をつくつて、勿體ぶつた獨逸語でやりだした。
「えゝ、御當地官憲の御許可を得まして、名譽ある市民諸君の御觀覽に供しまするは、今回初めて御目見えの、ゲノフエーザ、又の名を——」
「よろしい。」
判事はまた慌てゝ止めた。そして何がなしに起ち上つた。多分當惑を隱さうとするためであらう。
「次は英吉利へ行つた場合だが、一寸待て——。英語の解る者を此室へ呼ばう。」

そのとき、ルコックは慎ましく前に進んで、
「英語なら、私も解ります。」
「それは好都合だ。」
判事がいつたとき、囚人は早くも英吉利風の生眞面目な顏付になつて、嚴めしく鯱こ張つた身振をしながら、莊重な口調でやりはじめた。
「淑女竝びに紳士諸君、まづ以て女皇陛下の聖壽萬歲を祝し奉り、次に御當地の市長閣下に、深厚なる敬意を表します。そも〳〵光榮あるこの英國を除きましては、如何なる國に於きましても、かくまで驚歎すべき珍獸奇鳥の蒐集は、今日まで到底見ることの出來なかつたものでございまして——」
こんな眞面目くさつた口上を、英語ですら〳〵と續けて行つた。
聽き役のルコック探偵も、さすがに驚歎の色を隱しきれなかつた。判事は思はず卓子に半身を乘り出し、ひどく當惑して兩手で頭を押へながら、ぢつと聽き入つた。
いつも莞爾々々してゐる書記のゴッケだけが、この不思議な光景を興ありげに打ち眺めた。
やがて、判事は顏をあげて、
「鮮かなものだ。三ケ國語を使ひ分けるとは、稀なる才能だな。」
囚人は滿足さうに莞爾して腰をかゞめた。
「だが、それだけでは身分の證明にならん。お前はこの巴里に知人はないか。今話したお前の經歷を



證明してくれる者はゐないのか。」
「知人はありません。何しろ十七年も外國を歩き廻つてゐたのですから。」
「しかし裁判では、何等證明なしにお前の身分を決定するわけには行かん。他に知人がなければ、先の主人のシンブソンとやらを證人にしたらどうぢや。一體そのシンブソンといふのは、どういふ男か。」
「シンブソンは金持です。二十萬法からの財產を持つてゐて、極く正直な人です。獨逸の方は操り人形で、英吉利は珍奇な見世物で打つて廻りました。その國々の趣味に合つたものでなければ、受けないからであります。」
「その男はお前の證人として、いつでも法廷へ出られるだらうな。」
「はい、シンブソンは私のためなら、喜んで證人に立つてくれます。だが居所を突き止めるまでは、可成り日數がかゝりませう。」
「それは何故か。」
「今は多分、亞米利加行きの船の中でせう。私が一座から別れたのも、その旅のためです。私は長い航海はとても我慢が出來ませんので。」
「うむ、さうか。」
「ひよつとすると、まだ出帆しないかもわかりません。私が別れたときは、出帆準備の最中でした

が――」
「どの船で行く豫定だつたか。」
「それは聞きませんでした。」
「お前は何處で一座と別れたのか。」
「ライブチッヒで別れました。」
「何日。」
「先週の水曜でした。」
「ふむ。」判事は輕蔑したやうに肩をすぼめて、「先週の水曜に一座と別れて、巴里へは何日着いたのか。」
「日曜の午後の四時頃です。」
「さうか。ではその旅行のことを證明するがいゝ。」
囚人は眉をひそめた。何事かを想ひださうとして、頭をひねつてゐるらしかつた。初めは天井を見つめ、次に床へ眼を落し、焦々して、頭髪を搔きむしつたり。脚を叩いたりした。
「ど、どうして證明したらいゝでせう。」
「俺が一つ暗示を與へよう。お前等がライブチッヒで泊つた宿屋の者が、お前を見知つてゐる筈だ。」
「私達は宿屋に泊つたのではありません。」



「そんなら、何處で飲食をして、何處で寢たのか。」
「シンプソンの所有てゐた大きな荷馬車の中に寢泊りをしてゐました。尤もその荷馬車は亞米利加へ行くについて、他へ賣拂ひましたが、出帆までは先方へ引渡すことが出來ないといつてゐました。」
「何の港から出帆したのか。」
「それは、私にも判然わかりませんので」
ルコック探偵はそのとき、思はず揉み手をした。「此囚、たうとう尻尾を出しかけたぞ。もう一息で陥落だ。」と心に叫んだ。
「證明が出來ないとすれば、今の物語は、お前獨りで眞實と力んでゐるに過ぎないんだな。」
判事からかう突込まれると、囚人は慌てだした。
「ちよ、ちよつとお待ち下さい。」
記憶に追ひすがらうとするやうに、手を伸べながら、
「えゝと――證明になりさうなものといへば――私が巴里へ着いたとき、旅行鞄を一個持つて來ました。その中には、私の苗字の頭字を縫ひつけたシャツ類や、上衣や、ズボンや、それから私が舞臺で使つた定服などが入つてをります。」
「うむ、その旅行鞄をどうした？」
「巴里へ着くとすぐに、停車場附近の或る旅館に託けました。」

「その旅館の名は？」

「あゝ、それです、私が今思ひださうと焦つてゐるのは。實はその旅館の名を忘れましたので。けれど家はたしかに記憶てをります。近所まで私を連れて行つて下されば、きつと判ります。旅館の人達も私を記憶てゐるでせうし、第一、旅行鞄が何よりの證據なんです。」

「よろしい、多分お前の願ひは聞屆けてやれるだらう。ところで、こゝに疑問がある。いつたい、午後の四時に巴里へ着いたばかりのお前が、どうしてその日の夜半に、場末の、しかも浮浪人が集まるので有名な胡椒軒などに行つたのか。彼店は、あの邊の地理に明るい者でなければ、發見出來ないやうな場所にあるのだ。これが第一の疑問である。次に、お前は實際その旅行鞄の中に、幾通りも服を所持してゐるなら、何故そんな見すぼらしい風をしてゐるのか。」

「それは何でもない事です。」囚人は笑ひながら答へた。「三等列車で長旅をすると服が汚れて困りますから、ライブチッヒを出るときに、一番汚い服を着たのです。さて久しぶりで巴里に着きますと、あまりの嬉しさに有頂天になつてしまつて、ふところに金はあるし、折から懺悔日曜ではあり、兎も角も一晩樂しまうと思ひまして、着替のことなんか頓とわすれて、そのままふら〳〵と宿を出かけました。

私が以前に居りました時分は、バリエール・ヂタリーあたりは愉快な土地だつたので、その時分のことを思ひだして、まつすぐに彼處へ行つて、或る小料理屋に入りました。そして何か一口食べてゐ



ると、そこに飲んでゐた二人の男が、虹霓ホテルとかに舞踏會があるといふ噂をしてゐるので、私も是非連れて行つてくれと頼んで、一緒にそのホテルへ出かけまして、私が三人分の入場料を拂つて内へ入りますと、彼等は直きに私を置き去りにして、踊り手の中へ紛れこんでしまつたものですから、私はぼんやり見物してゐたが、退屈になつて來たので、ぶつ〳〵云ひながら、獨りで外へ出ました。が、路を踏み迷つて寂しいところを散々歩きまはつた末に、やつと元の路へかへりかけると、向うに燈火が一つ見えたので、それを頼りに行つて見ますと、そこがあの忌々しい居酒屋だつたのです。」

「それから何うした。」

「私は内へ入つて、店の者を呼びますと、一人の女が出て來ました。ブランデイを一杯註文すると、やはりその女が酒を持つて來ました。私は腰を下して葉卷に火をつけましたが、物凄く汚い室です。向うの卓子では、三人の男と二人の女が酒を飲みながら、何かひそ〳〵談しをやつてゐました。ところが、彼等の眼から見ると、私の顏が何となく怪しく思はれたのでせう。その中の一人の男が、つかつかと私の傍へやつて來て、

『手前は警官だな。俺達の樣子を探りに來やがつたんだらう。』

と云ひます。私は警官などではないと辯解したけれども、なか〳〵聞きません。

『何を吐かす？　手前は變裝してゐるにちげえねえ。第一、この髭は付け髭だらう。』

と私の髭を攫んでぐい〳〵引張ります。私は癪にさはつたので、いきなり其奴を打擊いて、床へ打

仆してやりました。すると他の二人が左右から飛びついて來ました。多勢に無勢です。それに偶然に私は短銃を携つてをりましたので――それからのことは、御承知の通りでございます。」

「二人の女は、その格闘の間に、何をしてゐたのか。」

「私は夢中で分りませんでしたが、ふと氣がついたときは、女達の姿は見えませんでした。」

「しかし、お前はその居酒屋へ入つたときに、女達の容子を見たであらう。いつたい何んな風の女であつたか？」

「二人とも擲弾兵のやうに脊高で、土龍のやうに色の黑い女でした。」

判事はほつと胸を撫でおろした。囚人がこんな大膽な謊をいつたことは、彼とシュバン婆との間に完全な打ち合せがある證據にちがひないのだ。

で、判事はすつかり滿足した。けれど、その心持を色にも出さなかつた。囚人に、謊が成功したと信じさせることが必要であつたからだ。

「その女達を探しだして、證人として召喚せねばならん。そしてその申し立てがお前のと符合すればお前の無罪が證明されるわけだ。」

「それは結構ですが、どうしたら居所が判りませうか。」

「刑事がお前を助ける。刑事といふ者は、お前等の無罪を證明するために働くのも、役目の一つなのだ。それでお前は、その女達を探し出すについて、何か心當りがあるなら云つてみるがいゝ。」



探偵はぢつと囚人の容子に眼をつけてゐたが、囚人は脣もとに微かな笑ひの影が動いたと思ふと、

「別段心當りはありません。」

きつぱりと答へた。

そのとき、判事の手は早くも卓子の抽斗にかゝつて、かの現場で發見された耳飾りを取りだし、突然にそれを囚人の前へ突きだして、

「お前は、此品が女の耳にかゝつてゐたのを見はしなかつたか？」

囚人は些しも狼狽した風がなく、その耳飾りを手に取つて、掌で弄くつてみたり、高く捧げてその光輝に驚いたりした。

「實に見事な寶石ですね。しかし、あのときは、こんなものに氣が付きませんでした。」

「それはダイヤだよ。」

「へえ？」

「數千法の價値がある。」

「へえ、そんなに高價な物でございますかなあ。」

その驚いた容子は、この場合不調和ではないが、少しく誇張にすぎた形がないでもなかつた。自分でいつてゐるやうに、歐羅巴の大都市を渉りあるいた旅藝人なら、ダイヤ一個が數千法と聞いて、今更驚くといふのも、少し變な話だ。

しかし判事は、それには氣づかぬ風をして、
「もう一つ訊ねることがある。お前は警官隊の前に短銃を投げだして『さア捕縛しろ。』といつたさうだが、その場合どうするつもりだつたのか。」
「實は逃げようと思つたのです。」
「何處から？」
「戸口からです。あの——」
「うむ、お前は裏口から逃げようとしたのだ——しかも初めてあの居酒屋へ行つたといふお前が、どうして彼處に裏口があることを知つてゐたのか。」
囚人はたちまち不安な眼付きになつて、殆んど度を失つた。が、それも一瞬間に過ぎなかつた。彼は直きに妙な造り笑ひをして、
「何でもないことです。私は、あの二人の女が裏口から出て行くのを見て、そこにも戸口があることに氣附いたのです。」
「誑を叫け！　お前は先刻、格鬪に夢中で、女達の行動は全然知らぬと申し立てたではないか。」
「へえ、私がそんなことを申しましたか。」
「たしかに左樣いつた。ゴッケ、筆記を讀んでくれ。」
書記は筆記を讀みあげた。やはり判事が指摘した通りの文句が記されてある。けれども囚人は、申し立てが誤解されたので、自分はさういふ積りではなかつたといつて、しきりに辯解した。
ルコックは痛快でたまらなかつた。「奴さん、參つたな。いよ〳〵矛盾撞着だ。落城が近いぞ。」と、内心悦に入つた。



## 一一、難攻不落

「その件はそれでよろしい。」判事は方面を換へて、「お前は一晩樂しむためにバリエール・ヂタリーへ出かけたといつたが、その際何のために短銃を携帶したのか。」
「それは旅行中に携てゐたものです。旅館に置いて行けばよかつたのですが、衣替へをすることさへ忘れたぐらゐですから、短銃のことなんか、頓と氣が付きませんでした。」
「彼銃は何處で買つたのか。」
「シンブソンが、記念のため私に與れたのです。」
「シンブソンは、お前のために都合のい、男だな。ところで、お前の短銃を檢べると、彈丸は二個しか發射されてゐないのに、殺された者は三人だ。それは何うしたのか。」
「それはかういふわけです。初め多勢に無勢と見て短銃を出したが、三人のうち二人を射止めた後は一騎打ちですから、私は殘つた奴——あの兵隊服を着た男——を捉まへて投げつけると、彼は卓子の角に倒れたつきり、起きあがりませんでした。」

判事は、抽斗から、ルコックの引いた見取圖を取りだして、
「サテこの圖面で、お前等の取つた位置を詳しく説明しろ。」
囚人メイは、その圖面を見て一寸驚いた風だつたが、しかし早速説明をはじめた。
「私はこのCの戸口から入つて、左手のHの卓子に就きました。私の前に來てゐた五人の客は、焜爐Fと、窓Bの中間の卓子を圍んでをりました。」
「うむ、それは囑託醫の報告と一致してゐる。囑託醫が死者の傷から推定したところによれば、一彈は約一ヤードの距離から發射され、他の一彈は約二ヤードの距離から發射されたことになつてゐる。」
「そこまでお判りになつたとは、偉いお醫者です。」
囚人は勝ち誇つたやうにいつた。
ルコックはルコックで、判事の審問の順序が如何にも整然として、一絲亂れないのに敬服した。自分が判事だつたら、やはりこの通りやつたであらう。この人がデスコルバル氏と交代したのは寧ろ幸ひであつた、と思つた。
「それは、それでいゝが。」判事はつゞけた。「こゝにゐる刑事がお前を捕縛したとき、お前は何か妙なことを云つたな。」
「どういふことを申しましたか。」



「お前は、『萬事休矣、やつて來たのは普魯西兵だ！』といつたが、あれはどういふ意味か。」
囚人はさつと顏を赭めた。彼は何か別の問を豫期して、その方の答へを準備してゐたらしい。それで面喰つたのであらう。
「變ですね、私がそんなことをいつたとは。」
「お前のその言葉を聞いたのは、一人や二人ぢやない。數名の警官がたしかに聞いたのだ。」
すると囚人は何かうまい辯解をたぐり出さうとするらしく、暫く考へてから、
「あゝ、解りました。格別不思議なことでもありません。といふのは、我々の一座に、元那翁の近衛兵であつた老人が一人をりまして、何か失敗したときは、その文句を口癖のやうにいふのでした。彼はウオタールーの戰爭のあとで、我々の一座に入つて來たのです。私はその文句を記憶えてゐて、何といふわけもなしに、ふと口へ出たのでせう。」
暇はかゝつたけれど、そんなに拙い辯解ではなかつた。判事はすつかり滿足したやうであつた。
「それもよろしい。が、警官隊が踏込んだときは、お前は既に喧嘩の相手を倒してしまつて、危險から免れてゐたのであらう。何うぢや。さうとか、さうでないとか、簡單に答へなさい。」
「さうです。」
「しからば、何故すぐに裏口から逃げないで、警官を喰ひ止めようとしたり、短銃を突きつけたりしたのか。」

彼は眼を伏せてぢつと考へこんだ。判事は暫くその答へを待たねばならなかつた。
「あゝ私は馬鹿でした。やつて來たのは警官か、それとも私に殺された奴等の仲間か、見据ゑがつかなかつたのです。」
「それが警官であらうと、敵の仲間であらうと、あの場合、なにを措いても逃げ出すのが當然ぢやないか。」
殺人者は默りこんだ。
「何うぢや。」と判事は飽くまで追窮した。「お前はその二人の女を落ち延びさせるために、わざと警官隊に抵抗したんだらう。」
「飛んでもないことです。何で私が、知りもせぬ女のために、一身の安全を犧牲にしませう。」
「いや、檢事局では、お前がその二人の女を知つてゐるものと認めるのだ。」
「私が知つてゐるといふ證據があるなら見せて下さい。」
と囚人はせゝら笑つた。けれど、
「それは、やがて俺が證明する！」
判事がきつぱり云ひきつたとき、囚人のその笑ひは脣で凝結したやうであつた。
「お前は、あの居酒屋で會つた者は、一面識もない者ばかりだといつたな。」
「それは私が誓つて申します。」



「だが、お前はラシヌールといふ者を知つてゐるだらう。その者は、この事件に重大な關係をもつてゐるのだ。」
「あの兵士が死ぬる間際に、ラシヌールといふ名前を口走つたやうですが、そのとき私は初めてラシヌールといふ名を耳にしたので、元役者であつたとかいふことも、そのときに聞きました。」と、深い溜息をついて、「あの兵士は可憫さうに、私に投げ倒されて死んだが、最期に、私の利益になる證言を殘して行つてくれたのでした。」
「して見るとお前は、あの兵士の言葉を眞實と認めるんだな。」
殺人者は答へを躊躇した。さア罠にかゝつた、物云ひを注意しなければならぬ、と考へてゐる容子だつたが、
「認めます。勿論、認めます。」
と彼はたうとう答へた。
「よろしい。あの兵士は、お前も聞いたやうに、ラシヌールといふ者を非常に怨んで、必ず恨みを晴らすといつてゐた。ラシヌールは金を與れる約束で、或る者に對する企劃に彼を誘ひこんだのである。そして、その企劃は誰に對してかといふと、明らかにお前に對してだ。しかるにお前は、その日の夕方巴里に着いて、偶然胡椒軒に行つたと主張してゐる。この點はようく考へて、訂正したら何うぢや。」

すると、囚人は輕蔑したやうに、肩をすぼめて、
「それは飛んでもない誤解です。あの者共は、誰に對してか知りませんが、兎にかく惡企みをしてゐました。そこへ私が行つたので、邪魔になるものですから、理由もなく喧嘩を吹きかけたらしいのです。」
判事の突込み方も巧かつたが、この云ひ遁れもなか〳〵凡でない。
例の莞爾々々書記は、思はず感服して齒をむきだした。いつたいこの書記は、今度の囚人がよほど氣に入つたものと見えて、兎角その肩をもちたがる風が見えた——尤も極く愼しやかな手段に於てではあつたけれど。
「次に、お前は捕縛されたとき、何故あらゆる訊問に對して答へを拒んだのか。」
判事はぐん〳〵審問を進めようとすると、
「今日の御審べはもう澤山でせう。これだけでも、罪のない者を未決監に留めおく口實が十分お出來になつたでせう。」
「默れ。神妙にしないと利益にならんぞ。警察官の報告によれば、お前は警視廳の手續きや、監獄規則に精通してゐるといふではないか。」
「實は私は數回拘引されまして、入獄した經驗もあります。——尤もそれは、私が身分證明書や、正規の旅行券を持たないためでありました。併しその過ぎ去つたことで、今貴方からお叱りを受ける理



由はありません。」
いかにも無愛想な、不平滿々たる調子で答へた。今までの快活の假面を全く捨てたやうであつた。
しかし、彼はまだ〳〵難關を通過したのではない。鬪ひはこれからなのだ。
やがて判事は、一つの小さな木綿袋を卓子の上に置いた。
「お前はこの袋を知つてるだらう？」
「はいそれは典獄が金庫に藏つておいたものです。」
判事は袋から、その中に入つてゐた土を、一枚の紙の上にあけた。
「これはお前の足から剝ぎおとした泥だ。探偵は、お前が一夜を送つたバリエール警察の留置場の土間の土を採つて、これと較べてみたところが、しつくり一致してゐることを發見したのだ。」
囚人はぴつくりしたやうに、口を開けて聽いてゐた。
「お前はあの警察の留置場で、故意に自分の足に泥を塗つたんだな。一體、何の目的でそんなことをやつたのか。」
「それは、私が——」
「待て。お前が云はんでも、大てい判つてをる。お前は自分を浮浪人と見せるために、故ら皮膚を汚したのだ。お前は容貌が優雅で、下層社會の者として受取られないことを恐れたのだ。しかし生地は爭はれぬものぢや。幾ら汚い靴を穿いてゐても、それを脫いで、足の泥を洗ひおとすと、皮膚は滑ら

かで、お前の手と同様に、よく手入れが行きとゞいて、爪も常に磨かれてゐたものに違ひないことが判つたのだ。お前がどんな方法で足を汚したかといふと、あの留置場に置いてあつた水差しの水を土間へこぼして、柔い泥をこしらへて、それを足に塗りつけたに相違あるまい。」

この詰問の間、囚人の顏はいろ〳〵に變つた。或は不安さうになつたり、仰山に驚いたり、皮肉な表情をうかべたりした。が、終ひに例の蟠かまりのない快活さに立ちかへつて、

「へえ、貴方が半日以上も驅けずり廻つて、お檢べになつた結果は、そんなものですかね。」とルコックの方へ向き直つて、「刑事殿、精密といふことも結構ですが、これは又あまりに馬鹿げてゐますね。事實はかうなんです。私があの警察へ拘引されたのは、汽車に乘つてから恰度四十八時間目でした。そのうち三十六時間といふものは列車の中で暮したので、その間に一度も靴を脱がなかつたものですから、足は赤くふくれて、火のやうに熱つてゐました。そこで私は跣足になつて、足に水をぶつ注けました。それだけです。足の皮膚が柔かくて、白いのは、そりや私の心懸がよいからで、實際私は平生、上靴のほか足につけたことがないのです。この長靴は、ライプチッヒを發つときに、シンプソンのお古を貰つて穿いて來たのです。」

ルコックはそれを聞くと自暴に自分の胸を叩いた。

「俺は何て馬鹿だらう。何て間抜けだらう。」と彼は心の中で地團駄をふんだ。「警視廳で、俺が彼の足から泥を剝落したときに、彼はすでに俺の目的を看破したのだ。怜悧な彼にそんなことの解らぬ筈



がない。そこですつかり考へておいて、今のやうな巧妙な云ひ拔けをしたんだ。實にうまいものだ。公判になると、陪審官は必ず彼の言葉を信用するにちがひない。」

判事も心中に同じやうなことを考へた。が、この囚人の怜悧さについては、ルコックほど驚きもしなかつた。

「お前は飽くまでも、そんな風に頑張るつもりか。」

「はい、私は決して虛僞の申し立てはいたしませぬ。たつた一つでも謊がありましたなら、食べる麵麭が咽喉に塞へて死んでも構ひませぬ。」

「うむ、よく云つた。しからば待て。」

判事は抽斗から、ルコックが造つて提出した靴跡の型を取りだし、それを囚人に示せて、

「お前は居酒屋にゐた二人の女を、擲彈兵のやうに脊が高いと云つたが、この靴跡の型を見ると、非常に小さいではないか。お前はまた彼女等を土龍のやうに色が黑いなどと形容したが、或る證人の供述によれば、一人の女は髮は黃金色で、纖細で、音聲なども極めて優美であつたといつてゐるぞ。」

と、判事はぢつと殺人者の眼中を覗きながら、

「その證人といふのは、辻馬車の馭者なんだが、彼はあの晩シバルレ街で、胡椒軒から逃げて來た二人の女に呼び止められて、彼女等を市中へ送つて行つたのだ。」

この一言は、囚人にとつて正に靑天の霹靂であつた。彼は颯と顏色を變へて、もう少しで倒れさう

になつたが、壁に手を支へて辛くも椅子にふん張つた。
「はゝあ、驚いたゞらう。」判事は辛辣な皮肉を一つ浴せておいて、「さて、あの晩、お前が胡椒軒に入つてゐる間に、屋外でお前を待つてゐた男があつたな。その男はお前等が引き立てられた後で、大膽にも胡椒軒へ入りこんで、何か重要な品物を取りかへさうとしたのだ。多分それは手紙だつたらう。しかもその手紙が、シュパン婆のエプロンの衣嚢に入つてゐることを、彼は知つてゐた。それから、その男は醉漢の眞似をして、巧みに警官を欺いて、お前等が拘留されてゐたバリエール警察の留置場へ入りこんだが、お前はそのときに、あらゆる辯解の口實を、その男と相談したんだな。なほ彼はシュパン婆とも打合せをして、婆の申し立てに智慧をつけたものである。」
囚人はそのとき、實に人間以上の努力をもつて、
「それは、すべて、警官の揑造であります。」
と聲を張りあげた。が、內心は遉がにへこたれたらしく、それつきり何も云はない。
「こら、お前は證據そのものをも、打消さうとするのか。」
さういはれると、囚人はまた屹然となつた。我れながら腑甲斐ないとでも思つたのか、今度は打つて變つて、惡魔のやうな大膽さに眼を光らせた。
「何でそれが證據になるものですか。警官が揑造したのです。巧いつくり話です。貴方がたは今、辻馬車の馭者が、脊の低い、黃金髮の、二人の美人に雇はれたと仰しやいましたが、その女達があの忌



まはしい居酒屋から逃げだした者であるといふことが、何うして證明出來ませう。」
「こゝにゐる刑事が、雪の上の靴跡で確かめたのだ。」
「夜間、しかも溝でところ〴〵杜絕れてゐる空地に、それから長い街に——左樣です、あの晩は小雨が降りだして、雪が融けはじめた時ですから——種々な靴跡がついてゐたでせう。しかし そんなものが何で當てになるものですか。」
とルコックの方へ拳を突きつけて、
「貴方は御自分だけで、自惚れてゐるんですね。進級がしたさに夢中なんでせう。でなければ、こんな曖昧な證據で、苟にも、人間一人を死罪にするやうな報告が出來るものでない。」
傍で聞けば如何にも有理らしい。それだけに、ルコックはひどく癪にさはつた。
「途切れた靴跡なら、重要な證據とは云はん。」と彼は呶鳴りつけた。「しかし、あの靴跡は連續したものであつて——」
「君は默つてゐたまへ。」判事は制して、更に囚人の方を向いて、「裁判官は、警官の蒐集した證據を十分に考量して、有力なりと認めればこそ採用したのぢや。」
「けれど、それでは私が困ります。兎に角、その馭者を法廷に呼び出して下さい。」
と囚人は飽くまでも頑張つた。
「いや、彼はお前の前へ出ても、やはり同じ證言を繰りかへすだらう。」

「しかし私は、どうして女の顔の見分けがついたかを訊きたいのです、あんな暗い晩に――」
といひかけたが、急に何か思ひ出したやうに語氣を變へて、
「あゝ私は、そんな女共のことを彼れ是れいふ必要はないのでした。それが何ういふ素性の女かといふことは、迅くに御承知でせう。そして馭者がその家まで送つて行つたとすれば、居所もお判りになつた筈ですから。」
明らかに皮肉だ。彼が今判事を嘲弄つたとすれば、確かにその點――女共の行く方――について危險がないといふことを知つてゐるからであるらしい。
「どうです、結局、證據となるべきものは何もないぢやありませんか。あの兵士が死ぬる前にいつた、ラシヌールとかいふ名前や、融けかゝつた雪の上の靴跡や、馭者の申し立てや、醉拂がどうしたとかいふ漠然たる疑ひや、そんなものは證據になりますまい。」
反噬する口吻でありながら、何だか焦りだした風が隱しきれなかつた。
「もう澤山だ。お前は偉さうなことを云ひだしたが、容子を見ると、内心はせか〳〵してゐるやうだな。何故そんなに慌てるんだ？」
「その理由は。」と囚人は吐き出すやうにいつた。「貴官があまり殘酷に私を苛めるからです。貴官は罪もない私を死刑にしようと骨を折つてをられます。私はまるで斷首臺へ立たされたやうに、今にも斧が落ちて來はせぬかと、一語一句をはら〳〵しながら述べなければなりません。私はどんなに憎い



仇敵でも、かうした責苦に遭はせたくはありません。」
彼は實際苦しさうであつた。
額に油汗が滲みだして、その垂滴がぽたり〳〵と髭に滴りおちた。
「俺は故意にお前を苛めるのではない。いや、裁判官は特に囚人の敵とか味方とかいふべきものでない。俺は眞理と法の味方ぢや。それゆゑ、俺は特に人を無罪にするとか、有罪にしようとかいふ精心からではなく、只眞實に到達することを冀つてゐるばかりだ。そこで先づ、お前の素性を知らねばならぬのだ。」
「それを申し上げて生命が助かることなら、何遍でも申します――私はメイといふ旅藝人で――」
「さうぢやあるまい。」
「そんなら、私は誰でせう。假裝した名士ででもありませうか。私も實は左樣であつて欲しいのです。眞實名士なら、直ぐにも立派な戸籍證明書を出して、釋放されることが出來ます。何故つて申しますと、判事殿、私はお察しのとほり、まつたく罪のない者なのです。」
そのとき判事は、ふと卓子を離れて、煖爐のそばへ行つて、囚人から僅か二呎の距離に腰をかけた。
「さう强情を張るものではないよ。」
急に態度から聲まで一變して、まるで自分と同じ階級の人に對するやうな親しみをもつて、判事は話しかけた。

「ねえ君、俺に明察があつたことを誇らせてはくれまいか。俺の眼は決して曇つてゐないつもりだ。君がかうした困難な役廻りを背負つて、かくまで完全に演つてのけるところを見ると、どうしたつて身分ある紳士としか思へないではないか。しかも君は、驚くべき才能を恵まれてゐる人だ。」

判事がかう態度を變へるにつれて、囚人も著るしく溫順くなつて來た。ルコックはその細かい變化にぢつと眼をつけてゐた。

囚人は強ひて笑はうとした。が、その笑ひは半分咽喉に塞へて、妙に歔欷のやうなものになつてしまつた。眼には涙が光つてゐた。

「俺はもう君を追窮しまい。」と判事がつゞけた。「緻密な推論といふ點では、俺はとても君の敵でない。しかし公判の時までには、君を粉碎すべき有力な證據が續々手に入る筈だから、そんなことも考へて貰ひたい。」

それから暫く沈默してゐたが、やがて一語々々に力をこめて、

「いや公判の時は、俺だつて今日のやうな調子で責めようとは思つてゐない。法にも涙がある。或る種の罪は、寛容しなければならぬ場合もある。君子でさへも、感情に驅られると罪の淵に陷ちやすいものだ。法はよくその深淵の深さを知つてゐるのだよ。そこで今日は、俺の職務に牴觸しない限り、どんな好意でも君に捧げたいと思ふから、どうか遠慮なくいつてくれたまへ。何なら刑事を遠慮させようか。それとも書記がゐて惡ければ、他室へ使ひに出さうか？」



殺人者は、人の心の奥底までも見透すやうな鋭い視線を判事の顏に投げた。物をいひたげに、脣がかすかに動いた。けれど腕ぐみをしてぢつと默りこんでしまつた。

それから暫く經つて、彼は遂にこんなことをいつた。

「さう云つて下さるのは有難いんですが、私は矢張り、やくざな、貧乏人に過ぎないのです。前にも申し上げたやうに、メイといふ旅藝人で、一座においては道化役を勤めてゐた者です。」

「それならば致し方がない。此方も君の決心に基いて事を進めるまでだ。ゴッケ、今の供述筆記を讀み上げてくれたまへ。」

ゴッケ書記は讀みあげた。囚人は默々として聽き終つたが、この調書には、自分に對して隱れたる罠が置かれてあるといふ因緣をつけて、それに署名することを拒んだ。

やがて彼は、護送して來た憲兵の手によつて、再び監房へ送りかへされた。

## 一二、上流か下層か

セミュレ判事は、囚人を送りだすと、何だか精根が疲れ果てゝ、がつくりと肘掛け椅子に身を埋めた。長い審問をつゞけて效果のなかつたときは、いつもこんな風に疲れを覺えるのである。

熱した額を冷水で冷さうとする氣力さへもなく、眼球ばかりぎらつかせて、數時間ぢつと坐りこんで、氣分の恢復を待つた。

卓子に向つて忙しくペンを走らせてゐた莞爾々々書記は、判事の靜養がはじまつたのを見ると、締たとばかりに、ペンを捨てゝ、樂々と手足をのばした。

ルコックは、しきりに囚人の巧妙な申し立てを感歎した。

「何といふ冷靜、何といふ勇氣でせう。一切を否定してゆくあの辯解ぶりは、實に鮮やかなもので、まつたく傑作です。完全無缺といつていゝでせう。あんな風にいはれると、理性が許さぬと知りながらも、信じたくなるではありませんか。」

「ふむ、君のその觀察から行けば、結局どういふことになるんだね？」

と判事は、椅子に凭れたまゝで聞ひかけた。

「まづ貴方の御說を伺ひたいものです。」

「俺の考へをいふと——あの男は實際、メイといふ苗字の旅藝人か、でなければ、その反對に、上流社會に屬してゐる堂々たる紳士だらう。その何方かといふことは、今のところ決定しかねるが、何にしても中流社會の者でないことだけは、斷定出來ると思ふ。あゝした凄い根氣や、他人を喰つた態度や、それにあのやうな糞度胸と決斷力とは、最下層か最上流の人間に特有のものだ。あれが中流社會の者なら、とつくの昔に白狀したゞらう。」

「なるほど御尤もです。しかし彼がメイといふ者で、曲藝團の道化役だなんていふのは、眞赤な謊でせう。」



「俺も、それは謊だと思ふ。ねえルコック君、この謊を發見した名譽は君のものだよ。豫め君から注意されなかつたなら、俺はあの巧妙な役者に一杯喰はされたゞらう。」

若い探偵はお辭儀をした。恥羞んで少し顏を赭らめたが、眼中には得意の色が輝いてゐた。

「判事殿、私に一つ考へが浮びました。」

何だね？」

シュバン婆が倅のことをいつてゐましたね。確かポリットとかいふ名前だつたとおもひますが。」

「うむ。」

「その倅を審問たらどうでせうか、彼は胡椒軒へ來る客をよく知つてゐる筈です。彼に訊けば、ギュスターブや、ラシヌールといふ男や、あの加害者の素性も判りませう。彼は今未決監にゐるので、母親が逮捕られたことは知つたとしても、我々が當惑してゐる問題にまでは氣が付きますまい。」

「それは好い考へだ！」と判事は叫んだ。「俺はどうしてそこに氣づかなかつたらう。明朝早速その男を審問よう。彼は入獄中だから、今日審べた者達とちがつて、今度の事件について詳しいことも知らんし、他から智慧もつけられてもゐない筈だ。それに、彼の女房も審べる必要があるね。」

それから書記に向つて、

「ゴッケ、大急ぎで、監獄にゐるポリット・シュバンと、その妻を召喚する準備をしておいてくれ。ポリットの方は、典獄に命令書をやればいゝのだ。」

何時の間にか日が暮れてゐた。書類を認めるのには、もう暗すぎるので、書記は呼鈴を鳴らして、燈火を命じた。

小使がランプを置いて室を出て行くと、入りちがひに、帽子を手に持つたまゝ、つか〳〵と入つて來たのは、典獄であつた。

忠實な典獄は、かの不思議な囚人のことで頭を惱ましてゐたが、それについて判事の意見を求めにやつて來たのである。

「あのメイといふ囚人は、やはり獨房に入れておかにやなりませんか。」

「さうです。」

「彼奴は實に困つた奴です。緊衣を被せておくのも可憫さうだが、しかし亂暴を働かれてはなほ困りますので。」

「監房の中では、自由にしてやつて下さい。もう緊衣の必要はあるまい。そして看守達にも、あの男に取扱ひを親切にするやうにいつて下さい。しかし行動は絶えず監視するやうに。」

典獄は腰をかゞめて、それから、こんなことを問ひかけた。

「彼の素性はもう判明したでせうね？」

「遺憾ながら、まだ判りません。」

すると、典獄は左もありなんといひたげな顏をして、首を振りながら、



「私の考へでは、彼奴は容易ならぬ惡漢です。無論前科者で、しかも素性を知られては困る事情があるらしいです。多分終身懲役でカイエーヌへ流刑されて、脫獄した奴ではないかと思ひますがね。」

「それは君の思ひ違ひでせう。」

「いや、私が間違つてゐるなら、不思議ですよ。この點について私はゼブロール君の意見に全然贊成します。彼は古參警部で經驗にも富んでゐるし、頭もしつかりしてゐますからね。新米の探偵なんか、功名心のために、自分勝手な幻影を造りあげて、そればつかりを追蒐けるから失敗するのだと、彼はいつてゐますが、まつたくその通りですよ。」

ルコックはそれを聞くとカン〳〵に憤怒つて、眞赤な顏をして、何か惡口を浴びせようとしたが、判事は手眞似で、默つてゐろと相圖をしながら、典獄の方へ笑顏を向けて、

「俺はこの事件を研究すればするほど、君等の謂はゆる功名心に驅られてゐる刑事の見方が、正しいと信ずる外ありません。しかし俺にも誤りがないとは云へないから、やはり君等の御意見や、御援助を得ないと困りますがね。」

「えゝ、私はきつと自分の考へを證據立てゝお目にかけます。二十四時間以内に、警官の手で、或は他の囚人によつて、間違なく、彼奴の正體が發見されませう。」

云ひすてゝ、典獄は室を出て行つた。と、間もなく、ルコック探偵は椅子から跳びあがるやうにして、

「判事殿、ゼブロール警部は、盛んに私の悪口をいひ振らしてゐるらしいです。彼は私を妬んでゐるのです。」

「そんなことは何うだつていゝぢやないか。君が成功すれば、悪口をいつた者に對して復讐したことになるんだ。若しも失敗したときは、俺も途伴れだから我慢するさ。」

時刻も遲いので、セミュレ判事は、今日の仕事はそれまでとして、ルコックから提出された材料は、なほ研究をすゝめる必要上、一先づ彼の手にかへした。耳環（それの持主が探し出されねばならぬ。）や、死んだ兵士の衣嚢から發見した、ラシヌールといふ署名のある手紙も、探偵の手にかへした。

なほ、判事はルコックに二三の任務を授けて、明朝は早く出勤するやうに命じたあとで、

「さあ出かけ給へ。そして成功を禱るよ。」

と激勵した。

ルコック探偵は、陰氣くさい裁判所の門を出ると、まつすぐに屍體置場へ行つた。

街では多くの馬車が織るやうに馳せちがひ、この探偵の苦心を知らない人々は、まるで別世界の人間のやうに愉快な歩調で歩いてゐた。

もう夜なので、屍體置場の戸口は締めきつてあつたが、番人に訊くと、屍體の見知り人もまだ出ないし、今朝こゝを出かけたアブサント爺も、あれつきり歸つて來ないといふことであつた。



「形勢が悪いぞ。」ルコックは溜息をついて、「こんな時は、ゆつくり夕食でもしたゝめて、元氣を出さう。そして、緣起を直させねばならん。」

近所の料理店へ飛びこんで、食事を取り、上等の葡萄酒を二三杯傾けると、やゝ元氣が恢復して來た。それから葉卷を喞へてぶらりとそこを出たときは、すつかり好い氣持になつてゐた。

彼は折よく通りかゝつた一臺の馬車を呼び止め、それに乘つて、北の停車場へ向つた。

## 一三、メイの宿

停車場前で馬車を降りたのは、恰度八時。

髮をすつかり後へ撫でつけて、外套の襟を立てたが、變裝術のうまい彼は、ちよつとかうやつただけで、もう刑事らしい風は拔けてしまつた。口の中で英語のアクセントを眞似てみると、天晴れ英吉利人らしく思はれる。

それから、停車場附近の旅館を片つ端から探しはじめた。外國から來た勞働者風の男が泊りはしなかつたかと訊ねるのだ。

ところが、何處の旅館でも、極まつて、

「私共には、そんなお客樣はいらつしやいません。近頃そんな人を見かけたこともありません。」

といふ答へだ。それでも根氣よく探し〳〵して、最後にサン・カンタン街の、マリアンブール旅館

といふのに行つてみた。

比較的小さな旅館だが、整然として何となく體裁のよさゝうな家であつた。

撥條仕掛けの呼鈴を取りつけた硝子戸を押して、燈火の煌々とついてゐる帳場の方へつか〳〵と入つて行くと、女が一人椅子の上に立ち上つて、恰度眼の高さに吊されてゐる、黑絹を被せた大きな鳥籠に向つて、獨逸語で頻りに何かシヤベつてゐた。

女はまつたくその鳥籠に氣を奪られてゐる樣子なので、ルコックは、彼女の注意を惹くために、何か物音を立てねばならなかつた。

「今晩は。大層御熱心ですね。鸚鵡に言葉をお仕込みですか。」

「鸚鵡ぢやありません。椋鳥です。」

女はさう答へたが、まだ椅子に立つたまゝで、

「わたしは此鳥に獨逸語を仕込んでゐます、『朝御飯はいかゞ？』つてね。」

「へえ、椋鳥でも物がいへますかね。」

「いへますとも。人間と同じですよ。」

女はやつと椅子を降りた。

そのとき、椋鳥は、今の言葉が解つたかのやうに、極めて明瞭に、

「カミイル！　カミイルは何處にゐるの？」



といつた。しかしルコックはその際、椋鳥などを鑑賞してゐる餘裕はなかつた。

「實は此館の御主人に御訊きしたいことがありましてね。」

早速用談を切りだすと、

「わたしが女將でございますが。」

「あゝさうでしたか。そんなら御訊ねしますが、ライプチッヒから或る職人が、私を訪ねてこの巴里へ着いた筈だが、まだ私の許へやつて來ません。若しや此館に泊つてゐはしないでせうか。名はメイつていふんです。」

「メイ？　――メイつていふ方ですか？」

女將はしきりに首を傾げた。

「えゝ、その男は日曜の午後に着いた筈ですがね。」

それを聞くと、女將はやつと合點がいつたらしく、

「待つてください。そのかたは、中年で、中脊で、顏色が淺黑く――髭だらけで眼のぎよろつとした――」

ルコックは嬉しさに身顫ひがした。女將のいふことが、メイの人相としつくり符合してゐるのだ。

「それです。そ、その男です。」

「あゝ、その方なら、懺悔日曜の午後にお出でになつて、何でも安いところがいゝといつて、六階の

室を一つお取りになつて、生憎ボーイが帳場にゐなかつたものですから、御自分でトランクを室へ運んで行きました。何か食事を差上げようとすると、急ぎの用があるから今は何も要らないとおつしやつて、室代の手附けに十法置いて、すぐ御出かけになりました。」

「何處へ行つたんでせう。」

「さあ、何處へいらしたんでせうかね。何しろ、それつきり御歸りがないものですから、わたしも實は氣がかりになつてゐるところでございます。巴里は危い土地で、外國から來た方などは、迂濶してゐると酷い目に遭ひますからね。尤も、佛蘭西語はかなりお達者のやうでしたけれど、そんなことは餘り助けにもなりません。ですから、わたしは昨日、兎も角も警察へお屆けするやうに、うちの者にさういつておきました。」

「警察へ？　――昨日？」

「えゝ、さう云ひ附けてはおきましたけれど、すぐに屆けましたか、どうですか。今ボーイを呼んで訊いてみませう。」

ルコックは、頭頂から冷水をぶつかけられたやうに、慄然とした。さては、あの男の申し立てが眞實であつたか。ゼプロール警部や典獄の觀察が正確だつたのか。さうとすれば、セミュレ判事と自分の推測は、まつたく間違つてゐたことになる。

そこへ呼ばれて來たのは、ボーイといつても、可成り齡の行つた、中年の男であつた。



「フリッズや、お前、昨日わたしが云ひつけたことを警察へお屆けしてくれただらうね。」

「えゝ、たしかに屆けました。」

「署長さんは何といつて？」

「署長さんは御不在でしたから、次席のカシミールさんにさういつたら、なアに、それは心配せんでもいゝ、そのうちに歸つて來るだらうつていつてゐました。」

「ところが、まだ御歸りがないんだよ。」

ボーイはつまらなさうに肩をゆすぶつた。

「そんなこと何うだつて、俺が知るものか。」と、その肩がいつてゐた。

「貴方、お聞きの通りでございます。」

と、女將はルコックに向つて、用が濟んだら歸つてくれと暗示するやうな口振りでいつた。

だが、ルコックはなか〳〵歸らうとしない。

「困つた、實に困つた。その人が私の探してゐる男かどうかも、判然しないのでね。」

「でも、わたしだつて、この上どうといつて、詳しく申し上げることもないんですからね。」

と女將も當惑してゐる。

ルコックは眉をよせ脣を嚙んで、ぢつと考へこんだ。何とかして、この祕密を解決する手段もがなと焦るのである。

「しかし女將、その男は本名をいつたでせう。それを思ひ出して下さい。それとも矢張り、メイつていひましたか。」
「わたしは忙しいんですから、お名前なんか一々記憶えきれませんわ。」
「宿帳を記けておくと便利ですね。英吉利の旅館では、左樣してゐますよ。」
ルコックは、一生懸命に英語のアクセントを利かせて、佛蘭西語を拙く使つてゐる。
「宿帳は記けてありますから、お望みならお目にかけませう……あら、事務卓の鍵を何處へ置いたか知ら。」
彼女は椋鳥にくらべて、そんなに怜悧だとも思へなかつた。帳場中を引くりかへすやうにして、鍵を探し廻つた。
その間に、探偵は彼女を觀察した。年齢は四十前後だが、肉附のいゝ體は健康そのものゝ如く、濃い髪は房々して、眼許が涼しく、なか〳〵の美人だ。それに銀鈴を鳴らすやうな好い聲で、身のこなしが輕快で、何一つ屈託がなさゝうに見える。
「あゝ、こんな處にあつたよ、鍵が。」
その鍵ですぐに事務卓を開けて、宿帳を取り出し、しばらく頁を繰つてゐたが、
「あゝ、これです。十二月二十日、日曜。」と、宿帳をルコックの前に突きつけて、「さあ、この七行目を御覽なさい。姓はメイ、名は無し、外國の旅藝人、ライプチッヒより到着、旅券無し——とありませう。」
ルコックは、目が眩むやうな氣持で、その頁を見つめた。
「あゝ、やつと思ひ出しました。やつぱりメイといふ苗字でしたね。」と女將がいつた。「外國の藝人なんて、變ですわね——忘れるのも道理、これはわたしが書いたのではないんですの。」
「誰が書いたのですか。」
「あの方が御自分で書いたのです。金貨を出して、兩替してくれと仰しやるから、わたしが細いお金に替へてゐる間に、書いたのです。ですからそこんところだけ筆蹟がちがひませう。そら、上下の行と較べて御覽なさい。」
さう云はれてみると、成るほど、そこのところだけ、筆蹟がちがつてゐる。ルコックはぎよつとした。
「これは、あの男の筆蹟にちがひないんですか。あなたは保證しますか。」
鋭く突込んだが、英語のアクセントはお留守になつて、いつの間にか生粋の佛蘭西語になつてゐた。女將は早くもそれに氣づいたやうであつた。
「わたしは嘘は申しませんよ。けれど、もう澤山でせう。」
少し突慳貪になつて來た。探偵は失敗つた、冷靜が足りなかつたんだ——と悔んだが、もう追付かない。そこで今度は、全然英語口調をかなぐり捨て、

「御免なさい。だがもう一つお訊きするが、あの男の旅行鞄は、まだ此館にありませう？」
「えゝ。」
「それを私に見せて下さい。」
「お客様の旅行鞄をね？　御冗談でせう。」女將はぷり〳〵憤りだして、「貴方はいつたい何者ですか？」
探偵はこの上何をいつたつて、聽かれさうもないと思つたので、
「僕が何者であるかは、半時間と經たねうちに分るだらう。」
云ひすてゝ、ふいと其館を飛びだした。
彼はロボオ廣小路まで駈けて行つて、辻馬車に乘つて、一番近い警察署へ飛びこむと、幸ひ署長がまだ居殘つてゐたので、一部始終を話して、
「さういふわけですから、どうか御力添を願ひます。」
署長は探偵の話を聽き終ると、うなづいて、
「何でも、彼館から、客が行方不明になつたといふ屆出でがあつたさうだ。私は今朝になつてその報告を聞いたんだが。」
「へえ、やつぱり屆けて來ましたか。」
「昨日のうちに屆けがあつたさうだ。さて、君のために何うすればいゝんだね？」



「私と一緒に彼館へ行つて、立會の上で、旅行鞄の中味を檢べて下さい。同時に彼鞄の錠を開けるために、錠前屋の方へ手配りを願ひます。私はこの通り、檢事から搜査許可證を貰つて來たのです。一刻もぐづ〳〵してはゐられませんから、私の馬車で一緒にいらして下さい。」
「よろしい。すぐに出かけよう。」
馬車が驅け出すと、探偵は早速問ひはじめた。
「貴方はあのマリアンブール旅館の女將を御存知ですか。」
「よく知つてゐるよ。私は六年前に此署へ赴任した頃は、まだ獨身だつたので、あの旅館で食事を取つてゐた。私の次席のカシミールは、今でも彼館に泊つてゐる。」
「彼女はどういふ女ですか。」
「ミルナー夫人といつて、なか〳〵確かりした寡婦さんだ。近所の評判もよく、業務も繁昌してゐる。あの通りの美人なので、結婚したがつてゐる男も澤山あるさうだが、彼女はやはり獨身がいゝと見えて寡婦を通してゐる。」
「では、金を貰つて、犯罪を幇助するやうな女ぢやないんですね？」
「冗談いつちや可かんよ。彼女は金のために惡事を働く女ではない。根が正直で、財產も可成り持つてゐて、何も不足はないんだ。第一、その男が行方不明だつていふことを、昨日のうちに屆け出でたくらゐだから、怪しい點はないさ。」

ルコックは、もう何も云はなかつた。

馬車はやがて旅館の前に停つた。女將は署長が同行したのを見て、ルコックの役目を早くも覺つたらしく、

「あら、刑事さんでしたの。どうも相濟みません。何か犯罪でもあつたんですか。そんなことに係り合ひになりますと、ほんたうに困りますわ。商賣にケチがつきますからねえ。」

と、落膽した風であつた。

署長と探偵は、錠前屋を待つてゐる間、彼女を慰めるのに可成り骨が折れた。

やがて錠前屋がやつて來ると、一同は、六階のその男の室へ昇つて行つたが、ルコックはいきなり旅行鞄に飛びついた。それは疑ひもなく、ライプチッヒから巴里まで旅をして來た旅行鞄だつた。その證據には種々な鐵道會社のレッテルが、べた〳〵貼りつけてあつた。

錠を開けて中味を檢べると、瀟洒した服が一重ねと、舞臺用の定服や、シャッ類など、すべて、かの囚人の申し立てと寸分違はぬ品物ばかりだ。

ルコックはそれを見ると、化石でもしたやうに、たゞ呆然と突立つてゐたが、その間に、署長はそれらの品物を丹念に戸棚へ藏つて、鍵をかけた。

ルコックは失望落膽して、獨り、物も云はずに其室を出て行つたが、まるで醉漢のやうに、階段を躓づきながら降りてゆく彼の跫音が聞かれた。



## 一四、同僚の失敗

その日は謝肉祭の最終日で、巴里市内は殊の外賑はつてゐた。それは、質屋と舞踏場が盛んに繁昌する日なのである。

ルコック探偵がマリアンブール旅館を出たのは、夜半に近い時刻であつたが、街々は眞晝のやうに明るく、カッフエといふカッフエは、どこも客が一杯に立混んでゐた。

それだのに、獨りわが探偵の心は、重くるしく沈んでゐた。歡樂に醉うてゐる群衆に捲きこまれてたゞ呆然と歩みをつゞけた。財布の底を叩いてしまつた賭博者のやうに、落膽して、何處へ行くといふ當てもなく、ふら〳〵と歩いてゐるのであつた。

かうして歩遊街まで行つたとき、ふと或る考へが胸に浮ぶと、

「チエッ、俺は何といふ馬鹿だい。」獨語をいつて、自暴に額を叩いた。「これつぱかしの障碍にへこたれてなるものか。敵手はあの通りの大膽不敵な奴、どんな繰りをやつてゐるか知れたものぢやない。何がどうあらうと、俺の最初の考へが正しいんだ。俺はもつと冷靜に、もつと確りせねばならん！」

こんなことを一心に考へながら、何時の間にか自分の宿の前に來てゐた。玄關の呼鈴を鳴らすと、門番が戸を開けてくれたので、五階へ昇つて行つて室へ入らうとすると、廊下の暗がりから聲をかけた者がある。

「ルコック君か？」
「僕はルコックだが、誰方？」
「僕だよ、アブサントだよ。」
「あゝ、君かい。聲が判らなかつた。まあ此方へ入りたまへ。」
燈火をつけて、同僚の方を見ると、これがまた變つた姿だ。迷兒になつた犬が、雨に叩かれたり、泥濘を這ひ廻つて來たやうに、汚ない風をしてゐる。外套は泥塗れで、帽子はめちやくちやに潰れ、不安さうな眼付をして、口髭は力なくだらりと垂れてゐる。そして聲までが、砂を含んだやうに嗄れて聞える。
「君は惡い知らせを持つて來たゞらう。」
「うむ。」
「尾行した奴等を取り逃したな？」
アブサント爺は、默つてうなづいた。
「そいつは惜しいことをしたが、まあいゝさ。そんなに落膽せんでもいゝ。明日は、兩人でこの失敗を取りかへさうぢやないか。」
ルコックが元氣をつけると、爺はます〳〵狼狽して、子供のやうに顏を染めたが、
「僕は何て馬鹿だらう！」



「おい、何うしたつていふんだ。」
「僕の手紙を讀んでくれたゞらう。あれにも書いたやうに、僕はあの殺された兵士を見知つてゐるらしい若者達の後をつけたのさ。」
「うむ、それから何うした。」
「彼等が或るカッフェに入つたので、僕も續いて入つて行くと、彼等はそこで酒をはじめた。多分厭なものを見た氣晴らしをするためだらう。二時間もゆつくり飲食してから、ぶらりと出て行つた。僕は無論尾行をつゞけたが、多分家へ歸るだらうと思つたら、さうではなくて、ドウバン街の方をぶらついて、又もカッフェのやうな店へ入つたので、僕も五分ほど經つてから入つて行くと、彼等は球を撞いてゐた。」
こゝまで話して、少し極りが惡さうにもぢ〳〵しながら、
「僕は小さな卓子に坐つて、新聞を讀むふりをして彼等を監視してゐると、一人の立派な紳士が入つて來て、僕から新聞を借りたのをきつかけに、一つ二つ世間話を取り交はしてゐるうちに、向うから退屈凌ぎに骨牌でもやらうかと云ひだしたので、すぐに始めた。ブランデイを賭けて、勝つた者が飲むつて規約で、最初に僕が勝つた。紳士は復讐戰だといつて、また二回やつたが、二回とも僕の勝ちさ。もう一度先方が望むので、またやると相變らず僕が勝つたので、飲んだ。その又次も僕の勝ち飲みと來た。」

「それから何うした。」
「その後は記憶がない。紳士がどうなつたか、若者達が何處へ行つたのか、些とも知らん。僕はそれつきり睡込んでしまつたらしい。給仕にゆすぶられて、眠を醒ましたときは、大分夜が更けてゐた。で、そのカッフェを出て、ふら〳〵と河岸のあたりをうろついたが、はつとして氣がつくと、どうも君に申譯がないので、此家へ來て、君の歸りを待つてゐたのさ。」
アブサント爺は、同僚から嚴しい叱言を豫期したらしいが、ルコックはその反對に、すつかり考へこんで、
「おい、その紳士のことを君は何う思ふね、小父さん？」
「僕が若者達を尾行してゐる間に、その紳士がまた僕の後をつけてゐたので、骨牌をやらうなんて云ひだしたのは、つまり、僕を醉はせようといふ目的だつたに違ひない。」
「その男の風采を聞かしてくれないか。」
「脊が高くて、頑丈な體格で、赭ら顏で、鼻は扁べつたい方だ。ごく率直な、氣持のいゝ男だつたよ。」
「さては彼奴だ！」
「彼奴とは？」
「胡椒軒の殺人者の仲間さ。彼軒の裏庭で發見した靴跡の主さ。あの晩醉漢に化けて、バリエール警察の留置場へ入りこんだのも、あの男だ。油斷のならぬ奴だよ。今度彼奴に出會したら、逃してはならんぞ。いゝか。」



ところで、アブサント爺の告白は、もう一つ殘つてゐた。しかも彼は、最惡の失策を後廻しにしたのであつた。
「實はもう一つあるんだがね、その紳士は、僕が醉拂つてから、胡椒軒の一件を種々訊ねるので、僕は何だか彼奴に、僕等が發見したことや、今後の手筈を話したやうな氣がする。」
「馬鹿野郎！」ルコックは呶鳴りつけた。「刑事が敵に祕密を洩らすとは何事だ！」
しかし、ルコックは直きに憤りを靜めた。この失策は、取りかへしがつかぬとは思つたけれど、よく考へると、却つて好都合な點もあるやうに思はれて來た。マリアンブール旅館を訪ねて以來、胸中に鬱積してゐた疑問が、この怪紳士の行動を聞くに至つて、初めて首肯かれたのであつた。
「もう愚圖々々してはゐられない。今夜は兎に角ぐつすり眠て、明日は大活動だ。君も此室で泊りたまへ。」
ルコックは用意周到、寢際に枕時計を捲いて、警鈴の針を六時のところへ合せて、
「明日は早朝に馬車で出かけるぜ。」
兩人とも疲れきつてゐるので、枕に頭をつけると同時に、ぐつすりと深い眠りに入つた。
夜が明けて、近所の寺院の大時計が六時を打つたのも、枕時計の警鈴——比較的微弱な音ではあつたけれど——が鳴つたも知らずに、七時半頃まで眠つゞけたが、そのとき誰かゞ消魂しく戸を叩く者

があるので、ルコックは漸と眼を開けると、室の中がすつかり明るくなつてゐるのに、驚愕して跳び起きざま、戸口の方へ聲をかけた。

「お入り。」

入つて來たのは、悧巧さうな顏をしたパピヨン爺であつた。

「あゝ、昨日の馭者先生だな。何か變つたことでもあつたのか。」

「何も變つたことはありませんが、私はあの殺人事件に關係のある女達から、三十法といふ金を貰つたことが氣がかりで、夜もおち〳〵眠れません。旦那、後生ですからあの金目だけ乘つてやつて下さい。昨日の馬車賃は百スーと見て、あと二十五法だけ旦那をお乘せしなければ、私はどうしても氣が濟まないんです。」

「つまらんことを云ふものぢやないよ。」

「どう致しまして、私は大眞面目です。旦那がお乘りになるのがお厭なら、十一時間だけ、此家の玄關前に馬車を立たせておきます。一時間二法二十五サンチームと見て、十一時間で帳消しにして頂きます。それでも乘らないと仰しやるんですか。」

それでも厭だと云つたら、この爺、きつと氣を惡くするだらう。

「そんなら午前中だけ乘ることにしよう。だが、今日は少し遠いぞ。」

「大丈夫です。馬が確かりしてゐますから。」



「今日はお前の馬屋の近所へ行つて、シュバン婆の嫁の居所を探すのだが、多分彼處の警察へ訊けば判るだらう。」

「えゝ〳〵、何處へなとお伴します。」

數分の後に彼等は出發した。

パピヨン爺は得意氣に馭者臺にそりかへつて、しきりに鞭を鳴らした。馬は飛ぶやうに駈けた。警察へ行くと、署長は不在だつたが、次席の警官の話によれば、ポリット・シュバンの女房は、子供と二人でカイユ街の方に住まつてゐるといふことだ。

何でも彼女は、十二くらゐの小娘の頃田舍から巴里へ出て來て、或る大きな工場の女工になつた。怜悧な女で、一生懸命に働きながら、工賃のうちから零細な金を貯へてゐたが、十年後には、その貯金が積りつもつて三千法となつた。そしてその頃、ポリット・シュバンといふ碌でもない男と惚れ合つて、たうとう結婚をしたのだ。

貯金のあるうち、三四ケ月は面白をかしく暮らしたが、それを費ひ果してしまふと、ポリットは彼女を振り向きもしないで、以前のやうな、放蕩と、盜みと、懶惰の生活に立ちかへつたのである。

その後も、女房に僅かの貯金が出來たのを嗅ぎつけると、時々歸つて來てはその金を攫つて行つた。かうして女房を困らせた擧句に、彼女に極端な罪惡を勸めたことも度々だつたが、彼女はどうしても諾かなかつた。それがまた姑のシュバン婆の氣に入らない。それで虐待がまた〳〵酷くなるの

で、遂に衣のみ衣のまゝ家を飛び出してしまつた。

この一家の噂は、近所で誰知らぬものもない。皆んな嫁に同情して、何時とはなしに「貞女トアノン」と呼ぶやうになつた。トアノンといふのは、彼女の名前なのである。

ルコック等は教へてくれた警官に厚く禮をのべて、また馬車に乘つてカイユ街へ行つた。

その邊は貧乏人ばかり住まつてゐる土地柄とて、小さな村へでも行つたやうに、近所の消息は手に取るごとくわかるのであつた。

「貞女トアノンの家なら、向うに見える彼家がさうです。」

と最初に訊かれた人が、すぐに教へてくれた。

## 一五、屋根裏の貞婦

トアノンは屋根裏に住まつてゐたが、そこは只一つの小さな天窓から光線が射しこんでゐる、薄暮い室であつた。

室内には、藁蒲團と、破れかゝつた卓子と、椅子が二脚、それに、貧しい炊事道具が少しばかり置いてあるつきりで、その外には何一つ裝飾らしいものも、家具らしいものもない。

しかし貧しいながらも、綺麗に掃除が行きとゞいてゐて、アブサント爺が感歎したやうに、床板の上で食事を取つてもいゝ位だつた。



彼女は天窓からしのび落ちる光線の下で、せつせと内職の縫物をやつてゐたが、見知らぬ客が二人入つて來たのを見て、びつくりして自分の椅子を讓らうとすると、

「そのまゝ〳〵、僕が立つてゐるから。」

とアブサントが慌てゝ止めて、自分だけが突立つてゐた。

ルコックはもう一脚の椅子に腰をおろしたが、室内の樣子を見て、この女の心掛けに感心してしまつた。彼女は小柄の方だが、確かりした體格で、容貌も尋常に整つてゐる。黑髪は房々と額にかぶさり、黑眸がちの大きな優しい眼は、虐待に慣らされた動物のやうな忍從の表情を與へてゐる。元は阿娜つぽい女房さんだつたにちがひないが、今は苦勞のためか、姑のシュバン婆ほどに老けて見える。

傍にゐた子供は些とも彼女に似てゐない。蒼白くていかにも弱々しく、眼付きが妙に底光りがして、髪は光澤のない黃色い髪だ。

もう一つ注意をひいたのは、母親が縞目もわからぬくらゐ褪せたキャラコ服を着てゐるに引かへ、子供は上等の純毛の服を、左も溫かさうに着てゐることであつた。

「お女房さん、胡椒軒の事件は、お前さんも聞いたゞらうね。」

とルコックは優しく話しかけた。

「はい、聞きましてございます。けれども良人は監獄へ行つてをりますので、あれに關係がございませんでした。」

「それは私も知つてゐる。ポリットは二週間前に逮捕られたんだから。」
「はい、かう申しちや何ですけれど、あのときはほんたうに可憫さうでございました。惡い友達に欺されたのでございます。良人は人が好いものですから、何時もあんな風で困ります。お酒を頂きますと夢中になる性質で、それをまた友達が知つてゐて、お酒を飲ましては、惡事に誘ひます。平常は蟲も殺さない人ですけれど——」
と、泣き脹れた眼で、壁にかゝつてゐる男の寫眞を見あげた。
何といふ醜い寫眞だらう。無愛嬌な上に、ひどい斜視で、不恰好な口許を薄い口髭でかくし、念入りに撫でつけた髪が額にのた打つてゐる。これが彼女の良人ポリットかる者の寫眞なのである。
こんな男に對して、彼女は偷らぬ愛情を捧げてゐるのだ。彼女は寸時沈默したが、情は泌々良人に通つてゐるらしかつた。
そのとき室の戸が密と開いて、一人の男が首を突込んだが、アッといつて戸を締めきると、外から鍵をかける音がして、やがて階段を降りてゆく靴音が聞えた。
ルコックは背ろ向きになつてゐて、その男の顏は見なかつたが、物音ですべてを察した。それゆゑ驚きはしなかつた。
「彼奴だらう。」
幸ひアブサント爺は、戸口の方を向いてゐたので、男の顏が眞面に見えた。



「さうだよ、昨日僕を醉ぱらはせた男だ。」
とアブサントが答へた。
同時に兩人が駈けて行つて、扉を精一杯押したが、無駄であつた。この家は或る官署の建物を拂下げたもので、普通の貸家とちがつて、思ひ切つて頑丈に出來てゐる。扉は厚い樫の板だから、二人や三人打衝かつたぐらゐでは微動ともしないのだ。
「おいお女房さん、鐵棒はないか。何か鐵物を貸してくれ——釘でも、何でもいゝ。」
アブサントは夢中になつて怒鳴つた。ルコックも焦立つて、扉に打衝かつたり、錠前を切らうとして一生懸命に試つた擧句、漸と錠をこじ開けると、兩人は轉げるやうに敵の後を追ひかけた。
街へ飛びだして、近所の人に訊くと、その男がたしかトアノンの家から出て行くのを見たといつた。
「馭者が街角に待つてゐる筈だから、彼に訊いてみようぢやないか。」
ルコックがいふと、
「駄目々々。僕等が錠を開けるまでに十分もかゝつたんだから、今頃は遠くへ逃げてしまつて、捕まる氣遣ひはないよ。」
とアブサントは顏色を變へて口惜しがつた。まんまと瞞されて、醉つぱらつて失敗した昨日の今日が又これだ。口惜しがるのも無理がない。
「彼奴は飽くまで人を喰つてゐやがる。これで僕等の手から逃げたことが三度目だ！」

と彼は地團駄ふんだ。

ルコックも、腹の中が煮えくりかへるやうにむしやくしやした。馬鹿にされたのが口惜しかつた。しかし、こんなときは特に、冷靜と愼重な態度が必要だといふことを彼は感じた。

「彼奴なか〳〵敏捷だな。神出鬼沒ともいふべき奴だ。僕の行く先〴〵に、先廻りをして何か企らんでゐるらしい。マリアンブール旅館の一件だつて、彼がこしらへた機關にちがひないんだ。」

といつて、またぢつと考へながら、

「こんな風に先廻りをされたゝめに、僕等の手筈は片つ端から打破されたのだ。しかし彼が今日彼家へ立ちまはつたといふのは、容易ならぬ危險を感知したからだよ。彼はもう受け身になつてゐるんだ——兎に角、僕等はもう一度トアノンの許へ行つてみようぢやないか。」

再びかの家の階段をのぼつてゆくと、貞女トアノンは、子供の手を引きながら兩人を廊下に出迎へて、

「今のは何でございましたの？」

ひどく當惑した樣子であつた。

しかしルコックは、壁にも耳あり、廊下などで迂濶に話が出來ぬと思つたので、一同を室內に入れて、戸を締めきつてから、靜かに說明した。

「今のは、胡椒軒の殺人者の仲間だよ。彼奴はお前さん一人と思つてやつて來たところが、生憎我々



がゐたので、びつくりして逃げ出したのさ。」

「おゝ氣味が惡い。わたしに何の用があるんでせう。」

「それは解らないが、彼は多分御亭主の友達だらう。」

「へえ、さうでせうか。」

「お前さんは先刻、亭主が惡い友達のために罪になつたといつたね。それなら安心しなさい。惡い友達があるといふことが判れば、亭主の潔白を證明することも出來るわけだ。」

「どうしてそれを證明したらいゝでせう。」

「お前さんは正直な女だから、私の問ひに對して有りのまゝに答へなさい。さうすれば、私はその惡漢共を發見してあげよう。いつたい、どんな奴等が友達なんだね？」

けれど、女房は躊躇してなか〳〵答へなかつた。多分彼女は幾度か密談の席に捲きこまれて、若しもそのことを警察に告口したら酷いぞと威嚇されてゐたらしかつた。

「何も怖いことはない。」ルコックは勵ますやうにいつた。「お前さんから聞いたなんて云ひはしないよ。我々は大抵事情を知つてるんだ。お前さんの身の上も詳しく知つてゐるつもりだ。亭主や姑がお前さんを酷い目に遭はしたといふことも聞いてゐる。」

「いゝえ貴方、良人は一度だつてわたしに酷くしたことはありません。皆んなわたしが惡いのでございます。」

「姑はどうだね。」
「あの女は少し氣が荒いんですけれど、根は好い女でございます。」
「そんなら、何故お前さんは、シュバン婆の家を逃げだしたのか。」
すると彼女は、耳の附け根まで眞赤にして、
「それには理由がございます。彼家は絶えず醉拂ひのお客がまゐりまして、わたしが獨りで店番をしてゐるときなどは、隨分惡巫山戯をする人があります。尤も、わたしは腕は強い方ですから、手ごめにされる氣づかひはありませんけれど、わたしが留守にでもしますと、この子にお酒を飲ませるので困ります。何しろ醉漢のすることですから、見境がないんです。それでわたしが他所から歸つてまゐりますと、この子は死人のやうに體が硬ばつて、冷たくなつてゐるので、びつくりしてお醫者へ驅けつけるといふ騒ぎでございます。そんなことが度々あつたものですから——」
急に聲が曇つて、蒼ざめた頰に涙が傳はつた。
「ねえ、トットオや、可憫さうに。」
さういつては、さめ〴〵と泣く。
その時ルコックは體に何か觸つたのを感じて、はつと思つた。五歳にも滿たぬその子が、密と後へ廻つて、外套の衣嚢へ手を入れて中のものを拔き取つたのである。
「あら、お前何をするの？　——貴方、ほんたうにお恥かしうございます。この子は彼家にをります



時分は、いつもこの通りでございました。」
不幸な母親は泌々歎息した。
「わたしが一寸でも眼を離しますと、あの人達は此子を人通りの多い街へつれ出して、掏摸をやらせます。やり損ふと苛めて打ちます。巧く行けばお小遣ひをくれて菓子を買はせます。そして掏つたお金は自分達のふところへ入れるのでございます。」
と彼女は兩手に顏をうづめながら、
「そんな風ですから、この子の行く末を思ひますと、とても彼家には居られません。」
子供にさうした罪惡を敎へこんだ者は、その父親のポリットと、シュハン婆に相違ないのであつた。聞くも恐ろしい話だ。ルコックは、一刻も早くこの氣拙い訪問を終結させたいと思つた。
「大てい樣子は解つたが、もう一つ訊きたいことがある。それは外でもないが、胡椒軒へ來る定連のうちに、ギュスターブといふ男がゐる筈だね？。」
「さういふ名前の人は來ませんでした。」
「では、ラシヌールといふ男はどうだね。」
「その人なら知つてゐます。」
ルコックはしめたとばかり、內心に雀躍した。
「そ、それはどんな男かね？」

「その人は、他のお客とまるつきり異つてゐます。わたしは一度見たゞけですけれど、ようく記憶えてをります。たしか日曜のことで、その人は馬車に乘つてゐました。空地のところで馬車を停めて、良人と暫く何か談して、歸つて行きましたが、そのあとで良人がわたしに『今の人を見たか？　彼のおかげで俺も一身上出來るぜ。』と申しました。何だか立派な紳士のやうでした。」

「よろしい。かうなると、否でも應でも判事の前へ出て、今のことを申し立てゝ貰はねばならん。御苦勞だが、私の乘つて來た馬車で一しよに裁判所へ行つておくれ。さあ、大急ぎだ！」

## 一七、口止め

その朝、セミュレ判事はいつもより早く出勤した。書記のゴッケも間もなく出て來た。が、他の室はまだガラ開きだつた。

判事は檢事總長と打合せをしようと思つて、その室へ行つて見たが、總長はまだ出勤してゐない。それに、昨日あんなに堅く約束したルコック探偵が來てゐない。

判事はひどく癇癪をおこして、

「ルコックはどうした。來てゐなければ警視廳へ迎へに行け。」

小使を呶鳴りつけた。さうかと思ふと、しきりに時間を氣にして、

「ぐづ〳〵しちや居られぬ。時間が貴重だ。今日はシュバン婆の倅を訊問する手筈なんだが、早速此



室へ呼べ。」

と書記に命じた。それから十分と經たぬうちに、ボリットが呼び込まれた。

なるほど人相の惡い男だ。蒼白い顏で、絶えず眼をしばたゝき、口許は神經的に引きしまつて、一體に臆病と殘忍さの不思議に入り混つた表情をしてゐる。

豫備的訊問に答へたところによれば、年齡は三十。巴里生れといふことである。

「この殺人事件について、お前の證言は重大なものだ。それはお前等母子にも利害關係のあることだから、正直に答へなければ可かん。」

と判事がいひ聞かせたが、ボリットは太々しい顏でそれを聞いてゐた。

「俺はどうせ六ケ月以上の刑をうける氣づかひはない。この上一ケ月や二ケ月延びやうと縮まふと、大した問題ではない。」と高をくくつてゐるらしかつた。

判事はそれを見て取つたので冒頭はい〻加減に縮めて、直ちに本訊問をはじめた。

「お前の母親の營てゐる居酒屋へ來る客について訊ねる。」

「客は澤山まゐります。」

「お前はギュスタープといふ者を知つてゐるだらう。」

「存じませぬ。」

「では、ラシヌールといふ者は何うぢや。」

「ラシヌール？　聞くも初めてゞございます。」
「注意して答へろ。お前が幾ら知らぬと云ひ張つても、警察の調べは行きとゞいてをるぞ。」
このくらゐの脅かしでは、びくともしない。
「私は正直に申し上げてをります。嘘をいつたとて、何の利益もございません。」
そのとき、突然に戸が開いて、ボリットの女房のトアノンが、子供を抱いて入つて來た。
彼女は思ひもかけず、其室に良人がゐるのを見て、嬉しさのあまり傍へ驅け寄つた。が、ボリットは一歩退つて凄い眼つきで女房を睨み据ゑたので、彼女はそのまゝ立ち竦んだ。
「ラシヌールなんて、まるつきり知らない男だ。若しも私が知つてゐるなどと申立る者があつたら、其奴は私の敵だ。そんな奴は取り殺してくれるつ！」と彼は呶鳴り立てた。
ルコック探偵は、トアノンの後から間もなく判事室へ行つてみると、この有樣なので、いきなりトアノンの腕を掴んで、
「お前さんは此室にゐてはいけない。早く彼方へ行かう。」
と急き立てたが、女は戀しい良人のそばを離れようとしない。話が聞きたい、物が云ひたいで、夢中だつた。
が、ルコックは彼女の胸に手をかけるが早いか、輕々と抱きあげて室外へ拉し去つた。
「はゝあ、面白くなつて來たぞ。」



と書記のゴッケは心の中で獨り悦に入つたが、彼は何處までも書記といふ役目をわすれない。
「今いつた證人の言葉も書き留めませうか。」
「一字一句、そのまゝに記錄してくれ。」
そのとき、再び戸が開いて、守衛が密と入つて來て、一枚の紙片を判事にわたして引き退つた。
それは手帳の一枚をむしり取つたものに、ルコックが鉛筆で走り書をしたのであつた。
「あゝ、さうだつたか。」
判事は獨り言をいつた。これを讀んで、今ルコックが女を拉し去つた理由が了解めたのである。
判事はボリット夫婦をかち合はせたことを口惜んだ。大變な失策をやつたものだ。しかしそれは自分の不注意から來てゐるので、誰を怨まんやうもない。
「さて、訊問を續行する。」と判事は宣言して「今此室へ來た婦人は、お前の女房か。」
「さやうでございます。」
「お前は女房を避けたね。」
「そんなことはありません。」
「愛情があるなら、せめて子供にやさしい顏を見せるのが當前なのに、何故あのやうに情なくしたのか。」
「今は愛情に溺れてゐる場合ではございません。」

「嘘を云へ。お前はあゝして、彼女に智慧をつけたではないか。」
「何で私が智慧などをつけませう。」
「いや、お前は女房に口止めをしたのだ。俺が召喚した者に對して、何故あんな邪魔立てをするんだ。お前が隠さうとしたつて、警察は盲目でないぞ。お前とラシヌールの間に或る關係があつて、ラシヌールが馬車でお前を訪ねて來て密談を取り交はしたことや、お前がその男から金をもらふ約束をしたことまで、すつかり判つてゐる。好い加減に白狀したらどうぢや。我を通さうとすると利益にならんぞ。」
厚顏なポリットも、急所を衝かれて狼狽した。彼は首を垂れて低聲で何か曖昧なことをいつたが、それつきり口をつぐんでしまつた。
もう何を問うても、答へようとしなかつた。
そこで判事も已むを得ず、看守を呼んで、彼を監房へ護送するやうに命じた。
ポリットが退出すると、摺れちがひにルコックが其室へ入つて來た。
「實に殘念でした。私はあの女から、まだ〳〵種々のことが聞き出せるのでしたが、貴方がお待ちかねだらうと思つて、談話を半分にして伴れて來たのです。私が折角うまくやつたのに——」
「心配することはない。この失敗は直きに取りかへして見せるよ。」
「駄目です。あの女からはもう何も聞き出せないでせう。彼女は良人に盲從する女ですから、あんな



風に口止めされた以上は、死ぬほど拷問にかけたつて、答へる氣づかひはありません。」
探偵のこの觀測は、たしかに一理あつた。
判事はやがてトアノンを室へ呼びこんだが、彼女は悄氣かへつてゐた。良人のあの一言が身に沁みて恐ろしいものであつたらしい。
で、彼女はどんな訊問に對しても「知りませぬ。」「存じませぬ。」の一點張りだ。前にルコックに話したラシヌールといふ人物については「わたしの思ひ違ひでございます。」「貴方のお聞き違ひでございます。」といふだけである。そして結局、ラシヌールといふ名前は、一度も聞いたことがないといふことを誓言した。
その上追究すると、彼女は子供を犇と抱きしめて、狂女のやうに泣きだすといふ有樣で、手がつけられない。で、判事は寸時考へてから、
「今日は退つてよろしい。しかし良人の利益を思ふなら、この次には素直に答へるがよからう。」
と一應の注意を與へて、退出を命じた。彼女は逃げるやうに歸つて行つた。
判事と探偵は、驚き且つ落膽して、顏を見あはせた。
「今日まで喚問した者達は、多少ともこの事件について知つてゐるんだな。」と判事は散々の不機嫌だ。「知つてるくせに——」
「彼等は實を吐かないのです。」

「それは何故だらう。ポリットのやうな惡黨を、どんな報酬で默らせることが出來たのか。彼女が看すみす自分の不利益になると知りつゝ、堅く口をつぐんでゐるところを見ると、餘程大きな口止料が貰へるのだらう。」

ルコックはそれには答へもしずに、眉を寄せてぢつと考へこんでゐたが、

「實は難問題が一つあります。それが判れば、解決も樂になりさうですが。」

「何だい、その難問題といふのは。」

「外でもありませんが、貴方は今、どんな報酬がシュバンに約束されたかと仰しやいましたね。ところで、誰がその報酬を約束したのでせう？」

「それは判つてるではないか。盛んに我々の邪魔をしてゐるあの男――メイの仲間――の仕業さ。」

「それにしても、彼はどういふ手段を用ひたのでせう。あの晩醉漢に化けて、バリエール警察の留置場へ入りこんで、メイやシュバン婆と打合せをしたらしいことは解りますが、監獄にゐるポリットにどうして近づいたのでせう。外から絶對に入れない監獄へ、どうして手を廻すことが出來たか。實に不思議ぢやありませんか。」

判事は早くも探偵の意中を察した。しかもそれが容易ならぬ疑念であるのに吃驚して、

「君はひどい疑ひをかけてゐるね。監獄の役人が買收されたつて云ふんだらう？」

ルコックは、そんな積りではないといふやうに首を振つた。しかし曖昧な振り方であつた。



「私は内部の者を疑ぐるといふよりは、主に事實を追究するのです。一體監獄ではポリットを嚴重に警戒してゐるんでせうかね？」

「それは無論のことだ。」

「そんなら、囚人の中に諜者があるか、でなければ、最近ポリットに面會を許された者があつて、其奴が智慧をつけたのでせう。」

判事は、その何れとも判斷に迷つてゐるらしかつたが、急に何か思ひついた風で起ちあがると、

「俺は自分で監獄へ行つてこの點を調べにやならんが、ルコック君、君も來たまへ。」

兩人は、二分間も歩いたと思ふと、もう監獄へ行つてゐた。（註、巴里の裁判所と、未決監と、警視廳とは、同じ構内にあつて、薄暗い廊下で聯絡してゐるのである。）

恰度囚人の食事時だつたので、典獄はそれ等の指圖をしながら、例のゼブロール警部と竝んで、前庭を散歩ついてゐたが、判事の顏を見ると、勿體らしく傍へ駈けて來て、

「判事殿、貴方はあの囚人メイのことで御出でになつたのでせう。」

「實はさうです。」

「今も彼囚のことで、ゼブロール警部と話してゐたところですがね、あの男はすつかり從順くなつてもう緊衣を被せておく必要もないし、それに頭腦も大分落ちついたやうです。食慾も出て、雲雀のやうに快活になつて、看守をつかまへては冗談をいつたりしてゐます。」

判事とルコックは顔を見合はせた。囚人のその快活は、何を意味するだらう？　飽くまで道化者になり濟まさうと努力してゐるのか。或は、まんまと裁判官や警察官を瞞着した嬉しさのためか。でなければ、外部から何か有利な諜報をうけ取つたのであらうか――とも考へられた。

「獨房では、囚人は外部と通信が出來ない筈だね？」

判事は訊いてみたが、何だか獄内の取締りを疑ぐつてゐるらしい口吻なので、典獄はひどく侮辱を感じた。

「はゝあ、貴方はまだ獨房――監獄では密房といつてゐます――を御覽になつたことがないんでせう。それは實に嚴重なもので、門が三重にかゝつて、頑丈な格子が嵌まつてゐて、看守が夜晝絶え間なく、その窓の下を歩いて、警戒してゐます。空飛ぶ小鳥だつて、この獨房の囚人に近づくことは出來ません。」

「そんなら大丈夫。」

判事はやつと安心した。

「ところで、もう一つ、ポリット・シュバンといふ囚人についてお訊ねしたいが。」

「彼奴は性質のわるい惡黨です。」

「昨日あの男に面會人が來ませんでしたか。」

「それは確かめた上でないとお答へ出來ませんが――あゝ、恰度いゝところへ守衛が來ました。おいちよつと此處へ來てくれ。」

と守衛を傍へ呼んで、

「君は知つてゐる筈だが、ポリット・シュバンといふ囚人は、昨日面會場へ出はしなかつたか。」

「えゝ、出ました。私が伴れて行つたのです。」

「その面會人といふのは、脊の高い、赧ら顔の男だつたらう？」

ルコックが横合から熱心に問ひかけると、

「いゝえ、女でしたよ。伯母だとかいつてゐました。」

「えつ、女か。そしてどんな風の女だつたね？」

「小柄だけれど、美人で、薄色の黄金髪で、立派な服裝をしてゐました。」

「それはあの晩の女だ。」とルコックが叫んだ。

「胡椒軒から逃げた女の一人にちがひない。」と判事もいつた。

「多分露西亞の公女でせうよ、ハッハハ。」

突然にさういつてから〳〵と笑ひだしたのは、ゼブロール警部だつた。

すると判事は厭な顔をして、

「君はひどい皮肉をいふね。その皮肉は、俺にも痛いんだよ。」

警部は少し云ひ過ぎたのに氣づいて、ハッと思つたが、もう追附かなかつた。で、凄い眼付きでル

コックを睨みつけながら、判事に詫をいつた。
判事は、その云ひ譯をよくも聽かずに、ルコックを眼で促がしてグン〳〵歸りかけたが、典獄達から聽えないところへ來ると、
「ルコック君、君は大至急警視廳へ行つて、その女がどういふ口實で面會を許されたかを確かめて來たまへ。」
それから間もなく、判事が自分の室で、書記を相手に事務に取りかゝつたところへ、ルコックが歸つて來た。
「先刻のことは判つたかい？」
「判然しませんが、例の仲間の男が、抜け目なく、あらゆる機會を利用してゐるといふことが、いよいよ明白になりました。昨日は、シュバン婆の姉のローズ・ピタールといふ者が面會をゆるされたさうです。けれどその面會許可證は、立派に警察署長の證明つきで、一週間前に發行されたものなのです。」
「うむ、その伯母も事件に捲きこまれてゐるんだな。」
「いや昨日面會場へやつて來た女は、伯母ではありますまい。警視廳の調べによれば、伯母なるものは、五呎以上もあらうといふ大女で、顏は淺黑く、皺くちやで、六十以上の年寄なんです。ところが、昨日の面會人は、小柄で、黃金髮で、せい〳〵四十四五の美人だつたさうです。」



「左樣とすれば、あの晩胡椒軒から落ちのびた女の一人にちがひない。」
「私も最初はさう思ひましたが、どうも別人らしいのです。」
「ぢや、何者だね、君の見るところでは？」
「多分マリアンブール旅館の女將でせう。巧い手段で私を誤魔化した、あの利巧な女です。けれど今度こそは彼女の化の皮をひん剝いてやります。」
「それはいゝが、かの仲間の男が、どうして面會許可證を手に入れたゞらう。」
「それはなんでもないことです。あの男がバリエール警察の留置場でシュバン婆と牒し合はせたのです。入獄中にポリットに近づく方法に窮した擧句、婆が姉のところに面會許可證があるのを思ひ出して、早速それを使つたのでせう。」
「成るほどな。それにしても、なほ確かなところを突き止めたいものだね。」
「その件は、私に任して下さい。今晩、ポリットの女房トアノンの住まつてゐるカイユ街と、マリアンブール旅館の前に、探偵を一人づゝ見張らせておいて、あの男が立ち廻つたなら、直ちに捕縛させます。彼奴さへ縛つてしまへば、あとは此方のものです。」
さう話がきまると、時間が貴重だ。ルコックは帽子をつかんで起ち上つた。
「では早速その手配をしておいて、私は、ラシヌールの手紙と、耳飾りについて探査を始めます。若しも私に急な御用が出來たら、同僚のアブサント爺に命じてください。彼を廊下にのこしておきます

から。」

「ぢや、早速出かけるがいゝ。そして巧くやつてくれ。」

成功は、無論わがルコック探偵の目差すところだ。彼が今日まで幾度か失敗を重ねつゝ、なほ希望を失はぬのは、實は衣嚢の中に、一つ有力な護符があるのを恃んでゐたのだ。

「これほど高價な耳飾りの持主が發見出來なければ、私はよく〳〵の馬鹿者です。」彼はきつぱりと云ひきつた。「そして、此品の持主が判つたときは、あの不思議な囚人メイの身分も、ひとりでに判明するわけです。」

## 一七、寶石の祕密

ルコック探偵は勇ましく判事の室を飛びだしたが、さて、第一に問題となるのは、この耳飾りが何處の店で買はれたかといふことだ。が、如何に根氣のいゝ探偵でも、巴里中の寶石商を一軒々々訊いて歩くわけにはゆかない。

ところが幸ひなことに、彼は、この方面で極めて重寶な人物を一人知つてゐる。それは和蘭生れのファン・ニューメンといふ老人で、寶石については、巴里隨一の權威者として、警視廳の囑託となつてゐるのである。

この老人は服裝に無頓着で、いつも貧弱な風をしてゐるが、一通りならぬダイヤモンド狂で、常に



幾つかのダイヤモンドを入れた小函を携帶してゐて、一時間に何回となく、それを衣嚢から引き出して眺めなければ氣が濟まぬといふ性分。恰度、嗅ぎ煙草を用ひる習癖のある男が、年中煙草袋を手離さないと同じ理窟である。

ルコックはこの老人を訊ねて、例の耳飾りの鑑定を賴んだ。すると老人は眼鏡をかけて、暫くそれを打ち眺めてゐたが、やがて會心の笑をうかべながら、神託でも宣べるやうな口調でいつた。

「大したものぢや。八千法の價格がある。細工は、ラ・ペイ街、ドアステイの店だな。」

それから二十分の後、そのドアステイといふ有名な寶石商を訪づれたが、果して老人の鑑定に違はず、主人はかの耳飾りを一見して、これは自分の店で飾り附けをしたものだといつた。が何しろ三四年前に賣つた品で、買手が誰であつたかは、記憶してゐないといふことであつた。

「だが、ちよつとお待ち下さい。家内は記憶のいゝ女ですから、彼女に訊いて見ませう。」

主人はさういつて、細君を呼んだ。

この細君は、亭主が讃めるだけになか〳〵記憶がよく、品物を一目見ると、確かに店にあつた物で一對揃ひで、アルランヂ侯爵夫人に賣つたといふことまで記憶てゐた。

「貴郎は忘つぽいのね。あの方が、勘定のときに九千法しか拂つて下さらないので、殘額を取り立てるのに、あんなに骨を折つたではありませんか。」

それで主人も想ひ出したらしかつた。

ルコックは内心で雀躍して、
「その侯爵夫人の邸は何處ですかね。」
「御邸はたしかサン・ゼルマンで、廢兵院の近所でございます。」
ルコックはそれだけ確かめて、寶石店を立ち出でた。
有力な手掛りを攫んだといふことは、譬へやうもない嬉しさだつた。寶石商夫妻の前では抑へに抑へてゐたが、外へ出るとそれが一時に發して、ほとんど手の舞ひ足の踏むところを知らぬといふ有樣。しかもその氣持が自づから擧動に現はれるので、途行く人々が彼を狂人だと思つたのも、滿更無理ではなかつた。
「しめた。いよ〳〵物になつたぞ。ゼブロール警部は、露西亞の公女だらうなんて冷嘲したが、立派に侯爵夫人といふ貴族が出て來たではないか。態あ見ろ。」
獨り言をいひながら、ふら〳〵歩いてゐたが、やがて再び冷靜な探偵に立ちかへつた彼は、大急ぎで巴里廓外のサン・ゼルマンへやつて來て、アルランヂ侯爵夫人の邸の前に立つた。
それは四方を庭園に取り圍まれた、瀟洒たる邸宅であつた。
「俺に謎を解いてくれるところは此家だな。この立派な邸のなかに、あの晩逃げた女が隱れてゐるんだ。落した寶石から足がつきはせぬかといふ心配で、怖々してゐるだらう。」
彼は門の小蔭に隱れて、一時間以上も邸内の樣子を覗つてゐた。そして何かの拍子に、家人の顏ぐ



らゐは見えるだらうと期待したが、それは無駄であつた。邸内は寂然としてゐて、窓から顏を出す人もなければ、召使が前庭を横ぎりもしなかつた。
たうとうじれつたくなつて、ぶらぶら歩き出すと、恰度向う側の酒屋の亭主が、店の前で暢氣さうに煙草を喫かしてゐた。
「アルランヂ侯爵夫人のお邸は何處でしたかね。實は番地を忘れたので。」
空惚けて訊ねると、亭主はパイプを口に啣へたまゝ、默つて、向う側の家を指した。
そこで探偵は一策を案じ、酒を註文して、二つの酒杯になみ〳〵に注いで、その一つを亭主にもすすめた。かうして、何か談話を聞き出さうとするのである。
「お金の取り立てにいらしつたのなら、お氣の毒ですね。」亭主は初めて口をきいた。「手間がかゝりませうよ、借金取が毎日押しかけて來ますからね。」
「侯爵夫人はそんなに困つてゐるかね。」
「あの方の内幕は誰でも知つてゐますよ。二萬リーブルからの年收があつて、この邸宅だつて御自分の所有ですがね、收入の倍も費ふんだから、堪つたもんぢやありません——」といひかけたところへ二人の婦人が店の前を通りかゝつた。
一人は女學生風の若い娘。もう一人は四十の坂を少し越えたぐらゐの齡恰好で、地味な黑つぽい服を着てゐた。

「御覽なさい。」と亭主は目配せをして、「あの娘さんはクレール嬢さんといつて、侯爵夫人のお孫さん。年老つた方は家庭教師のスミスさんです。」

「え、あんな大きな孫さんがあるかね。」

「え、、死んだ御子息の嬢さんだから、つまり孫さんですね。どつちにしても同じこつた。」

「いつたい侯爵夫人は幾歳だらう。」

「六十の坂を越してゐませう。けれど美人だからそんなに老けて見えませんよ。俗にいふ萬年新造つて奴で、なか〳〵隅におけないお婆さんです。こんな惡口をいふと、あの婆さんは、きつと私を一つ撲したいと思ふでせう。恰度私がこの酒杯を乾したいと同じにね、ハツハハハ。」

「で、侯爵夫人はこの大きな邸に獨りで住まつてゐるんだね。」

「え、、家族はお孫さんと二人つきり、それに今の家庭教師と召使が二人、それだけです——旦那は何うかなさいましたか？」

探偵は心持顏が蒼ざめた。聞けば聞くほど、その侯爵夫人が自分の想像と反對なので、彼は云ひやうのない失望を感じたのであつた。

「いや、何でもないよ。」

左りげなくいつて、勘定を支拂つて、其店を立ち出でた。

それから彼は、いよ〳〵決心して、侯爵夫人の邸の呼鈴を鳴らした。



取次ぎに出て來た執事は、じろ〳〵彼の樣子を眺めてから、侯爵夫人は田舍のはうへ行かれて、お留守だといつた。

執事は彼を債權者の一人と睨んだらしかつた。

「私は會計上のことで伺つたのではありません。實は重大な用事で、是非侯爵夫人にお目通りが願ひたいのです。」

と、どこまでも頑張つて、たうとう玄關の中へ入れて貰つた。

その實、侯爵夫人は在邸だつたのである。

執事はやがて彼を案内して、立派に飾り立てた廣い客間を通つて、奥の方の薔薇色の垂幕を開けると、そこは瀟洒たる居間で、煖爐の前の肱掛け椅子に坐つた一人の老婦人が、空色の毛絲で靜かに編みものをやつてゐた。

彼女はどつしりと骨ばつた、嚴しげな婦人で、齡にも似合はず念入りな化粧を施し、流行づくめの贅澤な服裝をしてゐたが、ちらと客の方へ片頰の紅色を見せ、ルコックが面喰つたらしいのを見て、内心に滿足しながら、

「わたしに、何ぞ御用ですか。」

可成り愛想よく問ひかけた。

ルコックは面喰つたのではないが、侯爵夫人を一目見ると、あの晩胡椒軒から逃げた女ではないと

判つて落膽したのである。バビヨン爺から聞いた人相と符合してゐる點が、一つも見出せないのだ。

彼はまた、あの晩雪の上に發見した、二女の小さな靴跡のことをおもひ出して、侯爵夫人の裾から覗いてゐる足を見ると、馬鹿げた大きな足なので、それも尠からず失望を助けた。

「何の御用かつてお訊きしてゐるのに、聞えないの？」

夫人は大きな聲で促した。と、ルコックは默つて、衣囊から例の耳飾りを取りだし、それを卓子の上において、

「實はこの品をお屆けするために伺つたのです。これは私が拾つたのですが、方々へ問ひ合せて、あなたの御所有であることが、漸と判りましたので――」

夫人は編みものの手を止めて、寶石を取りあげた。

「なるほど、これは確かにわたしが有つてゐたものです。四年前にドアステイの店で買ひました。二萬法から出たのですから、彼店では儲かつたでせうよ。けれど、わたしはその後孫の敎育を引きうけることになつて、お金が要るものですから、此品を手離してしまひました。」

「誰方へ御讓りになつたのですか。」

「何ですつて？」夫人は相手の無遠慮な問ひに吃驚したらしく、「隨分立ち入つたお訊ねですね。」

「御免なさい。奥さま。しかし、かうした高價な品を拾つた上は、是非ともその持主に返さねばなりませんので。」



夫人は怪訝さうに客の樣子を見てゐたが、「御親切にねえ。そして、持主から一錢だつて報酬を受けようなどと思はないでね――」

「奥さま！」

「判つてゐます。何もそんなに顏を赤くすることはありません。わたしはね、このダイヤを、ワツチヨオ男爵夫人といふ墺地利の貴婦人にお讓りしたのです。」

「その方は今何處にお住居でせうか。」

「多分ベール・ラ・シエーズ（註、巴里の墓地）でせう。一年前に亡くなられましたからね。今時の御婦人は纖細なもので、ワルツの一曲も躍つたり、少し寒い風にでも當ると、それつきりです。わたしなんかの若い時分は、どんなに寒いところに坐つてゐても、平氣でしたがね。」

「だが、夫人が亡くなられたとしても、男爵には御子樣がおありでせう。」

「子無しです。御兄弟が一人あつて、維也納の宮廷に勤めておいでゞすが、その方は葬式にもお出でがなく、男爵夫人の遺產は全部賣拂つてくれといふ指圖をよこしたきりでした。そして簞笥の果てまで賣つたお金を、皆んな御自分でお取りになつたさうです。」

「あゝ、殘念！」探偵は思はず失望の聲をあげた、

「何故ですの？　持ち主がわからなければ、このダイヤは貴方のものになりませう。それも正直の報酬なら、結構ぢやありませんか。」

しかも、その後幾度となく持主が輾轉したに相違ないから、探すだけ無駄であらうといふことを、夫人はつけ加へた。

ルコックは失望落膽して其邸を辭した。けれど、どう考へても殘念でたまらない。何だか、自分が瞞がれてゐるやうな氣がする。侯爵夫人の云つたことも當てにならないし、ドアステイといふ寶石商夫婦も怪しいやうだ。氣を廻せば、あの夫婦が顏を見合つたときの眼付きが變であつたとも思へる。

しかし彼は、どうしてもこの寶石の祕密を解かねばならぬので、その足で再びドアステイの店をおとづれた。そして巧い口實の下に、帳簿を一見すると、たしかに記載がある。やはり、アルランヂ夫人へ賣つて、最初に九千法を受取り、殘金は長い間かゝつて支拂はれたことになつてゐる。しかも日記帳から元帳へ轉記してあるから、僞の記帳ではないのだ。

それでも斷念がつかないので、今度はサン・トオノレへ行つて、ワッチョオ男爵夫人が幾室かを占領してゐたといふ家を訪ねた。すると人の好ささうな門番が出て來て、夫人が死なれてから、その家具財産の全部はドルー街へはこばれ、ブッチといふ競賣屋がそれを取扱つたといふことを敎へてくれた。

で、すぐにブッチの許へ行つて、その件を訊ねると、その男は「ワッチョオ家の賣り立て」のことをよく記憶してゐて、そのときに使つた長いカタログを書類の間から探しだして、見せてくれた。品目には寶石類も澤山にあつて、賣價と買手の名前が記載されてゐるけれど、不思議なことに、問



題の耳飾りはそれに載つてゐない。

ルコックは衣囊から、かのダイヤの耳飾りを出して見せた。が、競賣屋はその品に見覺えがなかつた。實際手がけたものなら、それほど高價な珍品を忘れる筈がない。それに男爵夫人の持ち物は悉く彼が取り扱つたので、ピン一本だつて、夫人の兄弟の許へ送り返したのではない。すべて彼の手一つで賣り拂つたのだ。して見ると、この耳飾りだけは、彼が取扱つたものではないといふことを、競賣屋は斷言した。

「で、夫人の御兄弟は？」

「やはりワッチョオと仰しやいます。昨年までは、外交官としてい、地位にをられたさうですが、今は多分伯林の方にいらつしやるかと思ひます。」

この兄弟の消息について、侯爵夫人と競賣屋のいふところが異つてゐる。侯爵夫人は維也納にゐるといつたが、この競賣屋の話では伯林の方だらうといふことだ。して見ると、牒し合せて答へたのでないことは明白である。

何にしても、ルコックの目的はつひに遂げられなかつた。

「ハテ、妙だな。この事件は、どつちを向いても獨逸人がゐる。」ルコックは競賣屋の店を出ると、小首を傾げた。「殺人者メイはライプチッヒから來たといふし、マリアンブール旅館の女將はババリアの女にちがひないし、このワッチョオ夫人は墺地利の男爵夫人だ。皆んな獨逸種だ。」

その晩はもう時刻が遲いので、その上探査をつゞけるわけにゆかなかつた。で、彼はそのまゝ自分の室に歸つて、疲れた體を寢床に横へた。

翌くる朝になると、彼はまた元氣を奮ひ起して、活動をはじめた。

これまで試みたことは、悉く失敗に終つて、今後に望みを屬すべきものは只一つ――それは、かの殺された兵士の衣囊から發見した、ラシヌールといふ署名の手紙あるのみだ。

この手紙は、書簡紙の隅の臘ろげなマークから察すると、ボオマルシエ街のカッフエで認めたものにちがひない。

そこで彼はすぐにボオマルシエ街へ行つて、そのカッフエを探し出して、主人に手紙を見せると、その用紙はたしかに、店に備へつけの書簡紙だと承認した。が、ラシヌールといふ名前は誰も知らなかつた。主人はもとより、細君も、帳場にゐた若い女も、給仕達も、そのとき來合せてゐたお客達も、そんな名前は聞くも初めてだといふことであつた。

多分そのラシヌールといふ、ふりの客が偶然その店へ入つて、備へつけの用紙を使つたといふだけのこだらう。

「又まんまと當てが外れた。今度はどうしようか。」

ルコックは思案にくれたが、殺された兵士が呼吸を引き取る前に、ラシヌールといふ男が元役者であつたといつた言葉を、ふと思ひだした。



溺れる者は藁をも捉むといふ譬どほり、ルコックは、この「役者」といふ事實に、後生大事に取りすがつた。そこで早速方向を換へて、劇場の多い街へ出かけて行つて、

「ラシヌールといふ役者を知らないか。」

と、あらゆる劇場を片つ端から訊きあるいた。しかしその答へは、何處でも同じやうに、「知らない」といふのだ。或る者は、そんな無名の俳優を探しあるく彼を嘲笑つた。稀に、「どんな顏の俳優か？」と問ひかへされたが、何と說明していゝかわからなかつた。貞女トアノンが「立派な人」だといつたのを聞いた以外に、その男について何も知らないのだ。

「立派な好男子ですよ。」

かう答へるより外はなかつた。けれど、トアノンの「立派」といふ語は、尊敬すべき年輩の紳士といふのか、容貌風采が美しいのか、それとも單に金持ちらしく見えるためであるか、一向要領を得ない。またどうかすると、

「どういふ役を演る俳優ですか。」

なんて訊く者もあつたが、これには全く答へることが出來なかつた。

そこで今度は旅館や下宿の止宿人名簿を調べ始めた。朝、寢床を飛びだすと、夜遲くまで、旅館や、下宿や、貸間をやつてゐる家を、片つ端から調べてあるいたが、つひに發見出來なかつた。

そんなわけで、ラシヌール探しは、まつたく徒勞に終つたのである。

# 一八、暗號手紙

メイは無論のこと、シュバン婆や、その倅のボリットや、嫁のトアノンや、マリアンブール旅館の女將――これらの間には、どうも祕密の聯絡があるらしい。彼等は暗默の裡に氣脈を通じて、官憲に對抗してゐるとしか思へないのだ。

殊にメイは、喚問の回を重ねるごとに圖々しくなつて來て、

「何故こんなに永く私を未決監に入れておくんですか。早く公判に廻して下さい。それとも貴官方の御見込では、やはり私は偉い名士でゝもあるのですか。」

と判事を耶喩つたりして、その態度は實に傍若無人だつた。

彼は逮捕されたときに、多少の金を身につけてゐたが、その金で、獄則の許す範圍内で種々小さな贅澤をやるのを喜んだ。この頃はブーランゼの小唄集を一部差し入れてもらつて、一日一杯それに讀み耽る。時には大きな聲で朗吟する。それは、自由の身になつてから、そんなことも舞臺で役立てようとする意嚮らしくも思はれた。

何しろ彼はむやみと舞臺を戀しがる。あの夢幻的な五彩の道化服や、興味に緊張してゐる觀客の大衆や、彼の得意な口上のことなどをおもひ出しては、堪らなさうにぽろ〳〵と涙を流す。さうかと思ふと、機會さへあれば、看守達をつかまへて身の上話をやる。



彼の最も得意とするのは、シンプソン一座とともに諸國を打つて廻つた經驗談だが、何しろ旅藝人の話しだから素敵な珍談に滿ち充ちてゐるので、看守達も退屈しのぎに、それを聽くのを樂しみにしてゐる。そんな風で、彼は入獄してから二週間目には、謹直な典獄をはじめとして、看守や、警官や刑事達から特別の好意をもつて取扱はれるやうになつた。

なほ、メイに取つて有利なことには、警視廳第二部の探査の結果、彼が路傍に捨てられてゐた自分を拾ひあげて、育てゝくれたと申し立てた、トレングロといふ旅藝人は、實在の人物であつたことが判明した。しかし惜しいことに、その者は數年前に死亡したのであつた。それからシンプソンなる者について、獨逸へ照會すると、それは興行師としてその社會に相當名を知られた成功者であるといふ回答が來た。

そこで典獄は、いよ〳〵メイの申し立てに信用をおくやうになり、つひに判事へ宛てゝ、

囚人メイは、決して假裝の人物にあらず、彼自から陳述せるとほり旅藝人に相違御座無く、この點何等疑ふべき餘地なしと認め申し候。

といふ所見を提出した。尤もこれを提出するについては、ゼプロール警部の差し金も多少はあつたのである。

さてかうなると、警察部内は無論のこと、裁判所方面でも、この囚人が旅藝人であることに疑ひを挿む者は、一人もないといふ有樣。それも普通からいへば當然のことなんだが、氣の毒なのはセミュ